
ファルシオン学園の闘争記

久露埜 陽影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファルシオン学園の闘争記

【Nコード】

N9449U

【作者名】

久露埜 陽影

【あらすじ】

魔法学園に入学した神の力を持つ兄妹、小泉空也と蒼井 黎。妹の黎は学園史上最高の魔力を持つ超優等生。

一方の兄の空也は学園史上最低の魔力を持つ超劣等生。

2人はこの学園での生活を始めるが、そんな2人の前にさまざまな「闘争」が訪れる……！！

試験編がギャグ、その他の編は基本シリアスです。

所謂主人公最強、チートです。
感想・評価ともに辛口・甘口問わずお待ちしております。

Battle・0 プロローグ

魔法。

それは時として邪悪を抜い、時として国を滅ぼす。

『魔法』の発生は、遙か昔に遡る。

この世界には2つの大陸がある。

1つは神を信じない人間が支配する大陸『アジャー』、
もう1つは神を信じるエルフが支配する大陸『ウイジャー』。

魔法が発生したのは、大陸『ウイジャー』のみだった。

かつて、突如『ウイジャー』に発生した『魔物』。

魔物達の目的、魔物達の司令塔…未だに定かではないが、
魔物達はエルフを蹂躪し、貪り尽くそうとした。

エルフの数は本来の2割程度まで減少してしまったが、

残されたエルフは必死に神に祈り、自分達が助かる事を願った。

そして…神はエルフ達に自らを守る力を授けた。

それが魔法だった。

魔法の力を得たエルフは魔物と戦いを繰り広げ、勝利した。

その後、エルフは新たに生まれてきたエルフに魔法を教えるため、
此処『ファルシオン魔法学園』を建設した。

…そして何故、そこに諸君ら人間がいるのかは…

君らが一番良く知っているだろうが…

その辺りも一応授業でやるので、きちんと歴史勉強にも励むように。

——以上、校長先生の…

馬鹿者！！わしは話を終えるとは言っておらぬわ！！

影が舞う。

ファルシオン学園の一生徒の少年が影に纏われる。

「…これで…これで、僕は…！！」

『ああ…これで誰もお前の名を忘れない。

お前は得たのだ。何者をも超越する力を！！』

少年は笑みを浮かべる。

その体に纏うモノが一体どれほどのものなのか…

少年は、知る由もなかった。

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

設定資料集（Battle・42までのネタバレを含む）

種族

エルフ

神に授けられた魔力、魔法を駆使して発展に成功した種族。大陸『ウィジャー』に住んでいる。

現在では人間との血統者が殆どで、人間と交わっていない純系エルフは稀。

かつては神に見入られていない民として人間を見下し、人間大陸のアジャーに行くことすら禁じていたものの禁断の愛が芽生える場合もあったようで、そういったエルフが次第に増え、ほぼなし崩し的にアジャーへの立ち入り禁止と人間差別は廃止された。

…古参エルフの中にはその措置が気に入らない者もいたようだが…

純系エルフで現在登場しているキャラは3人。

校長、ファルシオン卿。

教頭、トゥリアス・イトウス。

ルシフェルと連絡をとっている謎の男の3人である。

人間

神の力を借りることなく、科学的発展を遂げた種族。大陸『アジャー』に住んでいる。

魔法に頼っていたエルフより身体能力、頭脳などが総合的に勝っている。

その他は現実世界の人間と変わらない。

ハーフ

人間とエルフのハーフ。

古代では差別の対象であり、最悪殺されてしまうこともあった。

しかし永い時の中で差別は見直され、今では世間に認められている。

エルフの母から産まれるものはエルフ、人間の母から産まれるものは人間となる。

人間はエルフの血を引いていても魔力を持っていないことが多いが、

エルフは人間の血を引いていても魔力を持っている。

…しかし、エルフの血が薄くなるにつれ魔力は少なくなっていく。

また、人間の中にも稀に魔力を宿すものが生まれる。

そういった人間やエルフに魔法を教えるため、ファルシオン学園が設立された。

神

遙か昔、エルフに魔法を授けたもの。

無関係。

エルフに魔法を授けた神はこの世界の神で、空也や黎とは神は不特定多数存在しており、神の中でも位が分けられている。

低級神<中級神<上級神<監督神<神域兵<神域兵長
<神域軍師〃神域記録係<6色の力<総合神<創造神とな
っており、

ソルは低級神に位置し、空也と黎は6色の力に位置している。

魔物

『ウィジャー』に突如出現した謎の存在。

その多くは破壊衝動のままにエルフを殺し、建物などを破壊した。魔法を身に付けたエルフに駆逐されるが、その後もウィジャーから湧き続けている。

種類にもよるが、殆どがエルフを遥かに超越する力を持っている。

何故、何処から発生しているかは不明。

魔物と呼ばれているが、力の大きさを分けられており

魔物<魔獣<夢魔<魔神となっている。

全ての魔物の中で魔神だけは別格であり、
他が種族ごとに複数いる（サキユバス種という種族は1種だが、
サキユバス種の魔物は複数いる）のに対し、

魔神は1種ごとに1匹しか存在しない（水晶魔神という種族は1つ
で、

水晶魔神という種族に属する魔物は『水晶魔神クリア』1匹のみ）。

魔物・魔獣・夢魔と魔神は起源が違うのではという説もあるが、定
かではない。

魔法

神がエルフに授けた力。

炎・氷・風・雷・光・闇の6属性と無属性の魔法がある。

魔法を使用するには魔力が必要。

魔力が多ければ魔法を多く使えるうえ、魔力を多く使う魔法も使用
できる。

また、魔力を使いきってしまうと当然魔法は使えない。

エルフは必ず少なからず魔力を有しており、
人間と交わりエルフの血が薄くなればなるほど生まれ持つ魔力は少
なくなる。

また、魔力は感情に左右される。
その為、怒りに任せて魔力を解放するなど言語道断で大変危険な行
為。

最悪、破滅的な大爆発を起こし国ごと滅ぼしかねないのだ。
なので、ファルシオン学園では精神的な教育などを徹底している。

…つまり、久城はああ見えて感情のコントロールはできていたらしい。

魔法は不可能を魔力によって可能にする奇跡のようなものである。
但し、大きな奇跡を起こすにはそれ相応の魔力が必要で、

【死者を復活させる】

【神に干渉する】（空也、黎、ソルは時空に直接居るため計算外）

【世界の概念を変える】

【時間を操る】

以上の奇跡は“絶対に起こせない”。

更に、危険すぎる魔法は禁術として指定され使用を禁じられる。

いかに奇跡といえど、守るべき規則はあるのである。

Battle・1 VS入学

——ここファルシオン学園は稀に生まれる魔力を宿した人間。その人間たちがその魔力を正しく使えるよう導くのがファルシオン学園の役目。

——生徒たちよ、存分に学べ。

そしてその稀有な能力を、世の為人の為にいかす様に…。

(空也さん、空也さんっ!!)

不意に体を揺さぶられた。俺に囁きかける声が聞こえる。

どうやら、校長のあまりに冗長でつまらない話を聞いていたらいつの間にか眠ってしまっていたようだ。

我ながら立ったまま眠ることができるとは感心する。

眼が覚めてしまったので辺りを見回してみる。

隣にいるのは俺の妹。

さらさらとした黒い髪と、青みがかった黒い瞳が特徴的。
どこにでも野獣^{リコン}はいるので、俺が守ってやらねば。

(…どうしたんですか?)

(いや、なんでもない)

台に立っているのは校長。

紙のように伸びた髭や髪は白髪で、威厳を漂わせている。
耳がとがっている所を見ると、エルフ…
それも、人間と交わっていないいわゆる『純系』のエルフだ。

台の下に立つ教頭も同じで、
どうやらこの学園には純系エルフの教師が多いようだ。

俺はこいずみ小泉くみ空也。
妹のあおい蒼井れい黎と共にこの学園に入学した。

俺達には秘密がある。

人には：「人間」には言えない秘密だ。

俺達は所謂『神』の力を持っている。
その力は強大で、あるものは恐れあるものは敬うだろう。
しかし、神にも守るべき法はある。

それは、『人間に神の存在を知られてはならない事。』

過去からのしきたりで禁忌とされているため、
俺達は神である事を絶対に隠しとおさねばならない。

ちなみに、神は自分で自分に名前をつけられる。
故に何も考えずに名前をつけ、後に苗字が違うという事に気付く。

神だからといって万能ではなく、抜けまくっているという事だ。

俺達が此処に入学したのはある人物が関わっている。

『亜空の邪神』と呼ばれる、セトという神のためだ。

セトは、今までに多くの『時空』を破壊している。

当然、そのような行為を見逃すわけにはいかないので、俺と黎はセトを追い、過去に幾つかの時空を救っている。

…まあ、今のところ敗北の方が圧倒的に多いわけだが…。

そのセトが、この時空に現れたと報告があった。

そのため俺と黎はこの時空に出向き…

情報収集などに好都合なためこの学園に入ったのだった。

入学早々校長の長話を聞かされるという拷問を耐え切った後…
入学した生徒全員はクラス分け検査を行った。

クラス分けの方法は少々変わっており、
「まず全生徒の魔力の量を検査し、その量ごとにクラス分けをする」
らしい。

そして俺の魔力量検査が回ってきた。
血圧計みたいな器具に腕を入れ…数十秒後、ピーツという音が鳴った。

「え…あ…。」

検査員の人が戸惑っている。

「どうしたんですか？」

「えー…あー…いや、その、貴方はトパーズクラスです。
トパーズクラスの教室は1階の隅ですので…」

どうも検査員の挙動が気になった俺は、一旦出てから聞き耳を立てる。

『さっきの子…魔力少ないわね…史上最低の魔力じゃない…？』

何だと。

史上最低！？

ってことはトパーズクラスってのは…

~~~~~

クラス分け案内

魔力が多い順から、

- ・ダイヤモンドクラス
- ・アメジストクラス
- ・エメラルドクラス
- ・サファイアクラス
- ・ガーネットクラス
- ・シトリンクラス
- ・ヘマタイトクラス
- ・トパーズクラス

当学園は以上の8クラスより構成されている。

~~~~~

OK、最低クラスってことか。

「まあいいだろ…最低だろうとなんだらうと、クラスメイトなんだし…」

魔力が最低なだけで性格や学力が最低なわけじゃないだろうしな。

教師が入ってきた。

メガネをかけた、背の高い男だ。

「はい、適当に自己紹介してくれ。」

教師の言ったとおりの適当な自己紹介を軽く聞き流す。
暫く経ち、教壇の前に立ったのは

黒髪に金髪ウィッグを混ぜている目つきの悪い男。
制服を着崩し、いかにも態度の悪い不良。

うつむ、顔とかは悪くないんだろうけどな…残念な奴。
そんな視線に気付いてか気付かずか、眼が合う。

…なんか視線を外したら負けな気がして視線を外さなかった。

「…ハウエル・シュタインだ。」

その男の自己紹介はすぐに終わり、次に俺の番が回ってきた。

（なに、さっきの人…不良？）

（しっ！こつち見てるぞ…！）

（うわ、恐れ…！）

「小泉空也です。まあ、よろしく。」

我ながら雑な自己紹介を終えて席に着く。

先ほどのハウエルという不良がやたら睨んでくる。

どうやら眼をつけられたようだ。

まあ、俺にとっては些細な事だが…。

俺は今日からこの学園の寮に住む事になる。

黎と合同の部屋。…やはり何か背徳感がある。

しかし黎が来ない。今日は顔合わせだけだから短時間で終わるはずだが…？

黎は可愛いので邪なる欲望を持った野郎が良く集る。

…違うぞ！？決して俺はロリコンではない！！

気になった俺は校舎へ引き返した。

「そーいや黎は何クラスなんだろうな…」

とか言ってみたものの心の底では分かっている。

…ダイヤモンドクラスだ。

ダイヤモンドクラスはトパーズクラスとは真逆方向の隅にある。

おおかた、ダイヤモンドクラスの教師の話が長いとかそんなんだと思うが…

教室の窓から中を覗き込む。

だが誰もいない。あるのは魔力を高める効果を持つ水晶…のレプリカ。

トパーズクラスにはこんな綺麗なものは一切無く、飾り気の無い教室だった。

…いかん、何か腹立ってきた。

ともかく、教室にもいないとなると何処にいるのか分からない…

暫く途方に暮れていると、誰かが歩いてきた。
そちらの方向に目をやると、黎の姿があった。

「黎！一体今まで何処にいたんだ？」

「あ、空也さん。今までちょっと試験を受けてたんです。
待たせてゴメンナサイ。今終わりました。」

「試験？ダイヤモンドクラスでは初日からそんなものあるのか…？」

トパーズクラスは自己紹介後早々に解散。

後日の連絡とかそういうものも全然無かった。

「いえ、ダイヤモンドクラスの人たちはもう帰ったと思います。私が今まで受けてたのは進級試験です。」

進級試験？

ああ、そついや生徒手帳にそんなものが書いてあったな。

12回の試験を全てクリアする事で卒業することができる。

但し挑戦できる限界は11回の試験までであり、最後の試験は3年間学園に通ったもののみ受けることができ、12回の試験をクリアした時点で卒業できる。

かなり酷いシステムだと思う。

だって12回の試験がクリアできなければいくらでも留年させるわけだ。

んで、黎は初日からその進級試験を受けたらしい。

「これに残ってるのは1回だけなんですけど、12回目はまだ挑戦できないそうです……」

「ああ、生徒手帳にもそう書いて……ってええ!!?」

残ってるのが1回だと!?

「まさかとは思うが…黎…
初日から１１回連続で試験を受けてこの短時間で全部クリアしたの
か…!!!？」

流石にそれは無いと思う…が…

「はい。結構簡単でしたよ？」

「簡単なわけないだろうーっ!？」

恐ろしい子…!!

こうして俺の魔法学園での生活は始まったのだった。

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

B a t t l e . 1 V S 入学（後書き）

次回予告

初日から不良に眼をつけられた空也。
翌日、空也はある光景を目にする。

次回 B a t t l e . 2 V S ハウエル

「とつとどつか行けよ。それとも痛い目見たいのか？」

Battle・2 VSハウエル

あれから数時間経った。

俺達は学園から支給された教員寮に来ていた。

何故学生が教員寮に住んでいるのかは、追って説明しよう。

「おお、変な柄のカーテン。後で早速取り外すか。」

…これが第一声。

折角支給された寮を第一声から改造しようとする俺、流石。

「ダメですよ、空也さん。」

アレは風水的に効果のある柄なんです。」

そうらしいです。

翌日。

黎と共に登校するが、何か周囲からの視線が…

『ねえ、あの子が初日から11回試験を受けて合格したっていつ…？』

『あの子可愛いなあ』

『隣の男が邪魔で写真が…』

黎は昨日11回連続で試験を受け、全てを合格するという離れ業をやったのけた。

その噂が既に学園全体に広まっているのだろう。

勝手に盗撮しようとしているのは新聞部か何かだろう。

黎を勝手に撮影する事は俺が許さない…!!

ダイヤモンドクラス

「キィ〜〜〜!!」

何で私よりもあんなお子ちゃまが目立っておりますの!？」

「ま、まあまあ、仕方ないですわよキャロン様。

えーと、あの子は…えーっと…(上手いフォローが思いつかない…)

」。

騒いでいる少女は灰色の制服を身に纏っている。
ダイヤモンドクラス生だ。

少女の名はキャロン。

さらさらとした金髪、茶色の瞳。

整った顔立ちは、「可愛い」というより、「美しい」といったほうが正しいだろう。

キャロンとその御付のアルカの元へと、1人の女子生徒が駆けてきた。

この女子生徒、フォルスも御付の1人である。

「アルカ、蒼井 黎って娘の噂聞いたあ？
何でもキャロン様をも上回る魔力を持つてるとか…」

「フォルス…！！隣に…！！」

「え？」

「フオ~~~~ル~~~~ス~~~~！！」

もう完全に堪忍袋の緒が切れましたわ！！喰らいなさい！！」

キャロンの掌に青い光が溜まっていく…そして…

シューウウウ…

魔力を解放するかに見えたその魔法は、急に収束しその力を失った。

「「「え……！？」」」

指先に白い光を灯した黎がおずおずと3人に話しかける。

「あの…校内で攻撃魔法を使ったら、校則違反になっちゃいますよ…？」

「わ、私の魔法が消された…！？貴方は何者なのです!？」

「あ、私はダイヤモンドクラスに属する蒼井 黎です。
よろしく願います。」

（な…この娘が…!？
噂ほどの圧倒的な魔力は持っていないようだけど…？）

「あ、そろそろHRが始まりますね。失礼します。」

黎は走って去っていった。
後には、色々な意味で放心しているキャロンから逃げようとする御
付2名。

「あのー、キャロン様…」

「私たちはそろそろ…」

「お待ちなさい」

御付の肩がビクッと跳ねる。

「あの娘は噂ほど圧倒的な魔力は持っていなかった。
…ならば!…」

あの試験合格も根も葉もない噂という事!…」

((ええ~~~~~!?))

「っと、そろそろHRですね。」

ファルス、アルカ。貴方方もエメラルドクラスにお帰りなさい。」

「は、はい…」

机に頬杖をつきつつ、退屈なHRを聞き流す。

…悔しくなんか無いさ…妹が史上最高魔力で俺が史上最低魔力でも…

……悔しくなど…ない…っ!!

いかん、心が折れそうだ。

この学園では、時間割は自分で組み、習いたい魔法を習うことができる。

俺達は現在、その時間割を組んでいる所だ。

攻撃魔法系

- ・ 攻撃魔法炎 A
- ・ 攻撃魔法炎 B
- ・ 攻撃魔法氷
- ・ 攻撃魔法風 A
- ・ 攻撃魔法風 B
- ・ 攻撃魔法雷
- ・ 攻撃魔法光
- ・ 攻撃魔法闇 A
- ・ 攻撃魔法闇 B

回復・補助魔法系

- ・単純回復魔法
- ・複雑回復魔法
- ・異常治療魔法
- ・靈魂救済魔法
- ・能力強化魔法
- ・空中飛行魔法

特殊魔法系

- ・召喚魔法A
- ・召喚魔法B
- ・召喚魔法C
- ・鍊金魔法
- ・禁断魔法
- ・特殊能力解放

以上だ。

ちなみに俺にはほぼ魔力が無い…ので、こういうことになった。

月曜日

- 1時限 特殊能力解放
- 2時限 特殊能力解放
- 3時限 特殊能力解放
- 4時限 鍊金魔法
- 5時限 鍊金魔法

金曜日
1時限
特殊能力解放

木曜日
1時限 鍊金魔法
2時限 特殊能力解放
3時限 鍊金魔法
4時限 特殊能力解放
5時限 鍊金魔法
6時限 特殊能力解放

水曜日
1時限 特殊能力解放
2時限 特殊能力解放
3時限 特殊能力解放
4時限 鍊金魔法
5時限 鍊金魔法

火曜日
1時限 鍊金魔法
2時限 鍊金魔法
3時限 鍊金魔法
4時限 特殊能力解放
5時限 特殊能力解放
6時限 特殊能力解放

2 時限	錬金魔法
3 時限	特殊能力解放
4 時限	錬金魔法
5 時限	特殊能力解放

完璧。

「ダメだ。」

「何故ですか。心外です。」

「当たり前だろ。これ2つしかないじゃねえか。
最低でも9つの教科を組み合わせて組め。
…ったく、こっちが心外だよ」

「ですよー」

結果、全ての日に例の2つの教科が含まれている。
が、5つの攻撃魔法、2つの補助魔法を加えた。

時間割を組んだ所で、今日の授業は終了。

明日の授業からは自分で組んだ時間割で授業を受けることになる。

だが、まずは顔合わせと自己紹介から始まるだろうから、

結局授業が始まるのは木曜日という事になる。

さて帰ろうと校門を潜る。

… ああ、教員寮は裏門からのほうが近かったな。

「なんだとコラア！」

ドスの効いた声が聞こえた。

その方向に行くと、初日に俺に眼をつけていた不良…

ハウエル・シュタインが一般人に絡んでいた。

「いいからとつと金出せよ。持ってたんだろ？」

「ヒイイ…」

何をやってるんだか…。

ハウエルは初老の男を殴ろうとする。

「いつ！？いててててて！！」

「やめろ。年上の相手を敬いもせず何をやってるんだお前。」

ハウエルの手首を掴み、パンチを止める。

ハウエルは俺の腕を振り払うと、俺を睨みつけた。

「てめえ…トパーズクラスの奴か。」

てめえは最初から気に食わなかったんだよ…！」

ハウエルは俺に殴りかかるが、軽く避ける。

ガシャン、とフェンスを殴る音が聞こえた。

俺はその体制のままハウエルにボディブローを喰らわせる。

「ぐうつ」

「まだまだだな、格闘の基本がなっていない。」

そんなんじゃ俺に喧嘩を売るのは早すぎるだろう。」

「…んだと、てめえ…！」

俺はハウエルの腕を掴み、フェンスに投げつける。
再びガシャン、という騒音が響いた。

「…んのやる…！」

「お前ら、そこで何してる！？」

警備員だ。

ファルシオン学園の外には多くの警備員がいる。
学園の外で起きた事は立派な犯罪。

なので、外側の警備に重点を置いているのだ。

「ヤッベ…!!」

ハウエルはこういう場合には馴れていないらしく、あたふたとしている。

このままじゃ俺も一蓮托生だ。仕方が無い…

「逃げるぞ」

「は…?」

「うおおおおおおおつ!」?

ハウエルの腕を掴み猛スピードで逃走。
一般人にはこのスピードはきついかな?

とりあえず、学園から離れ男子寮にやってきた。

「ハア、ハア…逃げ切ったな。」

「お、お前…何者なんだよ…。
まだ魔闘術は習ってないはずだろ…?」

魔闘術、とは魔法と体術を組み合わせた闘法の事。
おおかた、魔法で加速したと思われたようだが、
今のはただの俺の超・全力疾走だ。

「何者、って言われてもな…。(神だ、とか言えねーし)
俺はただ運動神経が良いだけだ。

…あ、俺教員寮だった。」

「あ、おい！！まだ話は…！！」

「じゃな。俺は不良を全否定したりはしないが、
絡む相手は考えたほうが良いぜ？」

「オイ、待——」

ハウエルがまだ何か言っていたようだが、
俺はその場から姿を消した。

「…なんなんだよ、アイツ…？」

ハウエルの声は、闇夜に投げ出され拾われる事はなかった。

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

B a t t l e ・ 2 V S ハウエル（後書き）

次回予告

いよいよ魔法の授業が始まった。

魔力の無い空也はその授業に苦戦するのだが…

特殊能力解放授業で、空也の新しい力が覚醒する！？

次回 B a t t l e ・ 3 V S 覚醒する力

「力を求めるか…」

B a t t l e Ⅲ V S 覚醒する力（前書き）

特殊能力解放授業しか書けなかつたです。

Battle・3 VS 覚醒する力

寮

寮はダイヤモンド寮、トパーズ寮などに分けられている。
だが…俺、空也は妹の黎と同室。

黎の年齢では一人暮らしは厳しいと判断したらしい学園側は、
兄の俺も同時に入学すると聞いてこれ幸いと同室にしたのだった。
その代わり…というか、俺達の部屋は他の部屋よりも広い職員用。
何でも、職員が1人辞めていったので、その部屋を使わせてくれる
らしい。

「空也さん、今日の料理は何にしますか？」

「あー、俺が野菜炒めでも作るか…」

「いや、それはやめましょう。冷凍食品とか…」

「いや、それはやめておこう。料理で…」

「どうして毎回俺の料理を否定するんだーっ！っ！」

「どうして毎回私が機械を使うのを否定するんですかぁーっ！っ！

「！」

俺たちにはそれぞれの弱点がある…らしい。

黎が機械に触れるとその機械が…という原理かボロボロにぶっ壊れる。

で、黎が言うには、俺が料理を作ると殺人兵器ができるらしい。

決してそんな事はない！！あるはずは無い！！

———
ファルシオン学園・特殊研究室。

「私は特殊能力開放授業を担当する、アルペジオン・フェンリツヒ。アルペジオンでいいです。」

何となく硬派なイメージを受ける眼鏡をかけた女の先生が入ってくる。

魔力が無くても特殊能力というものは使えるらしい。

なので、俺のように魔力の少ない生徒は結構この授業を取っている。

魔力を使わなくとも、一応試験を受けることはできる。

なので、魔力のない生徒は特殊能力を使って試験を受ける。
俺もその1人であり、特殊能力で試験を受けるつもりだ。

ちなみに特殊能力は人それぞれで異なり、しょぼいものから凄いものまであるらしい。

俺の能力…頼むからまともなものであつて欲しい。

「特殊能力開放の授業の内容は…正直言って、
傍から見れば何してるのか分からないようなものです。

しかしそういったことを繰り返すことで、特殊能力を得ることができるといのが

私が独自に編み出した計算により導き出されています。

だから、意味が分からないと途中で投げ出しても構いません。

特殊能力解放授業だけは特別に別の授業への変更が許可されています。」

周りの生徒がザワザワと騒ぎ出す。

まあ、自分の授業を変えてもいい、なんて言われたら違和感も抱くだろう。

特殊能力解放授業は本当に何のこつちやな授業だった。
スタンプカードを全部埋めて提出しろとか、絶対自分のためのもの
だろ…。

当然、そんな授業を続けては… 1人、2人と授業を受ける人数は減
っていく。
残っているのは4、5人。俺を含めて。

そんな中、アルペジオン先生が語りだした。

「…こうなる事は予想できてました。
だって一部は本当に関係ないですからね。」

やっぱりか。そりゃスタンプカードと特殊能力は関係ないだろう。

「…しかし、人間の願いを叶えるという事は特殊能力解放にも繋が
ります。

あなた方はこれまで私の願いを結構叶えてくれました。

…だから、そろそろ頃合いです。」

瞬間、アルペジオン先生から強烈な光が放たれ、視界を奪われた。

『力を求めるか…』

「何…？誰だ…？」

白い光の中で誰かが俺に話しかける。
目の前で赤い…スライム状の物体が人型を作っていく。
その姿は…

「俺…！？」

全てが赤いスライム状の物体で形成された俺の姿。
なんなんだこれ…白い光は晴れないまま。

『俺は俺であってお前ではない。
力を欲するならば俺を倒せ。そうすればお前の特殊能力が解放される。』

「は、はあ…そうなのか…。」

という事はこれはアルペジオン先生の魔法なのか。

『…来ないのならば、こちらから行こう。

blood summons…アロー!!』

スライム状の俺は腕の辺りのスライムを矢のようにして飛ばしてきた。

寸前で避けるが、すでに目前に俺の形をしたスライムが迫る。

『blood summons…スピア!!』

今度は腕の辺りが変形し、槍状に変化した。

上体を反らして回避し、そのままスライムを蹴飛ばす。

スライムは吹き飛んだが、そこは俺のコピーだけあって身体能力はかなり高い。

空中で体勢を立て直した。

『blood summons…フロアー』

スライムの体の一部が千切れ、ブロック状の足場へと変化する。
そしてスライムは足場を強く蹴り、俺に向かって加速。

『blood summons…クローー!!』

加速した勢いを殺さず、スライムは腕を鉤爪状に変形させる。
そして俺の体を…切り裂いた。

「ぐ……っ!!」

腕の肉が引き裂かれると同時に鮮血が迸る。

しかしこれは好都合。さっきから動き回るこいつを捉えられた。

片腕に鉤爪が突き刺さったまま、俺はもう片方の腕でスライムを思い切り殴りつけた。

『ぐばっ』

一般人ならばこの時点でぶっ倒れているだろう。
さすが、タフだねえ、俺。

『…フフッ。上等だ——』。

blood summons...!!」

「とつとつ——ぶっ倒れる!!」

> i 3 2 4 6 0 | 1 5 6 3
<

B a t t l e . 3 V S 覚醒する力（後書き）

次回予告

特殊能力解放のため、自分との戦いに身を投じる空也！

しかし、特殊能力を使いこなすスライム空也はやはり一枚上手で…！？

次回 B a t t l e . 4 V S 『血』

「b l o o d s u m m o n s …」

Battle・4 VS 『血』

只今の俺の負傷は…
腕に鉤爪で引き裂かれた痕。右腕が使えない。利き手じゃないから良かった。

そして只今のスライムの負傷は…
頬に思い切り殴られた痕。一般人ならぶっ倒れるレベルの打撃。

『blood summons…フレア!!』

スライムの腕辺りからシャボン玉状の泡が飛び出す。
そのまま俺の所へと向かうシャボン玉。

先ほどのまでの攻撃に加えいきなり緊張感がなくなるが…
フレアというからには炎の類か。

当たったらマズイ!!

前転でシャボン玉を回避し、速攻でヤツとの間合いを詰める。
…が、

『blood summons…フロア!!』

「のわっ!?!」

間合いを詰めようと走り出すと、いきなり床が動き出す。

床を見ると、先ほどから使ってきているこの能力で床を作っているらしい。

その床はベルトコンベア状に俺の行き先と逆の方向に動き出す。

『これが俺の特殊能力、』 blood summons だ。
：俺の血を自在に操ることができる能力。

あらゆる物を作れ、固体化、気体化、液体化：何でもできる。

便利だヨー。 blood summons：ブロックレイン！！』

あのふざけた口調：間違いなく俺そのものをコピーしてるんだな。
スライムの腕辺りが千切れ、上へと登っていく。

血によって創られた床を飛び越え、スライムとの間合いを詰める。
そしてそのまま殴りつけた。

が、スライムは液状に分散し、消えていく。

『 blood summons：デコイ。
そろそろ雨が降るぜ？』

「雨…？」

上を見上げると大量のブロックが降ってくる。

相当大量のブロックが降ってきているので、回避で精一杯だ。

何とか全てを回避する。

その間何もしてこないとは紳士だな。ま、俺だしな。

ていうか…

「お前…体小さくなってきてないか…。」

『俺はお前の中の『血』だ。』

さつき調子こいて大量に血を使ったから段々体が縮んできてる。

フロアとかスパ、アローはともかくさつきのは痛かったな…』

「遊ぶからだろ…。(俺ってこんなにふざけてるか…?)」

『うん…そろそろ戦えないレベルまで縮小されそうだから、』

——そろそろ本気でやろうかな。』

「——っ!」

来るか。

『blood summons…ストーム!!』

blood summons…サウザンドアロー!!』

血で創られた赤い竜巻。

どうやらこの能力は擬似的に魔法を作り出すことができるらしい。
さらにその竜巻にのせて無数の矢が俺に飛んでくる。

一発目は顔面に。首を横に倒し回避。

二発目は体に。体ごと後ろに倒して回避。

…と、上手く避けられたのはそれまでで、三発目の矢は脚に直撃。

四発目、五発目と体に掠り、その度に血が流れる。

六発目は手で弾き、七発目は首に掠る。

八発目、九発目も体に掠り…十発目は…

俺の腹に、突き刺さった。

「が…はああ…っ!!」

…血が。俺の血が足元に水溜りを作る。

まさか…これほどの力とは…見誤ったか。

『まだ解放には早かったか…!!』

あの教師、いい加減なタイミングで…!!』

「…何、を？」

『特殊能力の解放には時期がある。』

人の願いをより多く叶えたほうが解放はしやすくなる。

そして解放とは…特殊能力を使う自分自身と戦って倒す事。
人の願いを叶えれば叶えるほど俺の力は制限される。

ただとお前はまだイマイチ人の願いを叶えていなかったようだ…。

だからまだ完全に俺の力は制限されていない。

その状態じゃ、特殊能力を持った俺が勝つのは当然。』

だろうな。低スペックのPCと高スペックのPCを比べているのと同じだ。

というか…

「この場合…俺はどうなるんだ？

俺は…死ぬのか？」

『…さあ？俺は特殊能力解放によって呼び出されたモノ。

特殊能力解放についての知識は叩き込まれたが、その後の事はなんとも…』

「…は？」

『ごめんなさい。知りません。』

「…マジで？」

『…マジで。頑張つて。』

「——はっ」

目が覚めた。

白で統一された室内。鼻につく薬品の臭い。

ていうか保健室。俺は保健室のベッドに寝かされている。っぽい。

「——気がつきましたか。」

「アルペジオン先生、——っ！！」

「無理をしないでください。」

起き上がろうとすると、腕と腹部に激痛が走る。

どうやらあの世界でのケガが現実とも連動するらしい。

「…申し訳ありません。」

今回の事は全て私の責任です。一般ではこの程度で能力が使えるのです…

あなたの能力は特別強力なようで、まだ下積みが必要だったのです。

「

「…特殊能力を使うもう1人の俺を完全に拘束するためか…」

「何故、それを…!？」

「…そうですね。もう1人の貴方から…」

「…それと、伝言です、先生。」

「何ですか？」

「…『次に特殊能力解放をするときに回路を辿ってお前を潰す』…と。」

「……………」

「…そうですね。それ…本気っぽかったですか？」

「目が血走ってました。」

「……………そうですね。」

少し具合が悪いです。私も休ませてください…」

「おやおや、千客万来だねえ」

保健医の先生、客ではないと思うが…？

> i 3 2 4 6 0
— 1 5 6 3
<

B a t t l e ・ 4 V S 『 血 』 (後書き)

次回予告

結局特殊能力を得る事に失敗した空也。
そんな中、第一次試験の幕が上がる！！

次回 B a t t l e ・ 5 V S 第一試験

「僕の名はルシフェル。」

Battle・5 VS 第1試験

1月が流れた。

結局、俺は特殊能力を得る事は適わなかった。

そして、俺は魔法系の授業にはついていけず、特殊能力解放授業も相変わらずな感じだった。

そんな退屈な日々の中に、ある1つの行事が現れた。
だがその行事は決して楽しいものではなく、むしろ苦しみを増すものだった…。

「第1試験!？」

耳を疑った。何で行事として試験が入っている？

試験は誰でもいつでも自由に受けられるものと聞いてたんだが…。

「だが第1試験は特別でな。」

試験を受ける弾みとするため、行事に混ぜ込んであるのだ。
毎年5月には遠足がある。

——その遠足に第1試験を織り交ぜてある。」

さ、最悪だ…!!

「…ところで空也。」

「何だよ…」

ハウエルが話しかけてくる。

ハウエルは俺にボコられてから大分大人しくなり、
今やクラスでは一番親しかったりする。

…とはいえ、悪友といった感じなのだが。

「お前、腹と腕を怪我してんだろ？遠足いけるのか？」

「ああ、問題ない。もう治ったからな。…多分」

「多分!？」

「…傷口を直視したわけじゃないからな。

でも、体感的には治ってると思う…」

「そこ。俺の話を聞け。

…第1試験の内容を説明するぞ。」

「…第1試験には、1次試験と2次試験があります。

1次試験が筆記テスト。2次試験は実技テストとなっています。

1次試験はこの場でいい、2次試験を遠足当日に行う事になります。」

（空也さん、大丈夫かな…）

黎は空也の心配をしていた。

空也が大怪我を短時間で治療できたのは黎のおかげなのだ。

黎は既に治癒魔法をマスターしており、それにより空也の怪我はだいたい完治。

しかし…

（実技テストなんかで動き回ったら傷口が開いちゃうかも…）

黎は1次試験の内容を知っている。

何故ならもうすでにクリアしているからだ。

1次試験を2分程度、2次の実技テストを3分程度だという驚異的なスピードで。

「…ちなみに、黎さんとキャロンさんは受ける必要はありません。

1グループ3人、11グループでの行動となる。

竜を捕まえるに至るそのアイデアや魔法の使い方などで点数がつく。

「おう、空也。俺と組もうぜー!」

「ええ〜。」

「なっ!?!何だそのリアクションは!?!」

「冗談だ。んで、3人目はどうしようか…」

「失礼。2人揃っているようですので…僕を加えていただけませんか?」

声の聞こえたほうを振り返ると、黒髪に眼鏡といういかにも優等生風の男が居た。

短めの七三分けの髪型と小脇に抱えた本は勉強熱心的なイメージを加速させる。

「僕の名はルシフェル。トパーズクラスのクラス委員をさせていただいております。

これでも多少の魔法を扱う事はできます。

もし宜しければ、なのですが貴方方のグループに加えてはいただけませんか?」

「ああ。別に拒む理由も無いしな。

…にしても、同級生に対してそこまで謙った敬語を使う事ないんじゃないか?」

「…、失礼しました。これは私の性分ですので、どうにも治せないのです…。」

「そ、そうか。」

…なんだ、この違和感は。
このルシフェルという男…どこか不自然な気がする…。

「どうかしましたか？」

「ああいや！！何でも無い！！」

いかんいかん。俺の適当な直感でじろじろ見たら失礼だよな…。
ともかく、これでグループは揃った！！

「しゃー！！じゃあ竜を捕まえに行くぞ空也あ、優等生！！」
「ルシフェルです」

「で、作戦はどうする？」

バカ正直にジャンプして届くようなら苦労はしない。

飛行魔法か補助魔法…

或いは手荒だが竜の幼生に攻撃魔法を当てて打ち落とすって手もある。」

「…最後の案は却下ですね。

そのような手荒な真似をすれば竜の幼生が傷つきかねない。それでは原点対象になりますからね。」

「へえ、そうなのか。

んじゃ、作戦は…」

「ハイハイハイハイ！！俺、思いついた！！」

ハウエルが大げさに手を挙げる。

嫌々だが、一応聞いて置いてあげようじゃないか。

「何だよ。」

「ふっふっふ、聞いて驚くなよ！！」

幸い、このアヴァリオン・マウンテンには植物が大量に自生している。

それを利用してパチンコを作る。」

「…植物のつるを利用して、ですか？

で、何を射出するんですか？」

「え？そりゃ…石とかじゃねえ？」

「それじゃ減点だっていつてんだろ。

そんなんだったら魔法使ったほうが楽だし、魔法使ったほうが加点だ。」

「僕に考えがあります。」

「…作戦を確認するぞ。」

まず、竜は竜でも幼生なので、あまり長時間飛び続けることはできない。

故に時々地上に降り立つ必要がある。そこを狙って捕獲する。

作戦は以上だ!!行くぞ!!」

竜の幼生が1匹、降り立った。

(今だ、空也!!)

「うおおおっ!!」

『我が呼びかけにて現れよ…リッチー!!』

「へ?」

俺が竜を捕まえようと飛び出すと、横から死神…らしき魔物が飛び出してきた。

俺が邪魔だったのか、死神はその鎌で俺を吹き飛ばした。

「ギャーーーーっ!!」

先ほどの死神を見ると、竜の幼生を驚掴みにして捕獲していた。そして死神はUターンして竜を誰かに届けようとしている…。

その方向を見ると…

白いローブを着ている、金髪の童顔の男…

俺の知り合い、ソルがそこに居た。

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

Battle・5 VS第1試験（後書き）

次回予告

第1試験の最中に現れた空也の知り合い、ソル「フラバー」。

だが2人は再会を喜ぶような間柄でもなく…

しかもソルの召喚魔法によって呼び出された魔人リッチによって、空也の傷口が開いてしまう！！

このような状態で第1試験をクリアできるのか！？

次回 Battle・6 VSソル「フラバー」

「腹いせ♪」

Battle・6 VSソル「フラバー」(前書き)

high school of the deadの主人公は、
空也と結構見た目もイメージも近いです。

但し空也の眼は若干赤い。

Battle・6 VS ソル「フラバー」

「お、お前はっ！…空也！！」

「ソル！！どうしてこんな所に…」

「な、なんだなんだ。感動の再会ってところか？」

「どうなのでしょう…。」

「フッフッフ…」

「フッフッフッフッフ…」

「ハッハッハッハッハッハ！！」

俺とソルのヤツは同時に笑い出す。
そして…。

同時に武器を構えた。

といっても俺は素手。あいつは召喚獣のリッチ（いわゆる死神）が鎌を構える。

「お前が俺の管理下の時空から消えたとき…どれだけ修正に奔走した事か…！！」

おまけにお前も見失って！！ようやく見つけたと思ったらこんな所にいるとはなっ！！」

「…で、何で武器を構える。」

「腹いせ」

「…いいさ。お前には様々な借りがあるからな…っ！！」

ソル「フラバー」。

あいつは俺の…一応恩人って所か。

俺は人間となって神域を離れたとき、記憶を失っていた。

俺が訪れた時空は偶然にもソルの管理している時空で…そこで紆余曲折あり、

俺は記憶と能力を取り戻したのだった。

…で、数分後。

「…チッ、ようやく倒れたか。」

数分に渡る死闘の後、リツチを撃破。

しかし、ソルを逃がしたようだ。いきなり襲ってきたのだから、お灸をすえたかった。

「…くっ」

「大丈夫ですか、空也さん。しかし驚きましたね…上位魔獣を数分で倒すとは…。」

「で、何でそんなだけの力があんのに竜の幼生一匹に手こずるんだ？」

「余計なお世話でございます。」

…というか、今の戦いで動き回ったせいで…傷口が開いたかも。」

「ええー………っ!!?」

そ、それじゃ2次試験は…!？」

「無理かもっ」

「大丈夫ですよ。僕はいざというときのため…傷薬を調合してきましたからね。」

これを使えば一時的に傷口を塞ぐ程度の事はできます。」

そう言っつてルシフェルは懷から紫色の液体の入った小瓶を取り出した。

そして小さく何かを呟くと、液体が消えていく…。

と同時に、俺の傷口が塞がっていく。
これで2次試験は受けられるはず…だ。

だが先ほどの戦闘の間に竜の幼生はほとんど捕まえられている。
とすれば…………。

「やる事は一つ…!!」

ソルの野郎から竜の幼生を強奪するっ!!」

「その一択というのはどうなのでしょう…。」

「素直に捕まえたほうがいいんじゃないか？」

「いいや。先に攻撃してきたのはあいつだ。ならば正当防衛として…
減点対象にもならないっ!!」

（そうなのか…？）

（その辺りの規則は不確定ですが…多分駄目でしょう。）

何をひそひそと話しているかは知らないが…。

「行くぞ野郎共！！目指すはソルとソルの持つ竜の幼生っ！！
ヤツは恐らく…まだ竜の幼生を提出していない！！ 今なら強奪が
可能だ！！」

「ん…マズい、道に迷ったな…。何処に提出すればいいのやら…。」

ビンゴ！！

まだヤツは提出していない！！今がチャンスだ！！

「お命頂戴っ！！」

「のわっ！！？」

バキィッ

俺の鉄拳がソルの顔面に炸裂。
ソルは吹き飛ばされた。

「く、くくくく空也あつ!？
ななな何で襲い掛かって…」

「さつきはよくもやってくれたなあ!？
お前の持つ竜の幼生…此処で渡してもらおう!！」

「チツ、誰が渡すか!！」

ソルは懷から煌びやかな装飾の施されたナイフを取り出す。
そして…ナイフで自分の指を軽く刺した。

な、何やってるんだ…？

まさかアレか。自分で自分を刺しておきながら「あいつにやられた
」…的な？

いや…違うな。あいつはその程度の事すら思いつかないバ力だから
な。

ソルは自分の指を振り回し、空中に血をばらまいた。
その血の一滴一滴が形を作っていく…魔物が創られた。

どうやらこれはあいつの召喚魔法のようだ。

「^{マルチ}多重・^{サモン}召喚っ!…これで…近寄る事すらできまい!…?」

リッチやドラゴン…キメラ…様々な魔物が壁のように俺の前に立ち
はだかる。

「お、おい空也！？ソイツ…間違いなく上級クラス生だ！！
トパーズの俺らがかなう相手じゃねえって！！」

（フッフッフ…あの空也を…俺の前に屈服させられる日が来るとは
…っ！！）

思えば邪険に扱われ続けたあの日々…！！）

その瞬間、ソルの中で何かが切れた。

「喰らいやがれ空也ああああー……………っ！！」

「なっ…」

俺に対して一斉に飛び掛ってくる魔物達。

こいつらはこの時空では上級の魔物とされる強力な魔物。

マズい、かも……………。

ガンッ

バキッ

グシャッ

ザクッ

「そんな…何もそこまですることねえだろ！？殺す気かよ！？」

「……………」

「はっ、し、しまった…！？こ、攻撃止め！！
マ、マズい…！！暴走状態だ…！！攻撃が止まらない！？」

バキッ

ザクッ

グシャ…ッ

だが攻撃を続けていた魔物の山の頂上が突如吹き飛んだ。

山を崩して脱出した空也。

体は傷だらけで出血もしており、足元もふらふらだ。

だがその眼には…確かな“敵意”が宿っていた。
空也は口の中の血を吐き出す。

「上等じゃねえか…ソル…」。

そこまでヤル気なら…とことんやってやらあ…！」

ソルは感じた。

殺気……。圧倒的な、死の気配……。

一瞬にして魔物を沈め、ソルの目の前に移動。
返り血のついた腕を振り上げ……。

「フッ、ハハハハハ、ハッハッハハハハハハア!!」

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

Battle・6 VSソル「フラバー」(後書き)

次回予告

暴走状態の魔物を屠り、ソルの目の前へと…。

「やめろ!!!」

ハウエルの叫びが、空に木霊した…のだが…

次回 Battle・7 VS寝言

「マナ…い…た…」

Battle・7 VS 寝言

それは一瞬の出来事だった。

空也によって片付けられた魔物達。

そして空也は大将であるソルを殺せる状況だったのだ。

突然暴走した空也！

かつての恩人、仲間を…手にかけてしまうのか！？

「フ…ッ、ハハハハハ、ハッハッハハハハハア！！」

「や、やめろ！！空也！？」

ハウエルの叫びも、今の空也の耳には届かない。

この場にいる全員が空也の暴走に危機感を覚えていた。

…否、全員ではない。

唯一人…唯一人だけ、危機感を覚えていない男が居た。

——ルシフェルだ。

不気味に口元を歪ませ…笑みを浮かべていた。
その表情は眼鏡が光を反射して見えにくい。

しかし、直後に空也は自我を取り戻す。

その様子を見、ルシフェルは心の中で舌打ちした。

だがそのような事は表情に出さずにあくまで笑顔で空也に近づく。

「失礼しました、空也さん。

どうやら先ほどの傷薬…調合を間違えていたようです。

回復魔法のほかに…異常魔法をかけてしまっていたようです。」

「異常…魔法…？」

「ええ。一時的に対象となった者の戦闘意識を覚醒させ、
戦闘力を倍増させる魔法…」

ただし敵味方の区別がつかなくなるため、使用には注意が必要な魔法です。」

「あ……………」

空也はようやく自分の置かれた状況を理解した。

自分の体についた返り血。恐怖で泡を吹いて失神するソル。

そしてそこにある…大量の魔物の死骸。

「俺が……。」

そして突然、思考を遮る激痛が体に走る。

「っ!」

「先程、暴走した魔物の群れに襲われていましたからね…。
暫くは体を休めたほうがいいでしょう。」

「待て、その前に…」

言いかけて、激痛が走る。

言葉が遮られ、視界が歪んでいく…。

だが、意識が途切れる前にこれだけはやっておかなきゃな…。

泡を吹いて失神しているソルの手から竜の幼生を抜き取る。

（すまねえ……。）

そう囁いて、ルシフェルに竜の幼生を投げ渡す。

そして…意識を、手放した。

——竜の幼生を奪った事への謝罪ではない…。
先に攻撃したのはこいつだし、いわば自業自得だろう。

—— 恐怖を与えた事でもない…。
そんな事、以前も日常茶飯事だったから。

じゃあ、何に対して……？

わからない……………。

ただ、1つ。仲間に…友人に…襲い掛かり、殺しかけた事…。

決して、許される事ではないだろう……。

『貴様あああああゝゝゝっ！！』

ぎゃあああああああ——！！びっくりした！！
な、なんだなんだ…？夢……？

『久々の脳内通信だ。俺だよ、ソルだ。
今お前は意識を失ってる。お前の夢の中に通信中だ。』

…！？
つかてめえ！！俺の竜の幼生を…奪いやがったなああああ…
おかげで俺は2次試験不合格だ！！どうしてくれる！？』

ちなみに脳内通信とはソルが使う便利な念話魔法の事。
時空の管理神は時空に実体顕現できないため、
よくソルが使っていた。

『誰に対して喋ってるんだお前…』

気にするな。

つかさっきの件、自業自得だ。

そもそもお前が襲い掛かってきたんだからな。

1次試験で80点以上取れなかったのは誰だろうな？

『くう…！！それは反論できない…』

んで、俺は一体…。

『2次試験が終わってから遠足が開始されたんだよ。

…とはいってもキャンプみたいなもんだがな。

俺らアメジストもグループごとに宿泊だ。面倒くせえ。

で、お前は多分医務室キャンプににいると思うぞ。』

医務室か。じゃあ今治療中？

『多分な。滅茶苦茶なスピードで回復してるから魔法による治療だ
ろうな。』

なるほどねえ…俺も魔法が使いたいぜ…。

『つて、お前は魔法使えないのか！？』

そ。魔力が無いんだもん。使うに使えねえ。

『なあーんだ、そんな事。

そういう時にはな、購買でマナ・ストーンを買うのさ。』

マナ・ストーン？

『そうだ。魔力を凝縮した石。砕く事で一時的に魔力を得られる。それさえあれば、魔法の使い方さえ知ってれば使えるぞ。』

でもなあ…『マナ』ストーンがな『い』つ『た』つて魔法が使えるヤツとか…

——ぎいいいいやあああああああつ！？
か、体がつ！？

「う……う……。な、何が……」

「……………」。

ムツとした表情の黎と…何か傷だらけの俺。

「あのー、黎さん？」

「……………」。

「怪我が増えている気がするのですが…。」

「……………」ふんっ

俺は…何やったんだ…？

「あっはははははははは！！ヒー面白えー」

「笑ってねえで何があったのか説明しろよ。」

全く分からずにソルに相談。

ソルは魔法のようなもので俺の様子を見ていたらしい。

ソルはそれを見て大爆笑し、瞳に涙を浮かべている。

…殴ってやりたい。

「まあまあ、ゲホッ、見たほうが、早いぜ、ハッハハハハハハ」

な、なんなんだ…？

ソルは魔法で空中に映像を投影した。

『まったく…空也さんはすぐ無理をして…』

あ、黎だ。

「黎様は保健委員に入っただけらしい。」

ちなみに、ソルは俺や黎からすると部下にあたる。

なので黎の事は様付けで呼ぶんだが…俺とソルはどちらかというと悪友、

といった感じなので、様付けはしないしさせない。

『私の心配ばかりして…自分の事は…ブツブツ…』

「言われてるぞ、空也サン？」

『う……………。』

ここで俺の腕が動く。

『あつ、気がつきましたか？空也さん。』

ぺたっ

無意識に…だ。無意識に俺の腕が動いた結果、その…
まあ、黎の…触ってはいけない部分…まあ、具体的には胸に手が触れた。

絶句する黎。

悲劇はこれだけじゃなかった。

『マ…ナ……………いた……………』

爆発音が響いた。

「あつはっはっはっはっはっは！！
まったく空也は…確かに黎様はまな板だけどな、
もう少しお年頃の少女の気持ちを考えてあげてもいいだろう。」

「ちがつ！？誤解だ！！そもそもあれはお前と脳内通信していたからだろう！？」

そもそも俺が言ったのはまな板じゃなくて、
《マナストーンがないったって…》と言っただけだ！！

ていうか、お前も今はつきりまな板って…」

「フツ、良いんだよ、黎様は此処の声は聞こえな…」

ゾクッ

背筋が凍るほどの恐怖がソルの背後から…。

「ソルさん……？」

決して怒っている声色ではない…んだが…
息が詰まるほどの圧迫感…！！

「2人で私のことを馬鹿にして…！！」

私はまな板じゃないです！！少しぐらいの凹凸はあるんですよ！！

……多分」

「待った！！俺のは誤解だ！！意図してまな板呼ばわりしたのはソ
ルだけだ！！」

「いやいやいやいや！……いつの言葉に耳を貸す必要はありません
！！」

ビュオッ

「……………！！！」

俺たちの間を巨大な魔法弾が通り抜けた。
頬が切れ、血が流れ出す。

「言い訳は無用です……！！覚悟してくださいっ！！！」

「ぎゃあああああ~~~~~！！！」

> i 3 2 4 6 0 | 1 5 6 3 <

Battle・7 VS寝言（後書き）

次回予告

苦しみの2次試験は終わり、点数発表まではキャンプを楽しむことができる。

そこで空也、ハウエル、ルシフェルはグループを組んで、ファルシオン・スタンプラリーを周る事にした。
そこに黎も加わり、波乱のスタンプラリーが幕を開ける！！

次回 Battle・8 VSスタンプラリー

「ああいえ、何でもないですっ」

Battle・8 VSスタンプラリー

あの後、黎に必死に謝ったら許してくれた。
やはり怒っていても優しい所は変わらないらしい。

で。

今、俺たちはキャンプに付き添った教員の指示で野外へと集まっていた。

今はまだ5月だが…山だからか、少し蚊がいる。
俺の腕に止まったので問答無用で叩き潰す。

（何でわざわざ野外で集会やんだよ…蚊が…ウゼエ…）

（まあ、これから行動するのですし…我慢しておきましょう。）

後ろでハウエルとルシフェルが話している。
ちなみに俺は両方の意見に賛成だ。

俺らの前に立ったトパーズクラスの教師がダルそうに口を開く。

「はい、ではこれよりファルシオン新入生キャンプ名物！！
スタンプラリーを開催したいと思います。」

…????

ス、スタンプリリー？

「スタンプリリーには様々なルートがあり……

まあやったほうが早いだろ。んじゃ、適当にグループ組んでくれ。

4人以上、7人以下のグループだ。組めたグループから俺や他の教師に報告。

そこで地図とスタンプリカードを渡す。

んじゃ、スタートだ！」

（ちょっと先生！そんな雑で良いんですか！？）

（いんだよ。生徒たちには直感で行動してもらう。それもキャンプの醍醐味だ。）

あの教師、何考えてるんだか全く分からん…。

「…ちなみに、1〜10位には賞品があるぞ。」

「さっさとグループを組むぞー！」

「空也…俺も同意見だ。」

「で、誰を誘うのですか？」

「実力も伴ったメンバーで無い限り10位以内は厳しいでしょう。」

「ああ、それなら問題ない。学年主席を呼んだからな。」

「主席……？」

「そう、主席だ。」

「学年主席、というか多分学園主席の実力を持つ。」

「空也さん、お待ちしました！。」

「今回は別々のクラスでも可能のようなので、黎を呼んだ。これで4人。ノルマは達成だ。」

「キャロンさん、こっちですよ。」

「ちょっと……わたくしはまだ別の人と組むとは……」

「黎の後ろを小走りについてくる金髪のお嬢様的な女性が1人。年齢的に高校生くらいだろうか？」

「おそらくダイヤモンドクラスでの黎の友達か何かだろう……」

「待たせてゴメンナサイ、空也さん。」

早速行きましょう」

「ああ、そうだな。できる限り早く行ったほうが…」

「ちょ、ちょっと!？」

わたくしは初対面の人間と行動できるほど順応性は高くないわよ!？
まずは自己紹介とか…」

キャロンという人が後ろで何か言っている。
…ふっ、分かってないな。

「自己紹介なんか歩きながらでいい!!
今は一刻も早く登録を!!」

「まったく…何故そんなにも急いでおりますの?」

「1位から10位には賞品があるらしいんです。
それで空也さん、張り切って…」

「ハア…その程度で張り切れるとは、微笑ましいですね。
それよりも…自己紹介をさせていただきますわ。

わたくしはキャロン。デュラン家の長女ですわ。」

「あ、そうなんですか…」

お嬢様のどうでもいい自己紹介を軽く聞き流す俺。

仕方が無いから俺も（歩きながら）自己紹介するか。

「あー、小泉空也です、学園内で最も魔力が無いらしいです。」

「あー、ハウエルです、別にこれといった特徴はありません。」

「あなた方、やる気を出さない!!」

そりゃそうだ。

早歩きで振り返りもせずにこの雑な自己紹介。

やる気が無いと思われても仕方が無い。ていうか、実際やる気は無い。

俺たちのやる気は今…スタンプラリーにのみ向けられている。

「トパーズクラス代表のルシフェルと申します。

…以後、お見知りおきを。」

「……？」

振り返ると、黎が首をかしげてルシフェルを見ている。

やっぱり黎も感じたのか？

——ルシフェルの、違和感を。

「どうかしましたか？」

「ああいえ、なんでもないですっ」

「えと…最後は私ですね。
黎です。空也さんの妹です。」

「「！！？」」

…ど、どうしたんだ…？
何故そんなに驚く。キャロン＆ハウエル。

（魔力が学園最低の男の妹がこの魔力…！？
一体どういう家系なの…！？）

（兄がイケメンで妹が可愛いつてどういう家系だよ…！！）

「どうしたハウエル…殺気がやばいぞ」

「な、なんでもない!!」

そ、それよりホラ、あそこが第1チェックポイントだぞ!!」

スタンプラリーのやり方はこうだ。

まず、登録時にスタンプカードと共に受け取った第1チェックポイントを目指す。

そこでの課題をクリアした後、そのチェックポイントで抽選を行い、第2チェックポイントが決定する。

そして次々にチェックポイントを巡り、第10チェックポイントで終わり、

その後最初の集会場へと向かう事になっている。

第1チェックポイントに到着する。

そこには倒れた生徒が大勢いた。

そして倒れた生徒の中で立ち尽くす生徒が1人。 ソルだ。

「うふふ、どうしました? 貴方が合格すれば皆さん此処を通れますよ?」

「メ、メンバーが再起不能のため棄権させてください!!」

そこで、黎がソルの存在に気付く。

「ソルさん、どうしたんですか？」

「え？ああ、黎様、空也。」

実は、此処での試練で俺のメンバーが全員やられたので棄権しようかと。」

要は仲間がやられて怖いから逃げるわけだな。
まったく情けないやつめ…。

「じゃあ、ソルさんも私たちと一緒に回りましょう。
私たちはまだ4人ですし、入れますよ。」

「！！！！」

黎はソルが逃げようとしている事になど気づいていない。
純粹に、「メンバーがいなくなった為仕方なく棄権する」という、
ソルの逃げ口上を鵜呑みにしている。

なので、慈愛の精神に満ちた黎はソルをメンバーに加えると…

傑作だ。面白すぎる。

「イヤとは言わないだろうなあ？ ソル。」

「く、空也？ 嫌とは言わないじゃなくて言わせないの間違いじゃないか！？」

「どうして俺の関節を固定する！？」

ソルの希望により、ソルが俺たちのパーティに加わった。

じゃ、ソルのパーティを撃沈させた第1試練とやらを受けてみようじゃないか。

「ここでの試練は…激辛カレー完食でえす♪」

……………え？

> i 3 2 4 6 0 | 1 5 6 3 <

B a t t l e ・ 8 V S ス タ ンプ ラ リー (後書き)

次回予告

運悪く、ドボンゲームを引いてしまった一同。
最初のゲームは激辛カレー完食。

通常のカレーにいわゆる『デスソース』をなんと15cc加えたカレー。

下手すりゃ本気で病院送りなこのカレー…。

一同はどう対処する！？

次回 B a t t l e ・ 9 V S 激辛カレー

(殺す気かよあの教師…！)

Battle・9 VS 激辛カレー

「もう一度聞いていい? …… カレー?」

「そうよお。」

目の前にいる…無駄なフェロモンを放ち続ける金髪の女教師。

「皆が引いたのはドボンゲーム…」

つまりまともな試練じゃないわよお?」

ゴトツ、という音を立ててテーブルに置かれるカレー。
とにかく…赤い。

全員がズザツ、と後ずさりした音が響く。

「これ…食用、ですよね?」

「そうよお、一応。デスソースを15cc程かけたけどねえ。」

（なあなあルシフェル。デスソースって何だ?）

ハウエルが後ろでなにやらルシフェルに質問している。

（デスソース、というのは数種類ありますが…
だいたい、タバスコの10倍〜30倍ほどの辛さまでであると聞きます

す。）

（殺す気かよあの教師……！！）

まずは小手調べ……と一口、口に含んでみる。

最初のうちは舌にカレーの旨みが広がる。

すると徐々に……徐々に辛さが現れ、すぐに激痛へと変わる。急いで飲み下すが、口の中の痛みは消えない。

そのうえ、飲み下したとき通った喉にも激痛が走り続ける。

「……ぎゃああああああああああああ……！！」

か、辛っ……！……てか痛い……！……痛い痛いイタタタタタタ……！！

水……水をくれ……！！」

「残念だけどお……水は無いのよお。」

道理で皆倒れてるわけだ……！！

この教師絶対Sだ……！！ふざけやがって……！！

「空也さん、口あけてください」

「え？……あーん」

口を開けたら、何か勢い良く放り込まれた。
これは…氷か？そうか、辛いカレーを食って苦しんでる俺を見て…
黎は本当に優しいな…。

……ん？

この氷、やけに口に貼りついて…

…いたたたたたた！…口に張り付いてやけに痛い！！

「ぐはっ」

「あれ？どうしたんですか？」

俺が吐き出した氷には俺の口の内側の粘膜やら鮮血やらがついていた。

「ドライアイスってのは口冷やすもんじゃないから！！
舌にくっついたりしたら重症だからね！！？」

「そ、そうなんですか…すみません…」

とりあえず今のこたごたで辛さの緩和には成功したようだ…。
しかし口の中に多大な被害を受けた。

「口の中を負傷した状態であんなの食ったらそれこそ大惨事だ。
だから暫く俺は食えない。代わりに誰か逝け。」

「…では、僕が試してみましようか。」

ルシフェルはスプーンを手に取り、カレーを口に運んだ。

「これは…確かに辛いですね。
これを一杯全て食べるのは至難の業でしょう。」

全然辛そうじゃねえ。
DS教師もつまらなそうだ…。

「じゃ、次はハウエル。」

「くっ…やっぱり順番で行く気が…」

パクッ

「く…あれ？そんなに辛くない…
…いやっ、辛い！！辛い辛い！！ぎゃあああ！！水！！」

予想通りだ。

やはり全員辛さに特別な抵抗は持っていないさそうだ。

じゃあ…。

俺はハウエルとアイコンタクトをとる。

ハウエルは理解したようで…ソルを羽交い絞めにする。

「なっ！？何しやがる！？」

「ククク、悪く思っなよソル…さっきの恨み（2次試験中に襲ってきたこと）

とさっきの恨み（黎の事をまな板呼ばわりしてとばっちりを受けたこと）だ！！」

俺はカレーとスプーンを持ってソルに近づく。

こうなれば何が起こるかは容易に想像がつくだろう。

「や…やめろおおおおおおおおおおお！！」

何があつたか、詳しい説明はしないでおこつ。

だが今の行為でカレーの3割が無くなった事だけは言っておこつ。

…そして、ソルが戦闘不能になった事も言っておこつ。
黎の魔法で精製した氷も無効だったようだ…恐ろしい。

「さて…じゃあどうすつかな…」

俺は口の中が剥がれてるからムリ…ソルも戦闘不能…
ハウエルとルシフェルも辛いものに体制は無し…。
でもなあ、女性陣もムリだろ？」

「え、ええ。わたくしはこういうものはちょっと…」

「だよな。じゃあどうするか…」

カチャッ

スプーンと皿がぶつかった音が響いた。
カレー皿のほうを見ると、黎がいた。

「黎…やめといたほうがいいぞ。本気で辛いぞ」

「そ、そうなんですか…？で、でも私も少しくらい手伝いを…」

「やめろって！そんな芸人にやらせるようなこと…！…！」

パクッ

「」「あ……………」

暫し静寂。

「だ、大丈夫？黎ちゃん？」

「黎、やばかったら吐き出したほうがいいぞ。」

そして再び間が開いて…

「…あれ？」

「ど、どした？黎。」

「…そんなに辛くないです」

「「「えええっ！！？」」「」」

しよ、正気か！？あんな辛いのに！？

DS教師も驚きを隠せない様子だ。そりゃそうだ。

その後も黙々とカレーを食べ進める黎。

そして…

カタンッ

スプーンが置かれた。

しかし、全て食べ終えたわけではない。

「ど、どうしたんですの？」

「「ごめんなさい…お腹がいっぱいで…」

「「「えーーーーー！！！」」「」」

馬鹿な！！折角の主力があつ！！

だが残るは1割程度！！これなら…

「うっ…何か酷い目にあつたような…」

ソルが目を覚ました。

俺とハウエルはアイコンタクトを取る。

そしてソルは再び羽交い絞めにされる。

「…オ・マエ・ラ・アトデ・ゼツタ・イ・コロ・ス」

「はい、これにて第1ゲームは終了よ。
では次の場所に向かってねえ。」

抽選の結果、第2ゲームは湖を沿って歩いて2分程度の場所らしい。
ソルを担いで、次の場所へと向かう。

>
i
3
2
4
6
0
—
1
5
6
3
<

B a t t l e ・ 9 V S 激辛カレー（後書き）

次回予告

第2ゲームの会場へと向かう一同だが、いつの間にかルシフェルが消えていた！？

急いでルシフェルを捜す一同だが…

一方、ルシフェルはアヴァリオン・マウンテン山頂付近に來ていた。その目的とは…

次回 B a t t l e ・ 1 0 V S 搜索活動

（まずは1つ…）

Battle・10 VS 搜索活動

「よし、この調子でどんどんいくぜ!!」

「あ、ちよつとお待ちなさい!」

キャロンが俺を呼び止める。

一体何事だ? 折角勢いに乗る予定だったのに。

「ルシフェルさんがいませんわ。」

たしか、スタンブラリーはグループ全員でゴールしなくちゃ…」

「………。」「……」

「どこ行つたアイツ!? 音も無く消え去つたぞ!?」

まさか…アイツはこの山に住む幽霊だったのか!!」

それならアイツから感じた違和感も説明がつく…気がする。

「バカ言っていないで探しますわよ。」

探す場所の候補としては…遊歩道じゃない所かしら…。」

俺たちが今歩いているのは湖へと続く遊歩道。

前後左右見渡せるため、ルシフェルがいなくなつたならば遊歩道以外、か。

仕方が無い…
景品のために捜すとするか…。

「……………」。

スタンプラリーのルートから非常に大きく外れた森。
その森の、誰にも目に付かないような木の生い茂った最深部。

そこに、ルシフェルはいた。

ルシフェルは右手から血を流していた。
いや…意図的に右手を傷つけ、血を流したのだ。

「……………」。

左手には不気味な本を抱え、右手から滴る血液で何かを描いていく。

そして書き上げたのは、不気味な紋章だった。

（まずは1つ……）

プルルルルル…
プルルルルル…

ルシフェルの携帯電話が鳴り響く。

ピッ

「もしもし…」

『もしもし、ルシフェル。首尾はどうですか？』

「ええ…まずは1つ、といった所ですね。
この調子ならば問題は無いでしょう。」

『フフ…流石ですねルシフェル。
しかし注意するに越した事はありません。何しろ…』

「紅き力と蒼き力…紅き力とはもかくとして、

蒼き力には警戒する必要があるでしょうね。

彼女は魔力探知などに極めて秀でている…。」

『ええ…引き続き任務に当たってください。』

貴方が失敗すれば、この計画もあと数兆年近く保留なのですから。』

「わかっていますよ。心配は無用です。

それに何より…僕の力は貴方が一番良く知っているでしょう?。」

『フ…武運を祈りますよ。』

「ルシフェルー!!どこ行っただー!!」

「おや、空也さん。どうしましたか?こんな所まで」

ルシフェルを見つけた。

「こんな所で…って、こっちの台詞だ!!」

何でこんな遊歩道から大きく外れたところにいんだよ!?。」

「失礼しました。魔物を見かけたもので…。」

しかし、このアヴァリオン・マウンテンにまで魔物がいるとは……やはりこの世界の瘴気は濃くなっているのですね……。」

「何の話だ？」

まあ、ともかく！！スタンプラリー再開するぞ！！
今までの遅れを取り戻さなきゃ……」

そしてルートに戻ったのだが……

「スタンプリーは一回ルート外れたらもうアウトだ。まったく、お前らは何をやってるんだか……」

「ええええええええええー！！！」

俺とハウエルの悲痛な叫び声が響いた。

夜。

自由参加のキャンプファイアーが催された。

「申し訳ありません…。」

「いいんですよ、ルシフェルさん。
それに景品もむせんるーたー？とかいうものでしたし…」

黎はルシフェルの右手の治療をしていた。

「無線LANルーター、な。

まあ寮にPCはないから…本当に意味が無い。
実家とかに送ったり持って帰ったりする用の景品だよな…。」

俺とハウエルも黎の治療に同行していた。

黎はルシフェルの右手を消毒し、包帯を巻きつける。

「それにしても、どうしていきなりどこかに行ってしまったんですか？」

「ああ、俺も気になるぜ。教えてくれよルシフェル。」

ハウエルも気になっていたようだ。

俺と再会したときも、何か曖昧な答えだったしな…。

「それは…魔物がいたのです。」

「『魔物？』」

アヴァリオン・マウンテンは学園の保護下にある。
そのため、遠足などにも使用できるし、魔物が出るはずも無い。

「大した魔物ではなく、小悪魔だったのですが…
炎属性の魔物だったので、危険と思い処理したのです。」

「そうだったんですか…」

「近年、この世界の瘴気が濃くなっているのです。
それにより、魔物が力をつけてきている…。」

学園側も、それに対応するのに忙しいようですね。」

ルシフェルってやたらそういうのに詳しいよな…。
そういう授業をとっているのか…
それともそういう本を読み漁っているのか？

黎も少し首をかしげている。

（なあ黎。ルシフェルって何者なんだろうな？）

（わかりません…でも普通の人とは何か違う感じがします…）

ルシフェルの瞳が一瞬、紫色に光ったように見えた。

翌日、身支度をしてとつと下山。

この時間にスタンプリーをやればよかったんじゃない…？

後日。

黎はやはり何か引っかかることがあり、
再びアヴァリオン・マウンテンを訪れていた。

黎は登山の疲れか、息を切らしていた。
そして、件の森林の最深部に到着する。

（なんだろ、これ…？）

黎が見つけたのは、血で描かれた不気味な紋章。
何かしらの魔力を付加してあるものの、詳細は掴めない。

（消したほうがいいかな…でも…）

下手に消すと、山の結界なども消えてしまうかもしれない。
しかし、血で描かれた紋章など少なくとも無害な魔法ではない。

（どうしよう……。 ）

悩んだ末、黎は答えを導き出す。

（私なりにこの紋章について調べてみよう。
消すか消さないかはその時判断するとして…）

それに術が発動してからでも消すのは遅くない…かな？）

相当強力な魔法で無い限りは。

「……………」

そんな黎を見つめる影が1つ。

黎が紋章を消さずに去ったのを確認すると、
漆黒の翼を広げ、どこかへと飛び去った。

>
i
3
2
4
6
0
—
1
5
6
3
<

B a t t l e ・ 1 0 V S 搜索活動（後書き）

次回予告

第1試験の結果発表。

見事合格した空也・ハウエル・ルシフェル。

喜ぶ一同を見て皮肉を言うアメジストクラス生徒。
トパーズクラスの怒りを空也が代弁する！

次回 B a t t l e ・ 1 1 V S アメジスト生徒

「協力を感謝する…。」

Battle 11 VS アメジスト生徒

今日は第1試験の結果発表があるんだったな。
たしかクラスごとに廊下に張り出されてたんだったな。

トパーズクラスの前では、喜び飛び上がるもの、頭を抱え嘆き悲しむもの、チラリと見て去っていくもの…。

どれどれ、俺の成績は……っと。

84: 1次が12だったから、72点も取れたのか！

「どうやら合格のようですね、空也さん」

見ると、ルシフェルの姿が。

「ああ。おかげさまでな。」

アメジスト生徒から奪ったのは結構効果的だったのかもな。

「そうかもしれませんね。」

「よっしゃああああ——っ!!」

強烈な声が響く。

この声はハウエルだな。あいつも合格したのか。

…まあ、俺の1次の点数を笑ってたから当たり前か。

すると、紫色をベースとした制服を着た柄の悪い男子生徒…
アメジストの生徒が通りかかった。

「やれやれ…第1試験合格程度で此処まで浮かれるとは、
流石はトパーズクラスだな。」

全員がアメジスト生徒のほうを向く。

「な、何だと!!」

トパーズ生徒が激怒する。
当たり前だな。俺だって腹が立つ。

「本当のことを言って何が悪い。
トパーズのバカがバカだと言ったまでだ。」

「てめえ…いい加減にしろよ!!」

トパーズの1人が殴りかかる。

ガッ

「いててててっ!!」

「…やめろ」

トパーズの生徒を止めたのは俺。

「…ふん。どうやらトパーズクラスにもまともなのはいるようだ。それに引き換え、お前は相手が誰かも分からずに…バカが。」

「放せよ、小泉…!!」

「悪いな…うちのクラスの生徒が。
…だが、正直俺もお前を殴ってやりたい。」

「何だと…?」

「アメジストクラスといえば色々と治安が悪い事で有名だ。
ダイヤモンドクラスに勝てるわけでもない。」

だが学年で2位という事に甘え、勝とうとすることすら諦める。

そのくせダイヤモンドクラスに負けているという事が許せず、
自分たちよりも下のクラスを蔑む。

そんな低俗な腐れたクラスに…
俺のクラスや、クラスメートを悪く言われる筋合いはねえよ!」

「ぐぐ…てめえ…トパーズクラスの分際で…!!
いい気になってんじゃねえよ…!!」

アメジストクラスの生徒は掌の上に炎の弾を作り出す。
そしてそれを俺に向けて投げつけた。

だが残念ながら…そんなものに当たるほど俺はトロくない。
簡単に回避してアメジスト生徒の首筋を掴み…
背負い投げで放り投げた。

「ぐうつ!?!」

「魔法を校内で使用するのは校則違反だ。
一緒に風紀委員会まで来てもらっぞ。」

「くそっ、離せ…!!」

ジタバタと暴れるアメジスト生徒。
しかしそんなもので俺の拘束から逃れられるわけもなく、
あえなく風紀委員会へと御用。

「失礼しまーっす」

「くそ、離せって言ってるだろ!!」

「こいつが俺に向けて炎の魔法を行使した。校則違反なんで、取り締まってくれないか。」

「……わかった。」

風紀委員室の中は特に何もない。

あるのはソファと観葉植物と棚くらいだ。

ソファから立ち上がったのは白髪の男。

俺と同じくらいの背で、高校生くらいだろうか？

灰色ベースの制服を着ていることから、黎と同じダイヤモンドクラス生徒だと思われる。

「協力感謝する。俺は久城^{くじょう}透矢^{とつや}。」

風紀委員会委員長であり、唯一の風紀委員だ。

どういうわけか、風紀委員に入りたがるヤツが少なくなてな。

お前、風紀委員に入らないか？」

俺と久城が会話している隙に、アメジスト生徒が逃げようとするが、アメジスト生徒は久城にあっさり確保される。

「いや…遠慮しておく。

その、何というか…風紀委員にはあまりいい思い出がなくなてな。

代わりに、俺の周りで校則違反者がいたら、

今回みたいにしよっぴく。それなら仕事も多少楽だろ？」

「そうだな。また何かあったら協力してくれ。」

まずいな。

ホームルームが終わっちまった…。

1時限目に間に合うかどうか…いや、間に合うよな…！

キンコンカーンコン

畜生！！

全然間に合わなかった…！

ガラッ

「すいません！！遅れましたあああつ！！」

俺が教室に入った瞬間、拍手が巻き起こる。

何何！！？俺が遅れたから、嫌がらせのドッキリ！？

「さっきはありがとな、小泉！」

「胸がスカッとしたぜ。ざまあ見ろって感じだな！」

「あいつも結局、風紀委員送りだろ？
暫くは黙ってるだろうな！」

…ああ、何だ。そんな事？

びつくりしたー…一体何事かと…。

「あれ？…でも、風紀委員って具体的に何をやるんだ？」

「ああ、以前俺が捕まった事あるぜ。

反省文を原稿用紙20枚くらい書かされて…

しかも、「そんなに書けるかつ!!」って言ったら……」

『ああ？書けない？』

…別に書かなくてもいいぜ。

ただし、代わりに俺の訓練に付き合ってもらおう。

最近はまだ魔法剣を扱っていなかったからな……。』

で、最近使ってないとか言ってたから、

訓練に付き合っただけだ…それがスパリングだったんだよ。

そしたら馬鹿みたいに強くてさ、

まるで魔法も攻撃も当たんねえ。

で、一方的に木刀で叩かれて解放された。

どうやらあの人、2年生の学年主席らしいんだよ。

だからあの人に逆らいたがるヤツは少なくとも1、2年にはいない

な。

「ほえー…そんな人だったのか。」

「ああ。だからお前の今回の仕事で、
暫く俺らは甘く見られるんじゃないかな!!」

「いや、校則違反は普通にダメだろ…」

「あのー…」

授業、始めていい?」

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

B a t t l e ・ 1 1 V S ア メ ジ ス ト 生 徒 (後 書 き)

次回予告

第1試験の勢いに乗り、第2試験に挑む空也達。
しかし第2試験の内容はよりにもよって…

次回 B a t t l e ・ 1 2 V S 第2試験

「そこであんたに依頼だよ」

Battle・12 VS 第2試験

俺は現在、試験受付教室にいる。

前回の第1試験で勢いづいたので、第2試験を受けるのだ。

「第2試験の内容は何なんでしょうか。」

「ええ…つと。」

そうですねえ、第1試験より簡単かもしれませんが。

基礎魔法『デュマ』を使用し、本を1m動かしてください。」

……………え？

「それで…不合格だったのですか。」

デュマは物体を思い通りに動かす魔法で、
全ての授業の最初に習いますが…？」

「デュマなんか全部の魔法の基本だぞ…？
授業聞いてなかったのか？」

「やめてください…」

「しかし、魔力が無いならばマナストーンを使えば良いのでは？」

マナストーン？

そっぴやそんなのあったような…なかったような。

ああ、ソルが言ってたな。

購買で普通に買えるんだったか…

しかしなあ、今の俺の手持ちは…

チャリーン

僅か2000円。

「これで買えますか、ルシフェル先生。」

「マナストーンは1個3000円です。」

買えないじゃん！！

これじゃ2次試験合格できねえ！！

「そもそも、お前魔力を得たからってデュマ使えるのか？
授業聞いてなかったんだろ？」

デュマ、ねえ…。

そもそも練習すらしてないんだから、魔法の使い方分からん…。

「…まあ、アレだ。

マナストーンを手に入れたら2人とも教えてくれ!」

「イヤだ」

「適任の方がいるでしょう?もっと身近に。」

身近…?

…ああ、黎か!!

たしかに、黎はすでに第11試験まで合格してるし。

黎にさえ教われればまず間違いなさそうだ。

「デユマ…ですか?

空也さん、デユマは全ての授業の最初に習いますけど…」

「全然授業聞いてなかったからわかりません。
教えてください。」

「はあ…それは、構わないんですけど…
とりあえず、１００円渡しますから、マナストーンを買ってきて下
さい。」

「はいはい、毎度あり。」

…そっぴやあんだが学園史上最低の魔力保持者かい？」

購買の先生は保健の先生と何故か同じリスア先生。
まあ、保健室はほとんど保健委員が対応してるからな…
先生がこっちに回されてもしょうがないだろう。

「はあ、まあそうですねえ。」

「そっかい、あんだが…フフフ。
ちよつとあんだに耳寄りの情報があつてねえ。」

「耳寄り…？」

あ、何か嫌な予感がする。

「そっ警戒する事はないよ。
これから条件付であんだにマナストーンをタダで譲ってやる。」

「まあ、それは願ってもない話ですが、
で、条件つてのはどんなえげつない内容で？」

「なあに、簡単だよ。」

あんたにはマナストーンの仕入れを手伝ってもらいたいのさ。

知ってるかもしれないが、マナストーンの原料となるのは、
マナカラットという鉱石でね。

このマナカラット、

以前は『クエスト』の依頼の定番だったんだけどね。

『クエスト』そのものが廃止されてからは、
マナカラットが手に入らなくなってるね。

だからマナストーンは今、在庫分しかないんだよ。」

「先生、意味が分かりません！」

「……。」

マナカラットという鉱石を加工してできるのがマナストーン。

以前はクエストっていう授業があつてね、

自分じゃ解決できない悩み事とかを人に依頼して解決してたのさ。

それがクエスト授業。

「ただ数年前、クエストで死者が出た。」

！

死者が…ねえ。

「どうやったら死者が出るような依頼をするんだ…？」

「どっかの馬鹿が面白半分にあざけた依頼を出しやがったのさ。
『魔神種のモンスターを2匹討伐して欲しい』とかね。」

クエスト授業は購買で扱ってた。

私が全ての依頼に眼を通したつもりだったんだが…

何かの手違いでそんなものがクエストとして受理された。
それを受けた生徒が魔神種モンスターに殺された…。

「当たり前といえば当たり前だね。」

魔神種…？

「…ああ、1年はそんなの習ってなかったんだね。」

「この世界に生息する魔物は人の悪意が結晶化したもの。」

弱い順から、

悪魔 魔物 魔獣 夢魔 魔神…。

「これらが一般的に魔物と呼ばれる連中だね。」

「そうなんですか。」

それで魔神種モンスターの討伐なんかを……。」

「……話が反れちゃったね。」

で、あんたに依頼したいことがある。

あんたはこれから先もマナストーンが必要だろう?。」

だろうな。

俺には魔力が無いからこれからも必要だろう。

「そこで依頼だよ。」

あんたにはこれからエレス鉱山に行って貰いたい。

そんなに危険な事はないから、多分大丈夫だ。

そこで森のほうに道なりに進むと巨大な青い結晶がある。
それがマナカラットだ。

それを……そうだね、2kgくらい削ってきてもらえば、
あんたの分と生徒の分が1年分くらい確保できるよ。」

「……まあ、断る理由もないんで受けさせてもらいましょう。」

「決まりだね。んじゃ、今から転移魔法で送るよ。」

「ちょ、ちょっと待った、帰りは!？」

「適当に歩いてれば着くよ。」

「んじゃ、頑張っというで…イプシリアス」

青い光が俺を包み、気がつくと俺はどこかの山にいた。

イプシリアス、というのは転移魔法。

以前黎が使っていたのを覚えている。

しかし、リスア先生の説明が雑すぎる。

道なりに進め、とか言われてもどうすりゃいいんだ…。

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

B a t t l e ・ 1 2 V S 第 2 試 験 (後 書 き)

次回予告

リスア先生の依頼によりマナカラットを手に入れることになった空也。

そんな空也の下に、助っ人が現れる。

次回 B a t t l e ・ 1 3 V S マナカラット

「手間が省けました…」

Battle・13 VS マナカラット

さて…道なりに進め、と言われてもな…。
初めて来た所だから、どこが道なのかすら…。

しかし、人がいない。

だからこそマナカラットの在庫が尽きてるんだろうな。

さて、立ち止まってもしょうがない。

適当にまっすぐ歩くとするか…。

迷った…。

いや、まあ…この結末は当たり前といえば当たり前だ。

地図も何もないのに道なりに歩いて目的地にたどり着くはずがない。

さて、行けず、戻れず。

どうしたものか…。

…？

今一瞬、向こうになんか青いものが光ったような。

行ってみるか。

「これ…なん…だよな？」

とてつもなく巨大な水晶が山にめり込んでいる。

俺は直前で手渡されたツルハシ状の魔法具を使い、水晶を採取しようとしたその時。

ヒュツ、という風を切る音を立てて、水晶のかけらが俺めがけて飛んできた。

「うおっ!？」

あ、危ねー…。何だこの水晶は。
意思でも持つてるのか？

あの教師…何が危ないだよ…メチャクチャ危ねえじゃねえか。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ…

何か凄い轟音とともに、水晶の塊が動き出す。
動き出した水晶はその巨大な体を岩にめり込ませながら旋回する。

丁度180度回転すると、凄い勢いでめり込んでいた岩から飛び出す。

空中に浮き上がった水晶の中心には、不気味な紅い水晶が目玉のように俺を睨みつけていた。

さらに森からいくつかの青い水晶が飛び出す。

小さな青い水晶は集合して合体。

人間の手のような形になった。

つまり、

○ 手
本体の水晶手
○

こういう状態だ。

空中に浮いていて、いかにも俺を狙ってそうだ。

何か恐ええ……！！

まずいな、逃げないとヤバそうだ。

次の瞬間、俺の目の前に本体と両手が現れた。
速っ……！！

一瞬にして俺は巨大な手に叩きつけられた。
巨大な見た目の裏腹にメチャクチャ速い……！！

口の中に混じった血を地面に吐き捨てる。

次に、水晶の本体の中心の赤い水晶が
俺めがけて光線を放った。

ギリギリで回避したものの、地面が焼け焦げている。
こいつは唯の魔物じゃないな……。

夢魔、或いは……魔神級くらいか！？
なんでこんなのがいるんだよ……！！

あの教師いい加減にしろよ……！？

『イプシリアス……！！』

聞き覚えのある声と共に、俺の目の目が青い光で包まれた。
何とか目を開けると、青白い光を纏った黎がいた。

「……あれ？あれ？
空也さん？何でこんな所に……！」

「れ、黎こそ!？」

「私は…空也さんが帰ってこないの…
空也さんのところにワープしたんです。」

水晶の赤い部分がキラリと光り、
俺と黎めがけて光線を発射した。

「黎、危ないっ!!」

しかし光線は黎に届く直前で弾かれる。
障壁か!さすがは学年最強の魔力。半端無い防御力だ。

「あれは『水晶魔神クリア』ですね。
野生の魔神が何故こんな所にいるのかわかりませんが…

学園内に魔神を凝縮したような危険な魔力を感じます。
それに引き寄せられてやってきたんだと思います!」

「解説はいいから!!
後ろ!!後ろ!!!!!!」

今度は魔法攻撃の光線ではなく物理攻撃の手だ。
これじゃ黎でも防げない!!

「黎、伏せる!!」

「え?こ、こうですか?」

黎は体を屈める。

そのすぐ上を水晶の手が通り過ぎる。

「黎!危ないから黎は一旦…」

「大丈夫です」

黎は手に青白い光を集める。
その質量は段々増えていく。

水晶魔神、とやはら巨大な手で黎を押しつぶそうとする。
が、その手は俺が受け止める。

相当な重さだが、これなら大丈夫だな…。

水晶の手を本体めがけて投げつけると、見事命中。

本体、両手共に行動を停止する。

「行きますよ!避けてくださいっ」

スイカ大くらいの青白い魔力の塊が黎の手に溜まっている。
それを水晶めがけて投げつけると、巨大な爆発が起こる。

爆発が晴れたとき、水晶魔神の姿は跡形もなく消えていた。

「…ありえない威力だ。」

「そ、そうですか？これ、オリジナル魔法なんですけど…」

オリジナル魔法って…そんなのありなのか？

「…それで、どうして空也さんはこんな所に？」

「そうそう、俺はリスア先生に依頼されて
マナカラットを採りに来たんだよ。」

「…マナカラット？
それなら、こっちですよ。」

「そ、そうなのか。何で知ってるんだ？」

「第4試験と第7、第8試験で此处に来ましたから。」

なるほどねえ。

砕け散った水晶が散らばっている。

「なるほど…凄まじい威力ですね。
だが、この程度では…」

彼らを止める事はできないでしょうね。

「しかし…わざわざ魔神の体を壊す手間が省けました…。」

水晶の中心から赤黒い炎が現れる。
その炎は、目の前に立つ…ルシフェルの存在に気付くと、
一目散に逃げようとする。

「無駄ですよ…貴方たち魔神は僕から逃げられない。」

ルシフェルが手を掲げると、赤黒い炎の動きが止まる。
そのまま炎は糸で手繰り寄せられるようにルシフェルのもとへ。

ルシフェルは片手に持った本を開くと、
勢い良く炎が吸い込まれる。

完全に炎が吸収されると本の1ページに不気味な紋章が1つ浮かぶ。

「フフ…。」

ルシフェルはそのまま去っていった。

「…!!?」

「ど、どうした黎!?!」

「…い…いえ…何でもありません。」

何か凄く嫌な魔力を感じたんですが…気のせいでしょうか…」

その後、無事にマナカラットを採取し、
黎のイプシリアスで学園に帰ったのだった。

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

B a t t l e ・ 1 3 V S マナカラット（後書き）

次回予告

無事帰った空也と黎。

魔力を得た空也は、早速デュマ特訓を始める。

次回 b a t t l e ・ 1 4 V S デュマ

「デュマ!!」

Battle・14 VSデユマ

「はいはい、ご苦労さん。」

「いやいや、流すなよ。」

それとも聞こえなかったか？もう1回言ってやろつか！！」

購買部。

リスア先生にマナカラットを届けたのだが…

「聞こえてるよ、うるさいね。」

『何で安全って言っていた所に魔神がいたのか』でしょう？

これは私にも計算外だったんだよ。

此处最近、人々の悪意の量が増えてるんだよ。

当然、悪意による瘴気が増えれば魔物も増える。

眠っていた魔神も目を覚ますのさ。」

ちなみに…授業で習ったのだが、

魔神は魔物や魔獣とは少し違うらしい。

魔神とは、遥か前から世界に存在していた。

しかし、ずっと眠っていてエネルギー発電などに利用されていたのだが、

最近になり悪意が溢れ出した事により、魔神が目覚めた。

明確な魔神の数は分かっていないのだが…

憶測ではおよそ300程度ではないかと言われている。

…柄にもなく解説してしまった。

こういうのは黎やルシフェルに任せるべきだろ俺…。

「っーか！ー魔神がいるなら先に言えや！？」

痺気が増えてるなら最悪の場合くらい…って聞けよ！？」

リスア先生は下を向いてコツコツと何かをやっている。
少し身を乗り出して覗き込む…

ガンッ

「ぐぼっ」

「邪魔臭いね。人の作業を覗きこむんじゃないよ。」

い、いきなり頭を上げやがって…

ああ、鼻が、鼻がああああ…

天を仰いで悶絶していると、リスア先生は青い水晶を差し出す。

「…ほら、できたよ。」

どうやらこれがマナストーンらしい。

…で、どうやって使うんだ？

「これを碎けば碎いたものに擬似的な魔力が与えられる。
落としたりするんじゃないよ？落としたら誰の魔力でもなくなるか
らね。」

「へいへい。んじゃ、ありがとうございます」

「アンタ、滅茶苦茶態度悪くなったわね。」

フン。こんなロクデナシに気を使う必要はない。

とりあえず、マナストーンを握りつぶす。

パキッ、という乾いた音と共に、体が温かくなる。

…暖房器具として使えそうでもある。

「では、デユマの訓練を始めます。」

寮や学園内では魔法の使用が禁止されているので、屋外でやりたいと思います。」

「庭園なんかあったんだな…知らなかった。」

庭園には噴水やベンチなどがある。

昼などは此处で弁当を食べる生徒が多いのであろう。

デュマの特訓はいたって簡単。

頭の中で、動かしたい物体が

どのように動いているかイメージしながら、魔力を解放すればいい。

イメージのためにいわゆる『詠唱』というものを使用したりする。口にすることでより頭の中でイメージが描きやすくなるそうだ。

まあ、デュマくらいの基礎魔法でいちいち詠唱するヤツなんかいないらしい。

魔法を使う事になれた上級魔術師は、

無詠唱で高位の魔法を扱うこともできるらしい。

…んで、黎は詠唱を使用しない。

黎は、闇属性魔法を使うときのみ詠唱をする。

黎には、闇のイメージが浮かべにくいそうだ。

「…デュマは基礎の魔法ですが、
ほぼ全ての魔法に使用されています。例えば…」

黎は無詠唱で指先に炎を灯す。

これでも初級の魔法なのだろうが、火力が半端無い。

「炎属性魔法。」

属性系魔法はいくらイメージしても、自分の付近にしか現れません。
この程度の魔法ならまだしも、

爆発系の魔法など自分の周りで発生しては大惨事です。

そのため、デュマを使います。

…この炎も、こんなふうに…」

黎は腕を振り上げ、炎を投げつける。

噴水めがけて投げたので、すぐに消化される…

はずだった。

炎は水をかけられてもそこに在り続け、噴水を蒸発にかかる。

「あああ！ーい、いけない、どうすれば…」

と、とりあえずこれで」

炎が突然凍結する。

黎が氷属性の魔法を使ったのだろう。

「…こ、これで時間が経てば噴水で溶けるはずですよ、空也さん。実際にやってみてください。」

「…魔力を解放って何？どうやんの？」

「……………。その…そればかりは、あの…
…感覚、というか…？」

「OK、先生に聞いてこよう」

「ひ、酷いですよ空也さんっ！！」

それに、先生だってうまくは説明できません！

…この時空では、まだ魔法は未開の文化なんですから。」

黎が口にした“時空”というワード。

雑な説明しかしていなかったが、俺たちは神として生まれたもの。
時空云々についての詳細も知っている。

時空とは、時間と空間を保有する一つの世界。

この世界の広大な宇宙も、すべては1つの時空なのだ。

で、俺たちは時空を行き来する能力がある。

それで、この時空まで来たというわけだ。

魔力解放。

当然、一発でうまくいくはずはなかったが、
ルシフェルやハウエル、キャロンなどの

第2試験合格者たちが集まってきて、かなり賑やかな指導となってきた。

騒ぎすぎたのをまとめる役は俺やキャロン。

苦労人というヤツだな。

…で。試験当日。

呼吸を整えながら、頭の中でイメージを描く。

…本が凄い勢いですっ飛んで、壁に突き刺さるイメージを。

相変わらず魔力開放のコツは掴めない。

ただ、何回もやっているとたまに成功、くらいだ。

（頼むぜ…！！）

「デユマ…！」

魔法の発動を告げる声が試験室に響く。

…すると、本はイメージとは程遠い、弱弱い勢いで、本の載せられた机を滑っていく。

当然壁まで行くはずもなく、机の途中で本は止まる。

どうだ…これ…1m行っただけか…！？

「…いいでしょう。第2試験合格を認めます。」

「よっしゃあ…！」

「では、次の試験も頑張ってくださいね。」

見事合格した。

これようやく第3試験に進める…。

多分試験の中で最も難しい試験だったであろう。俺にとっては。

後日談

「……………」

「……………」

耐えがたき沈黙。

舞台は中庭。

俺と黎は苦々しい表情で…未だに凍結した噴水を見つめる。

「…溶けると、思ったんです。」

俺はそっと黎の頭に手を置く。

「…気にするな。俺も溶けと思っていた。」

「…どうでしょうか。これ。」

結論は『放置』で決定した。

> i 3 2 4 6 0
— 1 5 6 3 <

Battle・14 VSデユマ（後書き）

次回予告

いつものように登校した空也。

しかし、ハウエルやルシフェルが何を喋っている分らない！？
一体何が起きたのか！！

次回 Battle・15 VS言語の壁

「Ohh Good Morning Kuya」

Battle・15 VS言語の壁

朝。

いつものように学校に登校した。
そう、いつもの朝のはずだった。

「Ohh Good Morning Kuya。」（おー、おはよう空也）

「…へ？」

「What happened, Kuya?」（どうした、空也？）

「えーっと…ハウエル？何言ってるんだ？日本語で喋ってくれ。」

「In Japanese...?」（日本語で…？）

What I'm saying for quite a while Kuya?

（さっきから何言ってるんだ？）

Hey, Lucifer!（おい、ルシフェル！！）「

ハウエルが手を挙げてルシフェルを呼ぶ。
ルシフェルが歩いてくる。

「Τι συμβαίνει;」(どうしたのですか、
κ. Howell, ok. Kuya.「ハウエルさん、
空也さん」)

「Oh, I'm just saying it for quite
a while but Kuya something strange.

(ああ、空也がさつきから何か変な事ばかり言ってるんだよ)「

Χμμ . . . τι είναι? να λθω? με
σα? κ. Kuya.」(ふむ…どうしたのですか? 空也さ
ん)

ちよ、ちよつと待て。

なんだ、何なんだ。一体どうしたというんだ!?

何かのドッキリか? ドッキリなんだよな!?

「Κιτ Kuya,
ακριβώς? . . .」(もしや空也さん…)

Aυτ? που ακο?με
τι? λ?ξει?;(生徒手帳を忘れたのですか?)「

「何言ってるかわかんねえ!!! 日本語で喋れよ!?!」

「Η π ι ο . . . ε γ ? α κ ? μ α . (なるほど…やはり
そうですか。)

, K u y a τ ο ? χ ω ξ ε χ ? σ ε ι
τ ο ε γ χ ε ι ρ ? δ ι ο φ ο ι τ η τ ? ;
(生徒手帳を忘れたのですね。)

だ、ダメだ。

何言ってるかまったくわからねえ…。

そ、そうだ!! 黎が…黎がいた!!
黎なら普通に言葉が通じる。

「言葉が通じない…? えっと、どういふことですか?」

「そのまんま。全員、何言ってるかわからない。」

よかった。黎には話を通じるようだ。
しかし一体なんで…?

「むー…もしかして空也さん。
生徒手帳を忘れたんですか?」

「え？生徒手帳…？」

つて、ああ。確かに無いな。でもそれがどうかしたのか？」

「まったく、いいですか空也さん。」

ファルシオン学園は世界でたった1つの魔法学園です。」

ああ、そうらしいな。

そもそも魔法というものを人間に教えるのは極最近の事らしい。

そのため、将来ファルシオン学園の分校ができる事は期待されているが、今のところは無い。

でもそれが一体なんだというのだろう。

「世界の言葉は共通ではありません。

だから、普通に考えてハウエルさんやルシフェルさんに対して、普通に会話が通じるはずありません。

つまり、その言語の壁をどうやって除くか。
その答えが生徒手帳なのですっ！！」

「いやいや、プロローグはいいよ。
直球でどうぞ。」

「むうゝ！酷いですっ！

要するに…生徒手帳には翻訳魔法がかかってるんです。

生徒手帳を忘れてしまつては翻訳魔法が解けるのは当然です。」

……！？

まさか…そういう事か！！

「じゃあ…あいつらは俺の言ってる事は分かるけど、俺はあいつらの言ってる事は分からないってことか！？」

「そういう事ですね。ハウエルさんたちは外国の方ですから。当然、日本語が通じるはずありません。」

「Hey Kuya・Where were you goin
g?」

(よう空也。今まで何処行つてたんだ?)

Classes will begin・(もう授業始まるぞ)」

「あー、はいはいわかった。」

とりあえず勘で返事をして茶を濁す。
でもハウエルがなんていつているかは分からない…!!

授業が始まった。

当然教師の言っていることも分からない。

「If you use this emblem of magic going on?

(この魔法を使う場合の紋章はなんでしょう?)

Well... please answer Kuya.

(えー…空也さん、答えてください。)

えー…い、いふ…If? you use this…

もしもあなたがこれを使う…

もしも貴方がこれを使うならどうする?

えーっと、これって何だ。

魔法…か?

ダメだ、黒板に書いてある事まで翻訳されてない。

もしも貴方が魔法を使うとき。

この後に繋がる質問は…!!?

…注意すべき事は何ですか…とかか？

「えー…ゴホン。」

魔法を…すばやくデユマで移動させる事…です。」

「I have heard is what the coat of arms？」

（私は紋章がどんなものなのかと聞いたのですが？）

Did you mean Kuya. You're not have a student handbook？

（もしや空也さん。生徒手帳を持っていないのですか？）「

「あー、ハイ、わかりました。」

こんなに長い文章を俺が翻訳できるわけがない！
やはり適当に返すしかないか。

「The student handbook is there a translation function.

（生徒手帳には翻訳機能があるのです。）

Student handbook, please always carry.

（生徒手帳は常に携帯してください。）

please sit down（座ってください。）「

「そうなんですか。ありがとうございます。」

ダメだ、噛み合っていない気がする…。
くそう…何故だ…何故俺がこんな目に…こんな間違ってる…！

「ん？」

廊下に生徒手帳らしきものが落ちている。
なになに…ソル…フラバー…ソルのか。

…まあいい。今日一日利用させていただこう…！

「貴様あつ…！」

「ごぼあ…！？」

立ち上がった瞬間に俺の首に衝撃が走り、
そのまま俺は廊下に倒れ…俺の意識は闇に沈んだ。

「まったく…失くしたと思ったら空也が盗んでいたとはな。
なんて野郎だ…ブツブツ…」

その誤解を解く術を、今の空也は持ち合わせていなかった。

> i 3 2 4 6 0
— 1 5 6 3
<

B a t t l e ・ 1 5 V S 言語の壁（後書き）

次回予告

ハウエル、ルシフェルとともに第3試験に挑む空也。

試験内容は小型悪魔『アルナス』の討伐。

簡単なように思えたアルナスの討伐は、意外にも難しく――！？

次回 B a t t l e ・ 1 6 V S アルナス《前編》

「破壊の象徴たる力よ、今此処に我らに宿らん！」

Battle・16 VSアルナス（前編）

第1試験、第2試験と合格して勢いづいた俺は、ハウエル、ルシフェルと共に試験受付に来ていた。この2人も第3試験を受けておらず、実に好都合と言えよう。

第3試験の内容は、小型魔物アルナスの討伐。

この試験のような戦闘系統の試験では、最悪の場合、命を落とす危険もある。そういった配慮のため、試験はグループで受ける。

…それが当たり前なのだが。
稀に黎のように例外の生徒もいるようだ。

「試験を始めます。」

試験開始より一時間経過、或いは試験者が試験続行不可能と判断した場合は失格となります。試験ターゲット撃破により試験合格となります。

試験中はいかなる魔法を使っても構いません。
では、用意はいいですか？」

「はい！！！！」

「では…試験開始！！」

試験官の声と共に試験室に結界が張られる。

外部からの不正な行為はこの結界により防がれる。

そして試験室に小型の魔物…アルナスが放たれる。

アルナスは獰猛な狼の背中に巨大な口がついた
実におぞましい姿をしている。

ウウウ…という上下の口から漏れだす唸り声が、
試験室の静寂の中に響く。

俺の武器は拳のみ。

人間に対しては強力だが

魔物相手にどこまで有効か…。

ハウエルの武器は剣。

本人曰く、魔法剣を専攻しているらしいが、
習い初めて間もない為、余り頼りにはならない。

ルシフェルは魔法で俺達の援護に回るらしい。

ルシフェルは代表生徒。その力は未知数だ。

ピリピリとした硬直状態が続く。

お互い隙は見せられない緊張が試験室を支配する。
先に動いたのはハウエルだった。

「うおおおお!!」

ハウエルは剣を片手にアルナスに走り寄る。

アルナスは微動だにせずハウエルを待ち受ける。

「喰らえ！！」

ハウエルは剣をアルナスに降りおろした。

しかし命中したかに見えたその剣は、

地面に当たりガランと耳障りな音をたてた。

——アルナスは、そこにはいなかった。

一瞬にして跳躍し、ハウエルの背後に回り込んだ。

そして背中についた不気味な牙で

——ハウエルの肩を抉った。

「があ…っ！！」

ハウエルはもがき苦しんでいる。

そのハウエルにアルナスが迫る！

「ルシフェル、ハウエルの回復を頼む！！」

「わかりました！」

ハウエルに夢中なアルナスは俺に気付かない。

その隙を縫って、俺はアルナスに

踵落としを浴びせる。

堪らずアルナスは俺と距離をとる。

そしてアルナスは俺に飛びかかる。

身を反らして回避して、アルナスの腹に蹴りを入れ頭に肘打ちを喰らわせる。

俺とアルナスの距離は再び離れる。

ウウ…と威嚇の唸り声をあげるアルナス。

再びの睨み合いが続く。

静寂を打ち破ったのはアルナスの咆哮。

咆哮にはどうやら質量があるようで、

咆哮とともに突風が吹き、俺は吹き飛ばされる。

ズダン、という轟音と共に背中に鈍い痛みが走る。

「空也さん!!」

「大丈夫だ、ルシフェルはハウエルの回復を!!」

叩きつけられた俺に飛びかかるアルナス。

「…つめんなあ!!」

アルナスの脳天に俺の拳がめり込む。

奴はガアア、と鳴きながら空中で体勢を建て直す。

「ガアアアアアア!!」

奴は再び俺に飛びかかる。

が、空中に在るアルナスの体を炎が撃ち落とした。

「よおおし、汚名返上といこうか!!」

「援護します。

…破壊の象徴たる力よ。

今ここに我らに宿らん!!『リアース』!!」

体に力がみなぎる気がした。

ハウエルは剣を構え、俺は拳を構える。

対するアルナスは、キラリと光る鋭い牙を、
上下の口からちらつかせる。

「グルル…」

俺はハウエルとアイコンタクトをとる。

（お前は左から回れ、挟み撃ちする。）

俺の言いたいことを理解したようで、
黙って親指を立てるハウエル。

次の瞬間、俺は右に走り出す。

…そしてハウエルも右に走り出す!?

「何故お前が右に回る」

そんなことをしているうちにアルナスが咆哮する。
俺達は咆哮の突風を挟んで左右に別れた。

「今度こそ行くぜ……！」

俺達は同時に走り出した。

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

Battle・16 VSアルナス（前編）（後書き）

次回予告

アルナスとの戦いが続く。

果たして空也たちは試験合格なるか！？

…時を同じくして、ファルシオン学園にはあるギャング集団が現れていた。

空也たちに新たな闘争が迫る！？

次回 Battle・17 VSアルナス（後編）

「アア？お前が俺の何を知ってんだよ…？」

B a t t l e ・ 1 7 V S ア ル ナ ス (後 編) (前 書 き)

次回から新章突入です。

Battle・17 VSアルナス（後編）

ハウエルがアルナスの背後に回った。そして俺は正面…。

追い詰められたアルナスは背中の中口で吼える。

ハウエルは剣をアルナスに降り下ろす。

奴は前方に跳んで回避するが、そこには俺がいる。俺を吹き飛ばそうと口から咆哮を放つアルナス。

だがあっさりと回避し、奴を蹴り上げる。

キャン、という犬っぽい鳴き声を上げるアルナス。

空中で体勢を建て直し、俺めがけて咆哮。

しかし俺は地上にはいない！

アルナスと同じ高さまで飛び上がった俺は、

アルナスの首を掴み地面めがけて投げつけた。

そして下にはハウエルが待ち受けていた。

「おおおおおー！！」

ハウエルの剣が、ターゲットを一刀両断したかに見えたが、実際には違ったのだ。

何と、アルナスはハウエルの剣に噛みついてるのだ。

「くそつ、離せ!!」

ハウエルは混乱から剣を振り回す。

「ハウエル!! 剣を上に向けろ!!」

「え!?! こ、こうか!?!」

そのまま動くなよ...!!

俺は落下しながら位置を調整する。

そして、アルナスの体を剣めがけて蹴飛ばす!!

ターゲットはハウエルの剣に叩きつけられ、真っ二つに斬れた。

「そこまで!! 見事、試験合格です。」

「「よっしゃあ!!」」

「見事なチームワークでしたよお二人とも。

僕がもう少しフォローできていれば良かったのですが...。」

「いやいや、ルシフェルの魔法も役に立ってたぜ!!」

ハウエルが少し乱暴にルシフェルの肩を叩く。

「痛いですよ」

ルシフェルが顔をしかめる。

その様子を見て、俺とハウエルが笑う。

それにつられて、ルシフェルもクスリと笑みを浮かべた。

「へえ、合格したんですか。おめでとうございます！」

「ああ、ありがとう。そーいや第4試験はどんな内容なんだ？」

寮。

他の部屋より広めに作られた俺達の寮に紅茶の香りが充満する。

「はい、どうぞ」

「ありがとう。」

ズズズ…。

口に含むと芳しい茶葉の香りが広がる。
微かに感じる甘味が、紅茶の香りを引き立てている。

「第4試験はですね…魔法石を集める内容です。
適当にばら蒔かれた魔法石は魔力を使えば探知できますよ。」

魔法石？

「あ、魔法石というのは、普通の石に魔力を付加したものです。
仄かに光っているので、目視でも見つけられますよ。」

それはまた面倒くさそうな試験だな。
それにしても…

「この紅茶、旨いな」

「そうですか？良かったです。」

目を細めてにこにここと微笑む黎。

「この紅茶、キャロンさんに譲っていただいたんです。
何でも、マンドラゴラの茶葉だとかで…」

マンドラゴラ

古代から生息する人面植物。

雑草のように森に生息しているが、
引き抜くと半端なくうるさい悲鳴を上げる。

たまに眠ることなどもあるようで、
引き抜いても悲鳴をあげないことがある。

ちょっと飲む気が失せた。

数日後の夜。

——何で、こんな所に居んのかな…。

「グッ、がはっ!!」

足で蹴飛ばしたものが苦しそうに呻く。

——何で、こんな事やってんのかな…。

目を閉じると、第3試験の事を思いだしかける。

不意に不安になり、寂しくなり。

その考えを振り払うように再び人を足で蹴飛ばす。

「ヒ、ヒイ…！助けてくれ…！！」

「…お前が、助けてくれよ…。」

お前が、俺を助けてくれよ…！！

「オイ、そっちは終わったか？…ハウエル。」

「……………ああ。」

いいんだ、これで。

弱い自分を偽るためには、少しでも自分を強く見せること。

…そうやって、生きていくしかないんだ。

心のどこかに、そんな自分の声を否定する自分がいる。
空也達といたときは、紛れもない偽らないお前だった筈。

弱い自分を偽るのは簡単だ。

だがそれは、自分が傷つきたくないために自分に嘘をつくこと。

それでいいのか？

俺はまた、逃げることに…？

俺はどうすりゃいいんだよ…？

教えてくれよ、ルシフェル、空也…。

「ガッ、ぐああ…！」

足元の人間を踏みつける。

苦しそうな表情、痛みに歪む顔。
痛々しい傷跡…。

「クッ…クックッ…」

踏みつけた感触が癖になる。

同時に聴こえる呻き声…

「や、やめて…やめてください…
な、何であなたがこんなこと…」

「…アア？お前は俺の何を知ってんだよ…？」

より強く踏みつける。
すると顔面に血が見えはじめる…

「ヒイイ！！ごめんなさい！！許してください！！！」

下品な咽び泣き。

傷や血だらけで見るに耐えない顔。

——そして許しを乞う醜い様！！

嗚呼、この感触…最高だ…！！

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

Battle・17 VSアルナス（後編）（後書き）

次回予告

ある日空也はルシフェルから、
ギャング集団『デス・レーベル』の噂を聞く。
ただストレス発散などの理由で一般生徒に暴行を加え、
金品などを盗る場合もあるという。

空也はその件について、風紀委員室に訪れるのだが…？

次回 Battle・18 VSデス・レーベル

「デス・レーベルだ。
とりあえず覚悟はいいか？」

Battle・18 VS デス・レーベル

「…ところで空也さん。」

デス・レーベルという集団を知っていますか？」

放課後、ルシフェルがそんな話を出した。

その直後、ハウエルは慌てたように教室から出ていく。

「…最近ハウエルのヤツ、何か俺たちを避けてないか？」

「そうですか？単に何かの用事があるだけではないでしょうか。」

まあ、そんなところだとは思うがな。

よし、用事が全て済んだら何か奢らせよう。

「…それで、先程の話の続きですが。」

最近、『デス・レーベル』という組織がこの学園で蔓延っているらしいですよ。」

デス・レーベル…？

「まあ、所謂ギャング集団でしょうかね。」

夜に散歩したりすると、ストレス発散や強盗などの理由で襲われるらしいです。」

「へえ…黎に気を付けるようになっておかないとな。」

「空也さん、貴方は大丈夫なのですか？」

「ん？俺は大丈夫だ。そこらのチンピラ集団ごとき朝飯前だよ。」

「それは頼もしいですね」

そう言つてルシフェルは笑みを浮かべる。

ルシフェルのこういつた表情は第3試験以降によく見られる。少しずつ俺達に対して心を許してくれているようだ…。

「ですが、今あまり夜に出歩くことはお薦め出来ません。暫くすれば、風紀委員や教員の方々が解決してくれるでしょう。」

風紀委員、ねえ…。

そういえば、俺は風紀委員に知り合いがいたんだった。

…ちようどいい、ちよつと発破かけてくるか。

「失礼しまゝっす…。お、いたいた久城サン。」

「…ああ、お前か。何の用だ？風紀委員に入りたくなったのか？」

風紀委員室。

相変わらず極端なまでに飾り気のない部屋だ。

白髪とツリ目が特徴的な風紀委員長、久城 透矢。

俺はアメジスト生徒の校則違反を連行したことでこの男と知り合ったのだ。

「残念だがそのつもりはない。…ちょっと小耳に挟んだ話があつてな。

デス・レーベルっていう…。」

久城がピクリと反応する。

首から提げられた赤い十字架のネックレスが小さく揺れる。

「…あいつらか。

風紀委員としてはアイツらほど迷惑な奴らはいねえな。

まあ、所詮は一、二年生徒の集団だ。俺に敵う奴は1人もいねえよ。

」

ほほう…それは頼もしい。

だったらとつと動いて欲しい所だが、色々都合があるのだろう。

「へえ…それは怖いですねえ…。」

「だよな。やれやれ、全く物騒な限りだぜ。」

この学園は世界でただ1つの魔法学園。魔法が使えるゆえ傲り高ぶる奴もいれば、何かしらの苦しみを抱えこつた事でしかウサを晴らせない奴もいるのだろう。

だから俺は無理にその居場所を奪ったりする気はない。教員や風紀委員に任せておくでしょう…。

「…そういえばさっきお買い物帰り道にハウエルさんを見ましたよ。」

挨拶しようとしたんですけど…何だか声をかけづらい雰囲気で…。」

声をかけづらい、ねえ…。ハウエルのヤツ、ホントにどうしたんだ…？

…仕方ない。友人のためなら体を張るのが男というものだ！！

「く、空也さん！？こんな時間にどこに行くんですか？」

「ちよっくら夜遊びに行ってくる。怪しい人が来ても扉開けるなよ？」

さあて、ハウエルはいないかな？

今度こそあいつを問い詰めて何を悩んでるのか吐かせてやろう。
あいつが俺達を避ける理由…あいつが夜に散歩理由…。

その2つを繋ぎあわせると、どうしても平和的な可能性が思い浮かばない。

まあ、俺は考えすぎる癖があるからな。杞憂であることを祈ろう…。

教員寮の廊下には運良く誰もいなかった。

呼び止められれば部屋に返されるに決まってるからな。

教員も事態の収集に忙しいのだろう。

ファルシオン学園の寮は3種類ある。

俺と黎、及び教師のいる教員寮。

男子生徒の住んでいる女子禁制、男子寮。

女子生徒の住んでいる男子禁制、女子寮。

全てをあわせると一般の大学レベルの大きさだ。

ファルシオン学園の規模の大きさがわかる。

夜の学園。

不気味さが漂う校舎には門が閉じているため近づけず、

近くにある旧校舎には容易に入ることができる。

∴旧校舎のあまりの不気味さに、誰も近寄ろうとしないからだ。

学園から寮までの距離は徒歩5分程度。

俺はその場所を先程から往復している。

当然この行動には意味がある。

先程から俺をつけてくる気配がするからだ。 ∴恐らく、デス・レーベルだろう。

そろそろあちから行動を起こす筈。

「オイ、そこのお前。」

思った通り…振り替えると仮面で顔を隠した男が立っていた。

「デス・レーベルだ。とりあえず覚悟はいいか？
お前の有り金全部貰おうか！！」

男は剣を抜く。

まあいい、そっちがその気なら…

「上等だ…」

俺は一瞬で間合いまで踏み込み、軽い蹴りを喰らわす。
相手は剣で防ぎ、少し怯んでいる。

待てよ、あの剣…

考え事をしていると相手が斬りかかってくる。
後ろにステップして回避し、
もとの構えに戻りきらないうちに顔面に鉄拳を浴びせる。

「ぐあっ」

同時に仮面が外れ、地面に落ちる。

男は慌てて仮面を拾おうとする、が…

それよりも早く俺が仮面を踏み碎いた。

男は明らかに狼狽し顔を隠そうとしている。

「無駄だよ…俺はもう気付いてる。

いつからなんだ…こんな下らないことやってるのは。」

目の前の男は答えない。俺は苛立ちから歯軋りする。

「いつからなんだよ……！」

「答える！！ハウエル！！！！」

接触不良で点滅する街柱電灯に照らし出されたのは…

——紛れもなくハウエルだった。

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

B a t t l e ・ 1 8 V S デス・レーベル（後書き）

次回予告

空也に襲いかかった刺客はなんとハウエルだった。

ハウエルが語る己の過去、そして深い傷。

数々の複雑な感情が交錯するなか、空也はある決心をする。

次回 B a t t l e ・ 1 9 V S ハウエル

「そのためなら俺は、何だって壊せる。」

Battle・19 VS ハウエル、リベンジ

「…俺がデス・レーベルに入ったのはごく最近だ。下らない、か。確かに…お前にはそう見えるだろうな…。けどな、俺には…失えない重要な居場所なんだよ…！」

「ハッ、苛立ちに任せて一般生徒に暴力を振るうような連中が！？そんなところがお前の居場所なのか…！」

「うるさい…！」

ハウエルは声を張り上げる。

その声は怒気を孕んでいながら、どこか悲しげだった。

「俺は…俺は所謂苛められっ子だった。

理由は単純、俺が小さい頃体が弱く、そんな俺を苛めるのが面白かつたんだろ。

中学に入っても、それは続いた。

『消える』『死ぬ』…その言葉の通りになってやろうかと思ったこともあった。

だがある日。

ふとしたことから不良の先輩に気に入られた俺は、次第に苛められなくなった。

丁度、クマノミがイソギンチャクに隠れ他の魚から逃れるようにな

次第に友達もできていった。

だがその始まりにはその不良の先輩がいたんだ。

俺はその人を…そして俺の居場所を失うのが怖かった。

けどその人は4月頃に突然、不良グループを解散した。

何でも、母親が倒れちまってこんな事してる場合じゃないんだそう
だ。

それ以降、俺はお前と関わり、何とか生活していたんだ…。

だけである日、デス・レーベルのボスに出会った。

——— こんな男に誰も勝てる筈がない。

恐怖と共に、この男となら絶対に自分の居場所はなくならない、と…
直感した俺はデス・レーベルに入った。

俺はようやく手に入れたんだよ。絶対に揺らがない自分の居場所を
な！…」

…ハウエル…。

…だが下らない。その居場所が絶対に揺らがないと誰が決め
た？

しかし今のハウエルには何を言っても無駄だろう。

ここは手っ取り早く…

「ハウエル！！お前に…決闘を申し込む。【デュナミス】」

ファルシオン学園には“決闘”というシステムがある。
決闘を申し込むものは【デュナミス】という始動呪文を唱え、
決闘を受けるなら、【ラミステス】という呪文を唱える。
二人で呪文を唱え、【決闘フィールド】を作り出す。

決闘フィールドで起きた怪我等はフィールドから出た途端修復される。

これにより、やむを得ない体罰や喧嘩や、試合などを安全に行える。

決闘等を観戦し魔物と戦う参考にしたり、
戦うことにより何かがわかり会えたりすることを期待しているため、
決闘というシステムが作られ、よく行われている。

正直、廊下が塞がれるし邪魔くさいとは思っていなかったが、
今回ばかりはこの珍妙なシステムに感謝する。

「…どうするつもりだ？まあいい、【ラミステス】」

ハウエルの呪文により、決闘フィールドが張られる。
夜の闇に、フィールドの光が映える。

もう決闘が終わるまでここからは逃げられない…！！

「ハウエル！！お前が俺に負けたら、デス・レーベルを抜けて貰う
！！」

「なっ！？」

「さあ、お前も何か要求しろよハウエル。」

ハウエルは少し何かを考える。
そして、

「お前が俺に負けたら…ルシフェルや黎ちゃんに筋通して話してくれ。
もう俺に関わらないでくれ、ってな。」

そいつは悲しい要求だな。正直、うまく話せる自信はないぜ。

だが！俺がハウエルに勝てば何の問題もない！！

「行くぜ…！」

ハウエルは剣を振りかざし、俺に向かって走ってくる。
だが甘い！！この程度の攻撃、回避するのは造作もないこと！

俺はハウエルの懐に飛び込み、腹に肘打ちを喰らわす。
が、ハウエルも負けてはいない。
剣を両手から片手に持ち換え、片手で肘打ちを受け止める。

「…相変わらず、出鱈目な速さだな。
けど今の俺はボスに魔法剣を教えてもらった。悪いがお前じゃ…」

ハウエルは俺を弾き飛ばし、剣を両手に持ち換える。
更に剣は風属性の魔法を帯び、真空の刃を纏った。

「――相手にならねえぜ!!」

ハウエルが剣を降り下ろすと、真空波が俺めがけて飛んでくる。しかしこの程度の質量が一つじゃ、実戦には向かない!!

俺は横っ飛びで回避して受け身を取る。

体制を建て直し、ハウエルとの間合いを詰める。

だがハウエルは俺の方を向き直し、剣を2降り。

ハウエルは剣を振るうスピードは遅い。ならばその隙をつく!

「うおおおおああ!!」

ハウエルは次に剣に炎を纏わせながら俺に接近する。

俺はあえて避けもせず、動かない。

ハウエルは俺の行動を怪しんだがそのまま突っ込んできた。

ハウエルが剣を降りあげたその瞬間、ハウエルの脇腹を縫って前転し背後に回る。

これで…!!

「――させるかよ。グミマス!!」

魔法が発動する。突如、ハウエルの回りに真空の刃が発生する。

ハウエルの背後に急接近していた俺はもろに真空波を喰らう。肉が裂け、血が噴出する。が…!!

「俺の勝ちだな――……。」

「は…？」

真空波の中で腕を犠牲にしながら、ハウエルの首を掴む。
そして、首を掴んだまま顔面を地面に叩きつけた。
これには堪らず魔法が途切れる。その一瞬の隙を突いて…

「歯を食いしばれハウエルウウウ！！」

俺の拳が、寸分狂わずハウエルの顔面を射抜いた。

決闘フィールドが閉じる。決闘の勝者が決まったからだ。

「さて…約束はキッチリ守れよ。」

今日以降、デス・レーベル構成員としてのあらゆる活動を禁止する。

「

「でも…それじゃ俺はどうすりゃいいんだよ？これじゃ居場所どころか、

俺がデス・レーベルに狙われちゃう…。」

だろうな。だから…

「デス・レーベルは俺が潰す。だからお前に手出しもさせない！」

「な…！！お前、正気か！？」

「ああ、当然正気だ。

友人のため。そのためなら、俺はどんなものでも壊せる。」

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

B a t t l e ・ 1 9 V S ハウエル、リベンジ（後書き）

次回予告

ハウエルのため、デス・レーベル狩りを始めた空也。
そんな空也により、デス・レーベルは崩れ始める…！

次回 B a t t l e ・ 2 0 V S デス・レーベル狩り

「全員検挙すりゃ済むことだ」

Battle・20 VS デス・レベル狩り

「デス・レベルに所属している生徒は26人。その内の一人が俺だ。」

でも俺は計算に入れない。なら合計で25人の生徒だ。

その中には2年生や上級クラス生もいる。どう考えてもお前1人じゃ…。」

「問題ない。そいつら全員検挙すりゃ済むことだ。」

とはいえ、少しきついかも…。全員が決闘に応じる筈もないし、決闘フィールド無しでのリアルファイトも普通に考えられるだろう。

その夜。

（そろそろ時間だな…。）

只今夜の9時。

デス・レベルの活動時間は9時から11時位らしい。

（黎が寝てるからな…出来る限り音を立てないようにしよう…）

ゆっくりと寝室から出ていき戸を閉める。さて、では…

スー、と音を立てて戸が開く。振り返ると、眠そうに目を擦る黎がいた。

「空也さん…こんな時間にどこへ行くんですか…？」

「あ、イヤ、その、なんだ。ちょっと眠れなかったから外に散歩にでも、と。」

黎は明らかに俺の嘘を怪しんでいる。…と思つたら。

「そうなんですか。早く帰ってきてくださいね？」

…ああ、それと先生達には見つからない方がいいでしょう？
夜に寮から出るのは今は禁止されていますからね。」

そう。それが今日の俺の一番の不安要素だった。

デス・レーベルの問題を重く見た教員達は、一時的に夜の外出を禁じたのだ。

無論、寮にも見張りがついた。が、教員寮の生徒は俺達だけなので、警備の教師は1人。その1人を何とかしなければデス・レーベル狩りには行けない。

「私が寮の外まで送ります。帰りは…なにもしてあげられませんが…」

準備は良いですか？」

俺の体が青白い光に包まれる。これは高レベルな『空間転移魔法』だ。

「イプシリアス!!」

俺の体が寮から消えた。

（私にも言えないなんて余程の事なんですね…。
事が終わったらちゃんと全部聞かせてくださいね？）

俺は寮の正門前に飛ばされた。ここからならアイツらの出沒地点まで行ける。

俺は小走りで学園周辺まで来ると、その辺りを彷徨く。

やがてそれらしき人物を発見する。2人組で、何か話しているようだ。

『あーあ、抜けんのに苦労したぜ。先公共が余計なルール作りやつてよ…』

『そうだな。だが封鎖されんのは9時からだ。それより先に外に出ていれば出てこられるぜ？』

『マジかよ、それ俺もやる！！』

『にしてもやつぱ、あのルールのせいで誰もいねえな。つまんねえ』

「お前ら、デス・レーベルだな…」

2人は漸く俺の存在に気付かなかつたらしく、大袈裟に驚く。

「何だてめえ…！」

「俺はデス・レーベル狩りを始めた…風紀委員代理、小泉空也！大人しく連行されるか、抵抗して連行されるか、選べ。」

「選ばねえよ。てめえを潰す。ちやうど退屈してたんだ…」

「オイ、でも風紀委員って…」

「いんだよ、んな話聞いてねえんだから。」

確かに…今のはハツタリだ。検挙のためには何かしらの肩書きが必要だからな。

当然こいつらは決闘に応じない。
ならばリアルファイトになるな……。仕方がない。

「そもそも俺達は2人。お前1人で何ができた、よ!!」

2人のうち1人の生徒は紫をベースとした制服のアメジストクラス生。

俺めがけて黒い光…闇の魔法を投げつける。

横に回避するが、黒い光はいきなり爆発する。

「うわっ!?!」

爆発には巻き込まれなかったが、爆風に吹き飛ばされた。

追い討ちをかけるように氷属性の矢で俺を追撃するアメジスト生徒。

「ハハハッ、逃げ回ってばっかじゃねえか!!それでも風紀委員かよ!?!」

「——誰が、逃げたって?」

氷の矢を一通り回避した俺は、一瞬でアメジスト生徒の背後に回る。

「なっ、いつの間に…!?!」

「バイバイ、まずお前検挙。」

アメジスト生徒の首に手刀を打ち込み、気絶させる。あと1人だ。

もう1人は緑をベースとした制服のエメラルド生徒。

先程のアメジスト生徒との会話でこいつが上の立場から話していたため、

恐らくは2年生だと思われる。

「フン、何も考えずに突っ込むからそんなことになるんだよ。手本を見せてやる。」

そう言って2年生は左手に炎、右手に氷を造り出す。

そして同時に俺に投げつける。炎と氷が交わると、大爆発を起こした。

「お前らトパーズは知らないだろうが…反対属性の魔法を同じ場所に発生させると

その2つの魔法が反発しあって大爆発を起こすのさ。」

「解説ありがとよ…でももうちょい早く出さないと実戦には向かないな!!」

「何い…!?!?」

「お前も検拳。」

1人目と同様首に一撃入れ、気絶させる。これであと23人だな。

「お邪魔しまーす。久城、こんなの捕まえた。
デス・レーベルの構成員だ。連行したから、あとはそっちで頼む。」

風紀委員室。

久城に、昨日の連中を届けた。

「…ほう、そりゃご苦労だったな。
お前ら。反省文でも書いてろ。逃げたら…潰すぞ。」

「そんな、ぼ…」

1人が何かを言おうとしたが、言い切る前に久城は生徒の顔を
思いきりガラス製の机に叩きつけた。

ガラスは硬質ガラスのようでヒビも入らないが、その分ダメージは
大きい。

「ぐぶあ！？」

「てめえらは学園の風紀を乱したんだよ…！！
てめえらに口答えする権限なんざねえんだ！！とつとつやりやがれ
！！」

机に叩きつけられた生徒は痛みにもがき苦しんでいる。
ガラス製の机には血が飛び散っている…。叩きつけられた顔面は血

で汚れていた。

絶句する俺の隣を久城が通り過ぎていく。

…何もあそこまでやることないだろ…！？

「ボス！！あの空也とかいう奴のせいでもうメンバーが15人しか…！」

「ボス、どうするんですか？」

空也が狩りをはじめてから数日後の夜。

校舎裏に、デス・レーベルの複数の構成員とその首領が話している。首領の顔は夜の闇に紛れて見えにくい。

「問題ない。そろそろ手を打つさ…」。

そうだな…アイツの妹に黎とかいうヤツがいたはずだ。

…そいつを使えば、アイツには何もできねえよ。…クク。」

「わかりました…フフッ」

構成員は四方に散った。

(フフ…悪く思つなよ空也あ。
)

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

Battle・20 VSデス・レーベル狩り（後書き）

次回予告

ある日空也は手紙で校舎裏に呼び出される。

そこにいたのはデス・レーベルのボス。それは空也の知っている人物だった。

遂にデス・レーベルのボスとの対決！！

空也はハウエルを救えるか！？

次回 VSデス・レーベルボス

「ハハハハハハ！！」

Battle・21 VSデス・レーベルボス

朝。

いつもより早めに目が覚めた俺は、寝室から出て早めの支度をしようとした。

「…ん？」

「あ、おはようございます空也さん。」

厨房にはパジャマ姿の黎の姿があった。

淡い水色のパジャマ。黒髪の黎には大分似合っている。

「…？どこかしましたか空也さん？」

そう言っつて黎は小首を傾げる。やばい、可愛い。

「ああ、なんか早めに目が覚めてな。昨日遅く寝たつてのに…。」

「そうなんですか。…今は、深くは聞きません。

でも、全部終わったらちゃんと話してくださいね？」

「う。やっぱり気付いてたか…鋭いなあ。」

「空也さんは嘘をつくのが下手ですからね。」

ま、黎もだいたい嘘をつくのが下手だけだな。

学園——ダイヤモンドクラス1年教室——

「黎さん。無粋な感じの客が来てますわ……」

キャロンが黎に声を潜めて話しかける。

「無粋……？」

「そう。いきなりわたくしを呼びつけて、『蒼井黎はいるか？』ですって。

2年生たからってルビークラスの分際で何様のつもりなのかしら……

！！

どうなさるの？ご希望とあらば追い払うわよ？」

教室の入り口を見ると、柄の悪い生徒が3人教室の中を覗き込んでいる。

黎は少し考えてから、

「いえ……私に用があつて来たのに、門前払いしては失礼です。ちよつと行つてきますね。」

黎は一人で柄の悪い連中のもとに。

「大丈夫かしらね…あの娘。」

「何だこれ…」

今日の授業がすべて終了し、さて帰ろうと靴箱を開けると、手紙が入っていた。

【これ以上の被害と面倒は望まない

今日の夜9時に講義堂裏の通路まで1人で来い

デス・レーベルボス】

来たか…狩りを続けられいずれ来ると思っていた。
今夜9時、か…

午後9時、講義堂裏…。

「つたく、構成員が8人まで減っちまった。使えねえ奴らだな。」

「す、すいません…」

「フン、まあいい。空也を潰せばまた元通りだろうな。
教員連中は俺には逆らえねえからなあ！！ハハハハ！！

——つと、来たか。」

ここが講義堂裏か…初めて来たな。
そこにはデス・レーベルボスと8人の構成員がいた。

「よう空也ア…驚いたか？」

デス・レーベルのボス…それは紛れもなく風紀委員長、久城 透矢
だった。

夜の闇に久城の首から下げられた赤い十字架の光が映える。

「俺は、大体の見当はついてた。」

「ああ？気づいてたとしてもいいのか？」

「ああ。お前、俺が最初にデス・レーベルについて尋ねたとき言っていたよな。」

『所詮は一、二年生徒の集団だ。』ってな。

おかしくないか？すぐには動けないほど詳細不明なのに、何故3年生がいないとわかる？

そこで俺は、お前がデス・レーベルの構成員なんじゃないかと疑った。

だがお前は2年の学年主席。お前以上の生徒は1、2年にはいない。ならばお前がデス・レーベルのボスなんじゃないかと考えたんだ。」

「ハッ、見事な推理だ。で、この状況はわかるよなあ？」

構成員を含め9対1。しかも1人は2年の学年主席。

「1つ質問がある。なんでお前はこんなことを始めた？」

久城は薄ら笑いを浮かべる。

「——イライラすんだよ。」

何…？

久城は首の赤い十字架を指差す。

「このネックレスを拾い、着けてからというもの、やたらイライラする。」

特に、誰かが幸せそうにしてんのを見るとな。

外そうとしても、どういいうわけかこのネックレスは外れねえ。

おかげでイライラしっぱなしだった。

だがその幸せの表情を恐怖と苦痛で歪めてやる。
するとどうだ、経験したこともない快感が俺に走ったんだよ！

デス・レーベルはその副産物だ。俺に勝手についてくる舎弟共が、
いつの間にか増えてこんなな事が大きくなっちまった。

俺は教員に捕まるわけにはいかねえ。

だから、詳細を知ってるお前やハウエルは口がきけないようにして
やらねえとな。」

久城が左手を挙げサインを出すと、周りの構成員が俺に襲いかかった。

が、俺は魔法を回避し、近くの奴を投げ飛ばし他の連中を巻き込む。
さらに倒れた構成員の魔法剣を拾い、柄の部分で首などを強打して
気絶させる。

残りの5人と俺の距離が一旦離れる。そこで久城が立ち上がった。

「そこまで空也。…面白いものを見せてやる。」

久城は構成員に合図をする。すると構成員は奥の通路から誰かを連れてきた。

それは、ボロボロのルシフェルだった。
構成員がルシフェルを突き飛ばすと、ルシフェルは力なく倒れ伏した。

「ルシフェル!!」

「おっと動くな。動いたらこいつに電撃魔法を浴びせてやる。
構成員の奴らに散々遊んで貰った後で電撃なんか喰らったら下手すりゃ…死ぬぜ」

クソ、最悪の状況だ。

「最初はお前の妹使おうとしたんだがな。
捕らえに行った連中が全滅だ、ふざけやがって。」

久城はルシフェルを足蹴にする。ルシフェルが苦しげに呻く。

「やめろ!!」

「う…すいませ…空也さ…ガハッ」

「お前ら、そいつをやっちまえ。」

5人の構成員が俺を囲む。
1人が俺を殴ったのをきっかけに、他の連中も俺を殴る、蹴る。

(クソ…こいつら…)

頭や骨などを痛め付けられ、体が悲鳴をあげる。

「ハハハハハハ！無様な空也ア！！もつとだ、もつと痛め付けろ！！！」

全身に鈍い痛みが走り続け、いつしか俺は意識を失った…。

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

Battle・21 VSデス・レベルボス（後書き）

次回予告

久城の卑劣な策略により意識を失った空也。
そんななか、黎が現れるも状況は好転しない。

万事休すかと思われたその時、黎は一か八か空也にある魔法をかける…！

次回 Battle・22 VS『血』、リベンジ

『今こそ、お前はこの力を…！』

Battle・22 VS 『血』、リベンジ

「空也さん！？ルシフェルさん！？」

空也とルシフェルが倒れている場所に黎が現れた。

「あ？…チツ、またなんか来やがったか。まあいい…」

久城は黎に歩み寄る。

「オイガキ。余計な真似すんじゃないぞ。ここで見たことすべて忘れる。」

黎は涙目で久城を睨み付ける。

「何で…こんな酷いことを…！？」

「ああ？るせえんだよガキが。とつと失せろ。それとも…」

久城は掌に巨大な炎を造り出す。

「——痛い目見ねえとわかんねえかあ！？」

炎は黎めがけて一直線に向かっていく。

「きゃあ!？」

「く、久城さん…そこまでやりますか…？」

久城は再び炎を造る。すると構成員は黙り込んだ。

炎の激突による煙で黎の周辺は目視しにくくなっていた。
が、突然煙が晴れ、氷柱の矢が久城の喉元めがけて飛んできた。

「うお!？」

しかし矢は喉元を射抜くことなく直前で停止する。

「…空也さんとルシフェルさんを解放してください。」

久城はアイコンタクトで構成員に合図をする。
それに反応し、構成員はルシフェルの襟首を掴む。

「クク、おいガキ。ルシフェルとかいうヤツがどうなってもいいの
かなあ?」

「や、やめてください!！」

「さあ、この矢をどける。そして…障壁も解いてもらおうか!？」

「…」

黎は障壁を解く。

すると構成員の1人が黎の背後に忍び寄り、乱暴に手首を掴む。

「痛…っ！」

「フン…いくら学年主席だろうとまだまだガキだな。実戦では弱い。」

黎は怯えの表情を隠せない。手首を掴む構成員に黎の細かい震えが伝わってくる。

「ハハハ、この娘怯えてるよ、かわいいー」

「ひい…っ」

黎は最後の賭けで、空也に魔法をかける。
魔力解放を極力抑えて発動させたため、その場にいた誰もが気づかなかった。

『力を求めるか…』

ここは…俺はここに来たことがある。

そうだ、特殊能力解放授業の時に…ということは…？

『そう。ここは能力解放の為の空間。久しぶりだな。

この魔力はアルペジオン先生のものじゃない。この魔力は…黎か…？』

黎だと！？まさかあの場所に黎が！？マズイ！！

『…考えることは同じ。急がなきゃならないみたいだな！』

「ああ！とつととやられるよ！」

『出来る限りな…！ b l o o d s u m m o n s …アロー…！』

以前のようにスライム状の俺の中の『血』が、矢を作り出し俺に飛ばす。

だがその力は以前より弱まっているようで、矢は容易に手で弾けた。

俺は間合いを詰め、血に近づいて蹴りを放つ。

血は両腕を交差させ、防御した。

『…やるな。だいが人の願いを叶えたようだ。』

「まだだ…！」

俺は瞬時に血の背後に回り込み、背中に正拳突きを繰り出す。
これにはさすがに堪えたようで、血は倒れ込んだ。

『blood summonsの使い方はわかってるか？』

「わからん。」

『blood summons…スピア』

血は体から槍を取り出しながら立ち上がる。
そして一瞬で俺の間合いまで踏み込んだ。

「危ね…！」

『blood summonsの発動は自らの血が体外に出ている
ことが条件だ。』

つまり、ナイフか何かを携帯しておけ！』

突き出された槍を間一髪回避する。

さらに俺は血に一撃殴り付ける。

「了解、ソルからぶん盗る…！」

『よろしい、次！』

次に、魔法と同じように自らの血が何かを形作る様子を頭の中で描

け！！

blood summons、ソード！！』

血は自らの体から細身の剣を取り出した。

そして俺に斬りかかるが、やはり弱体化のせいで当たらない！

俺は横に避け、血にボディブローを喰らわす。

『ぐはっ、次に、１リットル以上の血を使うなよ！失血死するぞ！！』

「１リットルかどうかなんてわかんねえよ！！」

『フラフラしてきたらやめろってことだよ！！』

成る程、了解だ！！

しばらく続いた俺たちの戦いだが、ついに俺の渾身の一撃が決まり勝負がついた。

血はその場に倒れ込む。

『合格だ。だいぶ手を抜いたが。

今こそ、この力をお前に譲ろう…！！』

血は俺の姿を象っていたが、それが崩れ去る。

血は俺の体へと入っていく…。同時に俺の意識が段々とはっきりしてくる。

「久城さん、こいつどうします?」

「そうだなあ…他の連中と同じようにしてやるのか?それとも…そのロリコンに渡してやるのか?」

黎の肩がビクツと跳ねる。

「ええ!?マジですか!?ヒヤッホオウ!」

黎は恐怖で怯え、その震えは強くなる。

(空也さん…。)

黎は泣きそうな顔で空也を見つめる。
すると、空也の指がピクリと動いた。

(空也さん…!)

「手を…」

「あん?…まさかまだ意識がありやがったのか?」

「手を…離せ…」

その声は小さく、だが確かな怒りが宿っていた。

「黎から手を離せこのロリコン野郎オオーーーー！！！！」

空也是その場の誰もが目視できない程の速度で黎を捕らえている構成員の顔面に

顔が陥没するほどの威力の飛び膝蹴りを放った。

「ぐぼお！？」

構成員を一撃で沈めた空也は、殺気のこもった目で久城を睨み付ける。

その目に一瞬怯えてしまった自分が許せず、久城は悔しげに齒噛みした。

> i 3 2 4 6 0 | 1 5 6 3 <

B a t t l e ・ 2 2 V S 『 血 』、リベンジ（後書き）

次回予告

b l o o d s u m m o n s を駆使し、ルシフェルと黎を救出した空也。

もう空也を阻むものは何もない。

怒りに燃える空也は、久城との決戦に挑むのだった…！

次回 B a t t l e ・ 2 3 V S 久城 透矢（前編）

「があああッ！トパーズクラスの分際でえええ…！」

Battle・23 VS久城 透矢（前編）

「クソ、まだ起きてやがったとはな。だが状況は全く変わってねえぜ？」

「ああ、人質が1人増えたかもな。」

久城はハハハハと笑いながら黎の腕を掴み自分のもとに引き寄せる。

「痛っ…」

「ハハハハハア！！どうすんだよ空也ア！！」

笑いながら久城は黎の首をヘッドロックで固定する。

「ひうっっ」

「…すぐにでもこいつの顔面を矢で射抜いてやりたいが…まずはルシフェルだ。」

俺は先程殴られたときに付着した血をぬぐう。指先についたその血で…

「blood summons…アロー！！」

矢を造り出す。その矢は一直線にルシフェルの傍の構成員に向かっていく。

「ひえ！？」

矢は直前で停止するが、その隙を見て
ルシフェルは近くのもう1人の構成員を蹴飛ばし脱出した。
それを確認した黎は、自らの周りの空間を凍てつかせる。

「くっ！？」

久城は咄嗟に炎の障壁を張るが、靴が凍りついている。

（くそ……！！）

久城は強く足踏みして氷を砕き割る。

黎は強力無比な魔法で、残りの構成員を一掃した。
これで一気に形勢逆転。3対1になった。が……

「黎はルシフェルの治療を頼む！こいつは……俺に任せてくれ。」

黎、久城、ルシフェルは驚きの色を隠せない。当然だろうな。

久城はすぐに下卑た笑顔を浮かべる。

「ハハハハハ！お前1人に何ができたんだよ！？素直に3人でかか
つてきたらどうだ？

俺は構わねえぜ！？てめえらごとき簡単に始末できるからなあ……！」

「自惚れんなよ久城。これは見栄でも何でもねえ。

お前ごとき——俺1人で事足りるっつってんだよ……！」

俺のこの言葉が久城のプライドを強く傷つけた。
久城から相当な量の魔力が放たれる。

「上等だトパーズの糞クズ野郎！！ぶっ殺してやるぜ！！」

久城は魔法で急加速して俺に飛び蹴りを放つ。

が、俺は片腕で受け止め、逆に俺が久城を殴り付ける。

「ぐあつ」

久城は吹き飛ばされながら魔力を解放。莫大な炎を俺に投げつけた。

「blood summons、シールド！！」

先程の矢と他の血をあわせ、巨大なシールドを作り出す。

炎はシールドによって防がれ、消滅する。

「くそつ、どういう事だよ！！こいつは魔法が使えねえんじゃないのか！」

雑な調査しやがって！！てめえのせいだっ！！てめえのっ！！」

久城は倒れている構成員を蹴飛ばす。

「八つ当たりは良くねえな久城。調査は自分でやるもんだ！！」

「黙れ…黙れ黙れ黙れッ！！トパーズの分際でトパーズの分際でええああああつ！！」

久城は莫大な光と闇を両手にそれぞれ作り出す。

「ハハハハ…絶対殺す…！！逃げられると思うんじゃないぞオオ…！！」

マズイ！！反属性の魔法の拒絶による爆発か！！

これだけ巨大な魔法なら爆発はより巨大…！！逃げられねえ…！！

———なら、一か八か…！！

「うおおおお！！」

俺は久城のもとに全速力で走る。

（ハッ、一体何考えて…、！？まさか、そういうことが…！！これじゃアイツを巻き込めば間違いなく俺も巻き込まれる…！！）

久城が戸惑っているうちに俺は久城の至近距離まで近づく！

（しまった…！！）

「…っらあ…！！」

そして渾身の力を籠めて久城にボディブローを喰らわす。

「ぐぼあっ…！！」

…なぐんてなあ…！！ハハハハハハ…！！喰らいやがれ…！！」

何……！？バカな、全力でやったぞ……！？

俺は久城の風の魔法に吹き飛ばされ、木に体を強打する。

「っぐあ……！」

「ハハハ、俺には障壁つてもんがあるんでなあ……！！
ハハハハハハ、身の程知らずの大馬鹿野郎が……！！」

久城は俺を何度も何度も殴る。が、途中で俺の腕に弾かれる。
その時の隙にあわせて、俺は久城を殴り、体制を崩したところを蹴り飛ばす。

久城も体制を建て直し、再び風の刃を俺に飛ばす。

(b l o o d s u m m o n s、デコイ)

俺は先程のシールドのぶんの血で俺そつくりのデコイを作り出し、
一旦離脱。

久城の風の刃は俺のデコイを切り裂いた。

その時に生じた隙を見逃さず、俺は背後から久城に踵落としをお見舞いする。

「っがああ……！クソ、野郎……！！」

糞が、糞が、糞が、糞が、糞が……がああぁっ！！トパーズクラスの分際でえええ！！

てめえらみてえな落ちこぼれに！！この俺が！！負ける訳ねえだろおおがああぁあ！！」

久城は全身から雷を放つ。さすがにこれは避けきれない……！！

「っぐう！！」

「ハハハハハ、ハッハッハッハッハッハッハア！！」

久城は雷の威力を強める。もうこれは避けられない！！

ならこの攻撃のもとを停止させる！blood summons、アロー！！

矢は寸分狂わず久城の手に突き刺さった。

「ぐ、あああああ！！」

久城は咄嗟に障壁を張り、直撃を免れた。が、矢は刺さり鮮血が流れ出る。

雷の魔法も止んだ。今なら……！！

「——うおおおおおお！！！！！！」

喰らいやがれ久城おおお！！

俺の拳は狂い無く久城に突き刺さった。

その威力に、久城は吹き飛ばされ、地面に仰向けに倒れ込んだ。

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

B a t t l e ・ 2 3 V S 久城 透矢（前編）（後書き）

次回予告

倒れたかにみえた久城。だが久城はまだ起き上がる！！
鉄パイプを手にし、魔法剣の圧倒的実力を見せつける久城。

空也は久城と同じ鉄パイプを手に、決戦に挑んだ——！！

次回 B a t t l e ・ 2 4 V S 久城 透矢（中編）

「俺はフェアな勝負を好むんでな……！」

Battle・24 VS久城 透矢（中編）

…さて、それでは久城を教師に届けるとするか。
これでデス・レーベルはおしまいだ…！

「…っけんじゃねえぞ…！！俺はあ…ああああああああっ！！」

久城が雄叫びをあげながらいきなり起き上がった。
くそっ、さっきのも障壁で防がれてたか…！！

そして俺に背を向けて逃げ出した。
ここに来て逃げるとは思わなかったが、一応追いかける。

久城は講義堂裏口から中に逃げ込んだ。逃がしやしねえ…！！
中に入ると、久城は鉄パイプを持って俺を迎えた。

「ク、クク…俺の戦闘スタイルは魔法剣だからな。
もうお前は俺には勝てねえよ…！！」

俺はっ！！お前らなんか捕まるわけにはいかねえんだよ！！」

久城は自らに加速魔法何かをかけたようで、凄いスピードで俺の目の前に現れる。
鉄パイプを十字状に降る。鉄パイプに纏いつく炎が空中に十字を描いた。

俺は直撃を免れるため低姿勢で炎の隙間を縫って回避する。

これはヤバイな…一旦距離をとって遠距離戦に切り替えるか？

「ハッハッ、ちょこまかとしやがって！逃がしやしねえよ！！」

久城は空中に闇属性魔法の球体を作りだし、

それを鉄パイプで野球よろしく打ち出す。

球体自体はたいした大きさではなかったため容易に回避できた。
が、闇属性魔法の球体は俺の背後で大爆発を起こした。

「のわぁ！？」

爆風が俺を襲う。吹き飛ばされそうになるが何とか堪えた。

そして久城は再び俺に接近し、鉄パイプを降り下ろす。

間一髪で避けるがバランスを崩して転けてしまい、

ビュオツ、という空を切る音が入る。

「ハハハ、一気に防戦一方だなあ空也ア！？もうこのまま死んじま
いなあ！！」

久城は鉄パイプを降りあげる。

絶体絶命かと思ったが、

先程の爆風により転がってきた1本の鉄パイプが俺の足に当たる。

久城が俺に鉄パイプを降り下ろすと同時に、俺は鉄パイプを拾い上げ、そして…

ガアアンツ！！！！

「…！？何のつもりだ…てめえは例の力で幾らでも作れんだろが…！？」

「俺はフェアな勝負を好むんでな…！」

つばぜり合いが続いたが、その軍配が俺に上がると同時に俺は起き上がる。

「何がフェアだ…てめえは魔法剣習ってねえだろうが…！」

そう。俺は魔拳士であって魔剣士ではない。

鉄パイプは障壁を破るため使うにすぎない…！！

拳では砕けなくても、鉄パイプなら砕ける筈…！！

俺は踏み込みながら鉄パイプでなぎ払う。が、いとも簡単に回避され、

逆に俺が背中に一撃喰らった。鈍い痛みが走る…。

「ハハハハハ、バツカじゃねえのか！？」

「…るせえ…！」

久城は鉄パイプに風の魔法を付加する。

風の魔法は真空を生み出し圧倒的切れ味を生み出すため、魔法剣と相性が良い。

「消え失せる…！」

久城はハウエルとは比べ物にならない真空波を俺に飛ばす。

避けきれず、肩や腕、頬から血が迸った。だが戦いに影響するほど深い傷はない。

俺はまた久城に接近し、鉄パイプを降り下ろす。

だが久城は身を翻して回避し、俺の腹を鉄パイプで突いた。

「ぐぼあっ…！」

吐き気を抑えつつ久城と距離をとる。

が、十分な距離をとれずまだ俺は久城の間合いの中にいる…！

久城は体を翻し勢いをつけ、鉄パイプで俺の頭を殴り付けた。

グワングワンと頭がぼやける。顔に生暖かい液体が流れ、

左目の視界が赤に包まれる。その不快感が苛立ちを誘った。

「ハハハ、ハハハハハハハハ！死ねえ…！死んじまえ…！！！」

久城は闇の魔法を鉄パイプに付加し、なぎ払う。
動きが鈍っているせいで避けられず、もろに肋に喰らった。

俺は踏ん張ろうとしたが体が言うことを聞かずにその場に倒れ込んだ。
だ。

小さな咳が1つ出た。それには血が混じっている。

「ハハハ…！終わりだな空也。冥土の土産に良い話を聞かせてやる。
俺の実家『久城カンパニー』はファルシオン学園の最大スポンサー
だ。

万が一俺にお前が勝てたとしても、デス・レーベルという組織その
ものが、
そもそも無かったということになるんだよ。

学園は俺に逆らえない！！

お前は学園が自分の味方だとも思ってたのか？めでたい奴だ！！

例えばお前が今ここで死んでも！！

「小泉空也」という存在そのものが金の力で抹消される！！

お前の戦いはそもそも無意味なものだったんだよ！！！！」

俺はふらふらと立ち上がる。

「ハハハ、今度こそ綺麗に真っ二つにしてやるよ。せいぜい念仏でも唱えろ!!」

「…………よく動く口だな。」

久城は再び闇の魔法を鉄パイプに付加する。そして、居合い切り状に鉄パイプを横に振り払った。チャンスは一瞬……!!

「死にやがれえ、空也アアア!!」

今だ……!!

カアンツ、という耳障りな音が鳴り響いた。久城の鉄パイプは久城の手から離れ、弧を描いて落ちていく。

「なっ……何イ……!？」

「油断したな久城。鉄パイプのインパクトの瞬間に此方からも力を加えることで、相手の攻撃を弾き飛ばす事ができる。授業で習わなかったのか？」

「バ……バカな……バカな……」

「ましてや今のお前の攻撃は俺へのとどめ。余程力を入れたんだろ
う。」

武器ごと吹き飛ぶとはな。」

「バカな、バカな、バカな、バカなああああああああ！！！」

「オラアア！！！」

鉄パイプで久城を全力でなぎ払う。
すると、ガラスの割れたような音が聞こえたと同時に久城は吹き飛
ぶ。

「げふ…っ！！（ヤベエ、障壁が…！！）」

「喰らえ久城おおああああああ！！！！！」

「ぐぶ…があああああああ！！！！！」

俺の渾身の一撃を障壁無しで喰らい、久城は意識を手放し、吹き飛
び、倒れた。

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

B a t t l e ・ 2 4 V S 久 城 透 矢（中編）（後書き）

次回予告

久城の裏工作も意味を為さず、久城は停学処分を受ける。
それぞれの後日談…デス・レーベルが各々に及ぼした影響は…？

次回 V S 久 城 透 矢（後編）

「美しきものは、散りゆくときも美しい…。」

Battle・25 VS久城 透矢（後編）

「バカなっ！？どういうことだジジイ！！久城カンパニーからの金を受けたくないのか！」

学園長室。

あまり陽の入らない部屋に久城の怒鳴り声が響いた。

学園長はゆつくりと口を開く。

「…良いことを教えてやろう。我がファルシオン学園は金で持っている訳ではない。

我らエルフは人間を縛る“金”というものがいっとう嫌いだな。久城カンパニー等からの金は表向きは施設向上などに使うことになっているが…

そんなものは、エルフの魔法を使えばどうとでもなるのだ。」

「な…っ、じゃ、じゃあその金は…！？」

「その金？ああ、私の名で様々な場所に寄付している。」

「~~~~~っ！！」

久城に告げられた驚きの真実は彼の力を否定するものだった。否、実際には彼の力ではなく彼の家の力を否定したのだが、混乱と怒りで正常な判断のできない今の久城はそう感じたのだ。

「…さて、もう一度告げようか。久城透矢。お前を4か月の停学処分とする―!」

ファルシオン学園附属病院。

2人の患者が新たに入院した。

『氏名：小泉空也 生徒番号52528997333

全身に打撲、切り傷、肋骨骨折。

しかし2日程度で自然治癒。肋骨はほぼ完治。一週間程度様子見。』

『氏名：ルシフェル 生徒番号52528997330

全身に打撲。

一週間程度で回復する見込み。』

「お花取り替えますね♪」

「いやいや、良いよ其処までしなくても。長期入院じゃないんだから。」

俺は久城にやられた傷のせいで入院していた。

だが傷は3日程度でほぼ完治。今は休養みたいなものだ。
で、今朝黎が来た。甲斐甲斐しく俺の世話を焼きたがっている。

花瓶の中の花を取り替える黎の手首には包帯が巻かれていた。

久城や構成員に強く掴まれたときに捻挫でもしてしまったのだろう。

「…それと、聞きましたか空也さん？デス・レーベルの皆さんは1か月の停学処分。」

久城さんは4か月の停学処分らしいですよ。」

「へえ…。そういえば、黎は何である時あの場所にいたんだ？」

「ハウエルさんに教えてもらったんです。」

空也さんを集団で襲う計画を立ててるって。

それで私、空也さんを助けてほしいと言われてあの場所に行ったんですけど…

…ごめんなさい。かえって足手まといになってしまつて…」

俺は黎にデコピンをお見舞いする。

「痛っ！！」

涙目でこちらを見る黎。

「いいか黎。黎は足手まといなんかじゃない。」

それに、巻き込んだしまったのは俺の方だ。黎が謝ることなんて一つもない。」

「あう…そうですか…。」

「ああ、寧ろ、俺の方こそすまなかった。黎まで巻き込んだって…。」

「空也さんが謝る必要なんてありませんよ!!」

黎はあたふたしている。可愛い。

…なんか最近、自分の言動が大分おかしい…!!

すると、病室の扉が開く。
そこにはハウエルがいた。

「…私、花瓶の水取り替えてきますね。」

黎はハウエルに微笑みかけ、病室から出ていく。本当に気の使える娘だ。

「…空也。」

「ハウエル、停学になったんだってな。」

「あ、ああ。そんな事でも、ちゃんと罰を与えられたんだからよかったぜ。」

…この3日、デス・レーベルの被害者のところに回ってたんだ。

…これを持って。」

ハウエルは紙袋を提げている。中身はまだ見えない。

「空也、お前も被害者だからな。今回の件は、本当にすまなかった。」

ハウエルは頭を下げ、紙袋を渡した。
少し期待しながら紙袋の中身を覗く。

中身は…。

「つまんねもんだが…詫びの印だ。」

胸パッド。

「貴様、たいして詫びてないと見た！！！」

「な…っ！！何言いやがる！？」

「言葉オンリーの方がよかったわ！！何を考えて男に胸パッドを贈るんだ！？」

何に使うんだよ！！女装か！女装なのか！？」

「な…！！そ、そうか…だからこれまでの全員が顔をしかめてたのか…！？」

「そうだな、男に贈ったらなんの意味もないし、
かといって女に贈っても嫌味にしかない。至上最悪の贈り物だ。」

「
そうこうしているうちに、黎が帰ってくる。」

「…そういえば、黎ちゃんも俺の依頼のせいで手首痛めたっていうし…
立派な被害者だよな…。」

ハウエルはそう言つて、「紙袋を持つて」黎に歩み寄る。
さっきの話を聞いていなかったようだ…

…その後どうなったかは、言うまでもない。

病院の裏の花壇。ルシフェルが散歩に来ていた。
ルシフェルがしゃがみこみ、花に触れると花は突然枯れ果ててしま
った。

「フフ…美しいものは散りゆくときも美しい…」
ルシフェルの携帯が鳴る。

「もしもし…。」

『ルシフェル、無事ですか？貴方が傷を負ったと聞きましたか…？』

「ああ、あの程度。問題はありませんよ。…破損の可能性もありましたがね…」

『危なっかしいですね…やはり私も共に行くべきだったでしょうが…』

「それはそうと。例の十字架…久城透矢が拾っていたようですよ。」

『ほう…それは面白いことになりそうですね。』

「フッフ…『キヌフ・クムル吸血十字』の力を測るいいサンプルです。」

『それと…魔神狩りの件、どのくらい進行しましたか？』

「急かさずとも進んでいます。あと250といったところでしょうか？」

「…ルシフェル？」

「…！では僕はこれまで通り進行します。」

「ルシフェル。何故こんなところに？病室じゃ騒がれてるよ。」

「ああ…兄さん。少し外の空気を吸いたかったです。すみません。」

そこには、ルシフェルの兄のリースが立っていた。

ルシフェルの兄リースは3年生の学年主席で生徒会長でもある。

「そう…それもいいけど、今度からは許可を得てからいくと良いよ。」

「わかりました。…失礼します。」

すれ違い際にリースが言った。

「亜空の邪神…一体何が目的だい？」

「兄さん…？一体何を？」

「何でもないよ。さ、行っておいで。」

（やはりあの男、ルシフェルに…）

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

B a t t l e ・ 2 5 V S 久 城 透 矢（後 編）（後 書 き）

次回予告

何だかんだで空也に負けっぱなしのハウエル。

このままでは男として引き下がれない！ハウエルは空也に勝負を挑んだ…！！

次回 B a t t l e ・ 2 6 V S ハ ウ エ ル i n ゲ ー セ ン

「何かなんでもお前に勝つ…！」

Battle・26 VSハウエルインゲセン（前書き）

作中のクイズゲームは実際にあります。

それと、作中のシューティングは僕もやってみたいです。

Battle・26 VSハウエルinゲーセン

「空也、放課後勝負しようぜ」

昼御飯を学食で食べていると、ハウエルが突然妙な事を言い出した。

「唐突だな」

ほぼ食い終わっていたカレーを片付け、ハウエルの話に集中する。
ハウエルの前には手のつけられていない定食セット（A）。

ハウエルはさっきまで食事を選べないでいたのだ。

「勝負って何だ？決闘でもするのか？もう俺は御免だぞあんなメン
ドイの…」

「心配するな、決闘じゃないから。」

…デス・レーベルの件は本当にすまなかった。…だが！！
俺は気付いてしまった。俺がお前に勝ったことが一度もない事に！
！」

ああ、そういえばそうかもしれない。

初対面の時はあっさりと俺がボコリ、

デス・レーベルの時に若干良い勝負だったが俺が勝って…。

「無いなあ、確かに」

「おまつ！？サラツと言っなよ！？」

…ま、まあ確かにその通りだ。俺はお前に勝ったことがない。
だから放課後、お前にリベンジしたいんだ。」

「リベンジって…なにでやるんだ？」

「詳しいことは後でお前の寮に行く。」

確か、お前は黎ちゃんと教員寮に住んでるんだっとな。」

というわけで放課後、教員寮にハウエルが訪ねてきた。

「ってか、なんで教員寮なんかにいるんだ。来にくいったりやありやしない。」

確かに。教員寮なんかに来るのは何らかの委員か余程の勉強熱心の奴だけだ。

「んで、何処に行くんだ？」

「ゲーセンだよ。彼処なら色々あるだろ？一つくらい勝てるんじゃないか？」

ハウエルは相当な負けず嫌いらしい。

しかし当然、俺も負けられない。…俺も負けず嫌いだからだ！

この世界には2つの大陸がある。

西の大陸が人間の棲む科学の発展した大陸。

そして東の大陸がエルフの棲む剣と魔法の大陸。

古代では2つの大陸はお互いの存在を認知していなかったが、人間の科学発展、エルフの好奇心などでお互いの大陸に移動するものが出てきた。

しかし多くのエルフは人間の事が嫌いなようで、好奇心に負け人間の大陸に行ったものはエルフと見なされず種族から追放。

だがそんな厳格な掟も時代と共に段々薄れていき、ほぼなし崩しのに廃止された。

そして人間とエルフが結ばれるようになり、2つの種族は共存している。

そしてファルシオン学園はエルフ大陸に建てられている。

魔法を教えるのはエルフなのだから、当たり前と言えば当たり前だ。

ファルシオン学園には人間に合わせて、近代的なデザインとなっている。

そんなファルシオン学園の周辺施設にはカラオケやゲームセンターもあるのだった。

「いや、こういう所来るとテンション上がるな！」

「…黎も誘えばよかったか…」

そこ、シスコンとかロリコンとか言うんじゃない。

「じゃ、なにからやるか？」

ハウエルは店内を見回すと、エアホッケーの台に走り寄る。

「よし、第一回戦はこれで！」

「一回で終わらせる気はないんだな…」

ともかく、1000円を投入し開始する。空気でホッケーの球が持ち上がる。

最初はハウエルから。

スコン、という小気味良い音が響き、かなりの速さで球が飛ぶ。

だが！！こんなものでは俺から点は取れない！！

ガゴン！という喧しい音が響き、次の瞬間にはハウエルのゴールに球が入っていた。

1ポイントを告げるホイッスルの電子音が響いた。

「くっまだまだあ！！次だ次！」

（音声のみによるダイジェストでお楽しみください）

スコンッ！

ガゴンッガンッ！！

パカンッ！

ガンッ！！！！

ピピーッ！ヨッシャー！

マダマダア！！

ガンッ

パカンッ！

ガンッガガン！！

ピピーッ！チョ、オマ、ズルクネ！？

ハッハッハ、ナニヲオッシャルハウエルサン！？

結果は10 - 2で俺の勝ちだった。
俺がどんなズルいことをしたかは想像に任せよう。

2回戦。レースゲーム。

特に語ることすら無しに俺の勝利。ハウエルはカーブが下手ですぐ壁に激突する。

まあ、俺も2、3回は当たったのだが。

3回戦、クイズゲーム。

魔法学園を舞台としたクイズゲームで、幾つかのジャンルから出題される。

問題に正解すると自分が選択したキャラの乗っているホウキが加速。逆に不正解するとホウキが減速。答えなくても減速。

つまり、連続正解が求められるわけだ。

俺とハウエルはそこそこの正解数だったが、俺が1歩リードし勝利。

…一位はNPCだった。

「A H——！！」

何だったら勝てるんだ！！」

発狂寸前のハウエルを慰めながら店内を見回すと、一際大きなゲームがあつた。

近くに寄つて見てみると、体感型シューティングゲームらしい。

「よし、ハウエル。次はこれで！」

「ん？体感型シューティング、弾丸地帯。

なになに：『このゲームは、実際に君が銃を持ちプレイするぞ！！会場に入れば君は命を狙われる賞金首。多くのプレイヤーが君を狙う！

プレイヤーは全員頭にセンサーを装着している。

センサーを5回撃たれたらゲームオーバー！

そして敵を撃破すればその分の賞金がポイントとして加算され、君の賞金額が高くなる。つまりは狙われやすくなるぞ！

さあ、君は生き残ることができるか！？店内最高記録：\$ 366

52798 ソルⅡフラバー』

…ソルって、あいつの事か！？」

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

Battle・26 VSハウエルinゲーセン（後書き）

次回予告

ハウエルとの勝負で発見したのはソルの記録。

さらに空也・ハウエルの入場と同時に、記録保持者のソル、キャロンと黎も何故か参戦する事に!?

この5人の中で、勝つのは誰だ!?

次回 Battle・27 VSハウエル・ソル・黎・キャロン

「なんてカオスな顔ぶれなんだ」

「誰が来ても目的は空也だけだがな!」

「新たな記録を樹立してくれる!」

「何故わたくしがこんなもの…（ワクワク）」

「…キャロンさん?」

Battle・27 VSハウエル・ソル・黎・キャロン

あいつってそんなにゲーム得意だったのか」

「ま、俺には関係ないな。さあ空也！！入るぞ！！俺の相手はお前だけだ！」

中に入ると、雰囲気溢れるカウボーイのいそうな景色が広がっていた。

おそらくエルフの魔法等で作ったんだろう。

隣にハウエルの姿はなく、どうやら別々な所に飛ばされたようだ。辺りには銃声が響く。流れ弾が建物に当たると建物が一部壊れる。決闘フィールドみたいなものなのか？

俺の腰にはホルダーが巻かれており、その中に銃が2丁入っている。俺はそれを抜き構える。

「新たに4人のプレイヤーが入場しました。」

やってる最中にも入ってこられるのか。それで記録を伸ばすわけだ

な…

「念を押しておきますが…

わたくしは決してこのゲームが目当てな訳ではありませんわよ。
まったく、何でわたくしがこんな…（ワクワク）」

「わかってますよキャロン様。」

話しているのはキャロンとそのお付き、フォルス。

キャロンはゲームをやったことがないのだが、ふとしたことから興味を持ち

アルカ・フォルス・黎とともにゲームセンターまで来たのだった。

「さて…ここではわたくし達は敵なのですし、先ずは別れますわよ。
では、幸運を祈るわ。」

『新たに1人のプレイヤーが入場しました。』

「フフフツ、新記録を樹立してやる…!!」

新たなプレイヤーはソル。

すでに相当な記録を保持するソルの賞金額は圧倒的。
それを知り、多くのプレイヤーがソルに近寄ってくる。

「甘いわ…!!」

ソルは2丁拳銃を抜くと、回転しながら周囲の敵を撃つ。
寸分狂わず周囲のプレイヤーの頭部を撃ち抜く。

そのうち2人は既に4発喰らっていたようで、ゲームオーバーで会場から消える。

「ふふん、実際の銃じゃ反動があつてこうはいかない。そこが良い
」

「とりゃ——！！」

「きゃあ！？」

黎は突然の襲撃を間一髪回避した。

その主を見ると、キャロンのお付き、アル力だった。

（最近、キャロン様のお付きとしてお側できないのは…

この子がキャロン様とやたら一緒にいるから！お仕置きよ…！！）

アル力は黎の頭部めがけて引き金を引いた。

ピ—————…

被弾を告げる警告音が響く。だが、被弾は黎ではない。

「なっ、貴方は…！！？」

「空也さん…！！」

俺が大分ゲームのやり方を覚え3人ほど倒したところで、驚くべき事に黎の姿を見つけた。

銃を向けられていたので、つい反射的に庇ってしまい、一撃被弾。

すかさず俺は2丁拳銃で1発ずつ頭部に撃ち込む。

黎を狙った女子生徒は2発被弾。不利と判断した女子は俺から逃げる。

逃げる女子に更に2発撃ち込む。残り1発だが、撃ち漏らした。

「空也さん、何でここに？」

「遊びに来た。黎こそ、何でここに？」

「キャロンさんに誘われてきたんです。このゲームを選んだのは私ですけど...。」

パン！！

黎のセンサーが反応する。誰だ！？

「れ、黎さん！？」

「キャロンさん...？」

「そ、その話は他言無用といったでしょう！？」

「あれ、そうでしたっけ...」

キャロンは引き金を引く。同時に、俺も引き金を引く。
キャロン、黎のセンサーが鳴るが、キャロンの標的は今俺だな。

「…そういえば、貴方と力比べしたことはなかったわね。」

「そういえばそうだな。ま、この場での戦いが正確な力の差にはならないが…。」

「まったく…黎の兄だっけ？過保護すぎるわ…」

残りライフ残量1のアルカが呟く。

今は建物の裏に来ていて、誰にも見つからない。

…今は、の話だが。

ザッ

「！」

「よくライフが少ないプレイヤーがここに隠れるんだよねあ…」

(ヤバ…)

パン

アルカはゲームオーバーとなり、会場から消えた。

『ソルⅡフラバー \$ 3 6 8 5 4 3 6

↑

ソルⅡフラバー \$ 3 6 8 7 4 3 9
』

「く…完敗ですわ…」

キャロンはゲームオーバーになり会場から消える。

「おや珍しい。空也に黎様。こんなところで会うとは…」

「お、へっぽこソル君じゃないか。…何てカオスな顔ぶれなんだ！」

「ちゅーわけで、さいなら空也。その記録も俺が貰うよ。」

パン

しかし被弾の警告音は聞こえない。俺が弾丸を避けたからだ。

「弾丸避けだと…！？」

「ぬおおお！！」

俺は一気に距離を詰め、ソルの頭に銃口を当てる。

だがさすがは記録保持者か、ソルも俺の動きと同時に俺の頭に銃口を当てる。

「ふっ、俺はまだ一撃も被弾していない。ところが空也。お前は一発喰らっている。」

俺が四発撃ち込む早さと、お前が五発撃ち込む早さ。どっちが早いかやってみるか？」

「望むところだ…！」

パンパンパンパンパン！！
パンパンパンパンパン！！

「やっぱソルのが早かったか…」

俺は四発被弾して消える筈だったが、消えたのは目の前のソルだった。

どういう事だ…？俺は四発しか撃てていないはず…
消えたソルの代わりに立っていたのは…ハウエルだった。

「フツフツ…今度こそ俺の勝ちだな…！」

「あー…それっばいな…」

パン…！！

「あーあ…欲張るからだよ。あそこで切り上げておけば最高記録だったのに…」

結局ハウエルは欲張って記録増加を目指すうちに他のプレイヤーに撃破され、

一気に記録が0になったのだ。

「いんだよ。お前に勝つのが目的だったんだから。」

あくまで目的がぶれなかったハウエルの面持ちは清々しかった。

「さあ！敗者は学食を一食奢る掟だ！！」

「うえ！？んなルールいつ定めた！？」

「今だ！」

ハウエルは走り出す。夕陽をバッグに、ハウエルの姿が影になっている。

俺は同じく走り出した。

「いいのか？そのルール、お前にも適用されるぞ？」

「うげ！じゃ、じゃあそのルール廃止で！」

俺たちは寮に走った。

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

B a t t l e ・ 2 7 V S ハウエル・ソル・黎・キャロン（後書き）

次回予告

デス・レーベル解散と共に停学になった久城。
久城が帰ってくるまでは風紀委員がいないことになる。

そこで臨時風紀委員として選ばれたのは空也だった！？

次回 B a t t l e ・ 2 8 V S 揉め事

「冗談じゃない、俺は嫌ですよ」

B a t t l e ・ 2 8 V S 揉め事（前書き）

オレンジミルク若鶏のチリソース弁当 50円 + （半額シール）
25円 〃

Battle・28 VS 揉め事

デス・レーベル騒動があつたのは5月。

久城は4か月の停学処分なので、9月まで風紀委員が誰もいなくなるわけだ。

…で。

「何故俺なんですか…!？」

「デス・レーベル騒動を終結させたのはあなたです。

十分、【臨時風紀委員】としての素質はあります…」

「冗談じゃない、俺は嫌ですよ。そんな面倒なこと…」

風紀委員顧問の先生が俺の寮に訪ねてきた。

なんでも、俺に臨時風紀委員をやってほしいとの事なのだが…

「そもそも、俺はトパーズクラス生です。

そんなのに注意されて素直にしたがう奴は最初から問題など起こさない。」

「それは重々承知です。しかし、今の貴方はなかなかの有名なのですよ?」

「え。」

それは初耳だ。たしかに新聞部にインタビューとかはされたけど…。

「魔力の少ない生徒などの間では貴方は英雄視されています。魔力無しで2年の学年主席を倒したと。」

「え、英雄……？」

くっ、騙されるな俺！！これはこの教師の卑劣な罠だ……！
……本当ならとても嬉しいが。いやしかし、風紀委員なんて面倒は嫌だ。

「やはり断ります。なんというか、俺には荷が重いですよ。」

「そうですか……それは残念です。では仕方ないですね……」

貴方の妹さんに頼みましょう。」

は………？

今……この男は何を言った？

「黎さんはデス・レーベル騒動を終結させるのに一役買ったそうですね。」

あの年齢で、大した勇氣です。まさに臨時風紀委員に相応しい。」

「ま、待った待った待った……！！」

黎では事態の対処に行っても舐められますよ……！！」

「そうですか？黎さんのような可愛らしい娘に乱暴な真似はしませんよ。」

こいつ…教師でなければその喉を潰してやりたい。

「それに、黎にもしもの事があつたらどうする気ですか！
黎の現保護者として許可しません。」

「ううむ、困りましたねえ…とはいえ、貴方と黎さんは血が繋がって
いないし、

それほどの強制力も無いわけですしねえ…」

「ぐ。」

違うんだ…血は繋がってるんだよ…！！
ただうっかりで名前を統一しなかっただけで…！！

「本人がやるというのにダメだと言い強制するなら、
それこそ本人の意志を潰す愚行な訳ですし…」

「ぐぐ…。」

「まあ、何より大切なのは黎さん本人の意志な訳ですよ。
本人が帰ってきたら話をしますので、暫く待たせてもらいます。」

く…黎の保健委員の仕事は終わり、そろそろ帰ってくる。
ん？保健委員？

「…黎は既に保健委員に属していますか？」
「臨時ですから問題はありませんよ。」

ダメか!!

早くしなければ黎が帰ってきてしまう……!
そんな事を考えていると、扉が開く。黎が帰ってきてしまった。

「あれ…お客様ですか?」

「ああ黎さん、ちょうど良いところに。実は…」

「待った!!」

…臨時風紀委員には……俺がなります。」

教師はニヤリと笑みを浮かべた。

「????あの…と、とりあえずお茶煎れますね。」

「ここが風紀委員室です。まあ、知っていますよね。」

翌日。

まんまとのせられて臨時風紀委員になってしまった俺は、
風紀委員顧問の教師と色々な確認をしていた。

相変わらず飾り気の無い部屋だが、これは後々改装していこう。

「それで…風紀委員の大まかな仕事内容を説明します。
基本の仕事は、校内のパトロール。揉め事があれば仲裁します。
それと、校則違反を見つけたら取り締まってください。」

大体こんな感じらしい。臨時風紀委員なのだから、あまり大きな仕事はないのだ。

昼休み。

いつもなら学生食堂にいる俺だが、今日は違う。
俺は今、風紀委員室で昼食を摂っているのだ。

「空也さん、良いんでしょうか…僕たちまで入ってしまったて…」

「いーのいーの。どうせ誰も見に来ないんだから。
しかも、昼休みはトラブルが起きやすいから風紀委員室にいろ、
っていったのはあの教師だし？文句言える立場じゃないさ。」

「めちゃくちゃな理論だな…」

失礼な奴め。非の打ち所もない完璧な理論じゃないか。

「そもそも、久城が1人で風紀委員をやれていた理由を考えてみる。そんだけやるのが少ないってことだよ。

こんな風に待機してたって、誰かが来る訳「すいません！ちょっと来て下さい！！」」

マジですか。

強引に腕を掴まれ、引き摺られるように部屋から出される。

「ちょ、待てよ！俺の弁当はあゝゝゝ！！！？」

『心配すんな！弁当はちゃんと…』

ハウエルの声が室内から聞こえる。

そつか、ハウエル…俺の弁当をちゃんと守っていてくれるのか。やはり持つべきものは友人だな！

『——ちゃんと、俺が食つといてやるから』

「腕を離せえっ！！目の前の揉め事より、まずあいつの根性を叩き直す！！」

「ダメですよ、貴方は風紀委員なんでしょう！？ホラ、来てくださ
い！！」

「ぬわ

っ！！！！」

「くそ、恋人同士の痴話喧嘩なんかでいちいち呼ぶなよ…」

「す、すみません…余りに激しかったので…痴話喧嘩とは思わなかったです…」

「次回からはちゃんと確認してから来い。」

生徒を放って風紀委員室に入る。

『ハ、ハウエルさん…こんなところで…!』

『そうはいつでも我慢できねえんだよ…!!』

『あつ、ハ、ハウエルさん…』

ガララッ (↑俺が教室に乱入する音)

ドガッ (↑ハウエルに飛び蹴りする音)

ガンッ (↑ハウエルが吹き飛ばされ、机に激突する音)

「まったく…目を離したらこれだ、野獣めが」

「どうしたんですか空也さん…？」

「え？どうしたって…」

「うつつ…おうえええええ」

なっ…！！

—— 暫くお待ちください ——

「つまり…俺がバカップルの痴話喧嘩を捌いてる間に、こいつは俺の弁当パクって吐いたのか」

「ううええ…げほっ、なんだよあの弁当…！！」

不味すぎてうつすらと三途の川まで見えたぞ…！？」

「オレンジミルク若鳥のチリソース弁当だが？
仕方ないだろ、それしか余ってなかったんだよ…！！

…あれ、そっぴやルシフェルは？」

「ルシフェルさんはさっき空也さんの弁当を食べてトイレに…」

「おい！ルシフェルまでか！？なんだお前ら！？
寄って集って人のモンパクって吐いてんじゃねえ！！！」

ガラッ

「……」

ハウエルを蹴飛ばしたせいで散らかり放題な教室。
おまけに床に吐き散らされた神秘のブツ。

暫く停止していた教師だが、思考が追いつき…

「な、な、何をやってるんだああ——！！！」

後日俺は臨時風紀委員からはずされ、嚴重注意を受けた。

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

Battle・28 VS 揉め事（後書き）

次回予告

デス・レーベル騒動のせいですっかり忘れていた、
第4試験に挑む空也達。

だがそこには、驚きのルールがあつた…！

次回 Battle・29 VS 第4試験

「余程臆病なんだな。」

Battle・29 VS第4試験

デス・レーベル騒ぎから一月が経った6月。

色々と落ち着きを取り戻した学園では、再び試験を受ける生徒が出てきた。

俺も例に漏れず、ハウエル、ルシフェルと共に試験室に来ていた。第4試験の内容は以前黎から聞いたことがある。

確か、魔力を付加してある石を魔力を辿って見つけ出す試験だ。

俺達はたぶん誰も魔力を辿るなんて高等技術は使えない筈だ。黎によれば、魔法石は仄かに光っているので、目で判断もできるらしいが…

（無理だよなあ、普通…）

試験会場はエレス鉱山だ。無数に落ちている石の中で、『仄かに光っている』ってだけで見つけられる筈がない。

（…勘で見つけるしかないか。）

俺は少し憂鬱になりながら試験室に入り手続きを済ませエレス鉱山に移動した。

このエレス鉱山という場所は以前来たことがある。

遊歩道らしい遊歩道はなく、道に迷った挙げ句魔神に襲われたという不自然な程不幸が連続した悲惨な記憶が浮かんだが、すぐに記憶に蓋をする。

ついでに蓋を真空パックしロケットで宇宙に放り出した。

俺たちと同時に試験を受けている生徒もいるようで、ちらほらと紫や赤、青の制服が目に入る。

「で、どう探す？」

「やっぱ、手当たり次第に探していくしかないだろ。」

ハウエルの考えは俺と同じのようだが…

「ルシフェルはどう思う？ やっぱり手当たり次第しかないか？」

「そうですね…この試験、決闘で奪い取ることもできるようですよ。」

「

「決闘か…まあ、あまり選びたくない選択肢だな。

挑まれば受けるつもりだが、こちらから挑むつもりはない。

俺は平和主義者だから！」

何となく「それは無いだろ」的な視線を浴びた気がするが…

とりあえず方針は決定。参考として普通の石を携帯。
3人に別れ、それぞれ魔法石を探す。

まだ誰も念話魔法を使えないので、10分おきに集合し経過を報告する。

「よし、んじゃ解散っ!!」

俺達はそれぞれ別の方向に散っていった。

「魔法石♪魔法石♪魔法石はどこですか♪」

ハウエルは妙な歌を歌いながら魔法石を探す。

「この石は…ああ、違う。光ってねえや…
この石は…」

ハウエルは石を拾い上げる。すると、ボコボコと石の形が変化し…
蛇状の姿に変化。…そのままハウエルに襲いかかった!!

「うげえ〜!!擬態した魔物か!!」

（本来なら魔力探知程度朝飯前なのですが…とりあえず今はやめておきましょう…）

ルシフェルは仄かに光る石を発見する。

（…意外と簡単に見つかりましたね。）

ルシフェルが石を拾い上げると、ポンツという音をたてて石が炸裂し消滅した。

（ダミー…ですか…こんなものまであるとは…）

「これ違うこれも違うそれも違うあれも違うどれも違うっ！…！」

あー……無かったかあ。つと、そろそろ10分か。一旦合流しなきゃな。

「じゃ、報告しよう。俺が拾った168個の石、全てハズレだった。」

「この山、石に擬態した魔物がいるから気を付けろ。お陰でボロボロだ……」

「それと……魔法石の中にはダミーがありますので、注意してください。」

なるほど、魔物にダミーねえ……気を付けるとしよう。

そして再び俺達は解散し、各々の搜索後10分ごとに集まる。

何回繰り返すかって？見つかるまでだよ。

「ふっふっふ…ついに見つけたぞ！！見るがいい！！」

仄かに光る石。触っても消滅しないので、ダミーでもない。光っているので魔物でもない。本物の魔法石だ！！

「おお…！！」

「よく見つけられましたね。」

「あとはこれを提出するだけ♪よし、行くぞ野郎共！！」

「おっと、そこまでだ。」

俺達の前に3人のアメジスト生が現れる。

その中の1人は、以前俺が久城の所まで連行した生徒だった。

「俺らはお前らに決闘を申し込む！デュナミス」

「ほう…アメジスト生ともあろうものがトパーズに決闘か。余程臆病なんだな。」

「黙れ！！これは決闘じゃねえ。」

小泉空也。お前調子乗ってんだろ。だからお仕置きしてやるんだよ。

何がデス・レベル騒動をおさめただよ。

んなもん、トパーズの落ちこぼれに出来る訳ねえだろ。

正直に言えよ。誰か別な奴が解決したんだろ？」

「無茶な難癖をつけることでしか自分のプライドを慰められないのか？」

ホント、哀れな優等生さんだよなあ。」

アメジスト生の挑発に挑発で対応する。

アメジスト生は簡単に挑発に乗り激情する。

「んだとこの野郎……もういい、とつとと決闘を受けやがれ……
……ああ、言つとくが断つた場合は無条件で魔法石を渡すルールだからな……！」

「誰が受けないって？ラミステス」

二つの呪文が唱えられ、決闘フィールドが出現する。

アメジスト生の3人はニヤリと笑みを浮かべる。

「2年の学年主席に勝つたんだから俺らに負ける筈無いよなあ？」

「クク、お前が負けたらお前の嘘を公表してやるよ！

……もっとも、お前らが俺らに勝てる筈無いけどなあ……！」

「下らない。そんな事をして何になる？」

…俺が人の足引つ張って喜ぶような阿呆どもに負ける筈無いだろ。」

「お、おい空也…」

隣のハウエルが不安げに囁く。

が、その不安は空振りに終わるだろう…

「来いよ…！！！」

静かに、だが確かに戦いの火蓋が切つて落とされた…！！

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

B a t t l e ・ 2 9 V S 第 4 試 験（後書き）

次回予告

第4試験の中でアメジストクラスの生徒に決闘を申し込まれた空也達。

対人戦では圧倒的強さを誇る空也の体術が火を噴く！！

次回 B a t t l e ・ 3 0 V S アメジスト生徒、リベンジ

「ただ単に魔力が優れているだけじゃないのね…」

Battle・30 VS アメジスト生徒、リベンジ

「よし…紛らわしいので、俺との確執のあるお前をアメジストA、その隣の茶髪をB、黒髪をCと名付けよう。」

「舐めやがって…調子乗んなよコラァ!!」

アメジスト生徒Bは炎の魔法を作り出し、俺に投げつける。が、一直線な炎は簡単に避けられ、足元に火種を作るだけで終わった。

俺は一瞬で踏み込みアメジスト生徒Bとの距離を縮める。

Bは魔法がかわされたことと距離を詰められたことに狼狽えている。BをフォローするためCは雷の魔法を発動させる。

雷は投げられたら一瞬で一直線上に広がるため、避けるためには魔法が発動してからデュマを使い投げつける前に避ける必要がある。

Cが雷を投げつける。俺は身を屈めて回避し、そのままBに接近する。

Bの後ろに回り込み羽交い締めにする。

Bを盾にしているので、他の2人は攻撃できない。

「くっ!!」

Bがもがき、拘束を解こうとするが当然ビクともしない。

Cは俺を放置しハウエルとルシフェルに目を向けると炎を造り出す。が、ハウエルは久城から魔法剣の手解きを受けている。

実戦慣れしていないこんな連中に負けることはないだろうが一応保険を打っておく。

「うわぁ！！」

「何！ぐうつ！！」

Bを投げ飛ばしCを巻き込む。さらに2人が重なっている瞬間に蹴り飛ばす。

「うがつ」

「がはっ」

倒れ込んだBはすぐさま起き上がり光の魔法を発動させる。だが遅い！

俺は魔法の発動しているBの右手の手首の関節を外す。

「ぎゃあっ！！！！」

Bが痛みに悶絶している隙に右腰に蹴りを入れる。

「げうつ」

先程の蹴りの勢いで左に傾くBに右から足払いをし体を一回転させる…

Bはそのまま頭から勢いよく地面に着地。そのまま気絶した。

「くっ…おいビンサー…！こいつらは弱いんじゃないのかよ！
」

CがAに向かって声を荒らげる。なるほど、Aはビンサーというのか。

「う、うるさい…！くそ、こいつが俺たちに敵うわけがないんだ…！

お、お前…！どんなイカサマ使ってた…！」

「おやおや、他人の力を素直に認められない器の小さいやつは可哀想だなあ。

本心ではわかってるんだろ？これが俺の実力だって。」

「く、くそ…！そんなわけ無い…！」

「おいビンサー…！負けたら俺は試験落ちだぞ…？どうしてくれるだよ…！！」

そう。

第4試験では自力で魔法石を探す他に決闘で奪うことも出来るが、当然メリットとデメリットがある。

メリットは、自力で探すよりも手間も時間も省けること。

デメリットは…決闘に負けた場合、決闘を挑んだものは即試験失敗となる。

「し、知るか！お前だって同意してここまで来たんだからな？一蓮托生だバカ野郎！」

「んだと…!!」

「おいおい…仲間割れしてる場合かよ？」

「何だこいつら…チームワーク悪し…」

「おそらく試験を受ける際に適当に選んだメンバーなのでしょう。」

「…くそっ!!もういい。俺一人でもやってやるぜ!!」

Ｃが雷の魔法を発動し、ハウエルに投げつける。

が…ハウエルは同様に剣に雷を纏わせ、降り下ろす。

二つの雷がぶつかり合う。

拮抗していた二つの雷だが、やがてハウエルの雷が押し勝った。

「くそ!!トパーズに…魔法で負けるだ…」

ショックを受けるＣ。

そのせいで、俺の接近に気づかなかったようだ。

「やべっ…」

Ｃは慌てて炎を造り出す、が…

「遅いぜ」

俺はＣの手首を捻り

「ぐぎあー!!」

胸に肘打ちを喰らわせ

「あぐあー!」

よろけたCの背後に回り込み、首を折った。…まあ実際に折ってはいないが。

そのままCは倒れ込む。残ったのはビンサーのみ…俺達3人はジリジリとビンサーににじり寄る。

「は、ははは…嘘だろ…」

「これは紛れもなく…リアル現実です。
チェックメイト王手」

ルシフェルはビンサーの周囲に大量の炎を展開する。

「降伏…しますか?」

ビンサーのようなプライドの高いやつに降伏を迫るとは…
案外鬼畜だ、この人…絶対確信犯だよ…!

「畜生…降伏だ…」

この瞬間、俺達の第4試験合格が決定した。
決闘を挑まれたものは、勝てばそれ以降決闘を受けなくていいからだ。

「…ただ単に魔力が優れているだけじゃないのね…
貴女は影で努力を…」

図書室。

魔法書を2、3冊広げて何かを探している黎をキャロンが遠くから
見ている。

そして暫く経つと、黎に誰かが近づいてくる。

（あれは…リースさん？）

金髪のロングヘアに薄紫の瞳、整った顔立ち…

ルシフェルの兄、3年学年主席の生徒会長。リースだ。

「蒼…」

「へ？」

「君の瞳の色だ。蒼い瞳は数年に一度の類稀なる魔力を持つものに
宿るらしい…」

「そっなん…ですか。」

「何か調べているのかい？」

「あ、はい…結界について調べてるんです…。」

人見知りがちな黎は突然話しかけられ戸惑っている。

「結界…ねえ。もしよければ、僕が調べてみようか？」

「あつ、い、いえ…大丈夫です、失礼しますっ」

黎は数冊の本を抱え図書室から出ていった。

（黎さんは確かに人見知りがあるけど…いきなり席を立つような真似はしない筈。

一体何をあんなに狼狽えていたのかしら…？）

「ハア…やっぱり無かった…」

以前山で見た紋章。魔法書の中にあれと同じ紋章を見つけることはできなかった。

（でも…何か嫌な予感がする…
あんまり他の人には頼めないなあ…）

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

B a t t l e ・ 3 0 V S アメジスト生徒、リベンジ（後書き）

次回予告

色々な魔法書を読むうちに新しい魔法を開発した黎。
試しに空也が実験台になるのだが…

次回 B a t t l e ・ 3 1 V S 新能力

「サーチ…？」

Battle・31 VS新能力

朝、教員寮の一室。

床に魔法陣が描かれ、中心に俺が正座している。

その表情は戸惑いや不安に満ち溢れている事だろう。

「そんなに身構えること無いですよ空也さん。もっとリラックスしてください。」

「いや、そんなこと言われてもな…」

黎が「思いついた新術の実験をしたいので手伝ってもらえませんか？」

なんて言うので何となく了解したのだが…こんな大がかりとは思わなかった。

何しろ、広めの教員寮の居間は魔法陣が独占しているのだから。

「なあ黎、やつぱり…」

「だ、大丈夫ですよ！危険はありませんから、私を信用してください！」

黎は魔法陣を描き終えた。

黎が目を閉じると、魔法陣が光を放つ…。

すると巨大な魔法陣が浮き上がったかと思えば急激に収縮し、…ちよつと俺の『目』に収まった。

「…目に変なものが入ったんですが」

「それで成功です。空也さんにサーチの魔法がかかりました。」

「サーチ…？」

「私が色々と読んでいるうちに編み出した新しい魔法です。」

黎はどことなく誇らしげだ。

普段こういった年齢に相応しい子供っぽい面を見ないので、新鮮な感じた。

「で、どんな魔法なんだ？」

「サーチはですね…こういう魔法です。」

そう言うと黎は制服のポケットから小さなメモ用紙を取りだし俺に見せた。

そこには先程床に描かれていた魔法陣が書かれている。

…これで何を理解しろと？

首をかしげていると、突然何かが俺の頭の中に浮かんた。

サーチ

新術。魔法そのものや魔法印、魔法陣を目視することでその魔法の情報を閲覧することが出来る仕組みを目に施す魔法。

「今の一体…？」

「これがサーチの力です。便利でしょう？
他にも、魔法そのものを見ても発動しますよ。」

そう言つて黎は指先に炎を灯した。
直後、俺の頭に情報が流れてくる…。

ディレリ

下位炎属性魔法。
指先に灯す程度の火力のため、実戦などには向かないが、
日常生活などに活用することもできる。

面白いなこれ…これがあれば久城戦の時のように、
相手の魔法がわからず対応できないってこともなさそうだ。

「で、これっていつまで続くんだ？」

こういった便利な魔法なのだから、持続時間なども考えておいた方がいいだろう。

しかし黎の口から発せられたのは驚くべき言葉だった。

「ずっとずっとずっと。」

何を当然の事を、とでも言いたげな黎の視線に一瞬言葉がつまった。

「……ええええええええええ！ちよつ、それってどういう事！？聞いてないぞ！？」

「ええっ！？このレベルの魔法陣による魔法は例外を除いて永久に続くって

授業でも習いましたよね!？」

そんなことを言われては食い下がない。

俺は授業をまともに聞いていたことがほとんど無いから知らないなんて言えない！！

「まさか空也さん……また授業を聞いてなかったんじゃ……」

ジト目で俺を見つめる黎。

「いやいやいや、そんなわけ無いじゃないか。」

いや、てつきりその、例外の。永久じゃないヤツかと思って……」

「そ、そうだったんですか……ごめんなさい、説明不足で……」

「あ、ああ別に構わないよ。取り乱しちまったが…そんなに有害でもないしな。」

「そうですね？ありがとうございます…すみません、本当に…あいつ、解除方法を見つけたらすぐに解除しますから!!」

そこまで気にすること無いよ、と黎の頭を撫でると、

黎は申し訳なさそうに目を伏せ、そして気持ち良さそうに目を細めた。

学園についた。ここならさぞたくさんの魔法があるだろうから少し楽しみだ。

校門付近まで来ると、早速サーチが発動した。

防護結界（強）

中のものを保護する結界。生徒と教師、一部特別に通行を許可された者のみ通行可能

強力な魔神の渾身の一撃でも一度は耐えられる程度の防御力。結界のなかでも強力なものだが、解除キーで解除可能。

解除キーは『クラス・イフ・タブー・ファルシオン』。

こんなことまでわかつちまうのか！？これ、悪用されたらヤバイぞ……？

とりあえず、結界を潜って学園内に入る。

学園内にもいくつかの結界が張られている。侵入はほぼ不可能だろう。

ふと向こうにルシフェルを見つけた。

「おい、ルシフェ……」

近寄ると、突然サーチが発動した。

魔神の書

サーチ阻害魔力検出。詳細不明。

何だ一体…？ルシフェルが常に携帯している赤黒い本の情報か。
以前から気になっていたが、これは一体なんなんだ？
サーチが発動したって事は魔法具らしいが…

「どうかしましたか空也さん？」

ルシフェルの声で現実に戻された。

「いや、何でもない。」

ルシフェルはそうですか、と返すと再び歩き始めた。
俺は小走りで追い付き、ルシフェルと並んで歩いた。

その本は一体…と聞こうとしたが、何故か俺の中でそれは憚られ
結局声には出せないまま教室に着いた。

ハウエルの騒ぎ声で思考が中断され、闇に消えていった。

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

B a t t l e ・ 3 1 V S 新能力（後書き）

次回予告

ファルシオン学園に突然訪れた未曾有の危機。

なんと、突然現れた魔神によりファルシオン学園の結界を逆にされてしまった！？

これでは外に出られない。この窮地の中、空也は…

次回 B a t t l e ・ 3 2 V S 結界

『逃ガサナイ…許サナイ…』

Battle・32 VS 結界

それは授業の最中に突然訪れた。

ガ…ガガガガ…ガガ、ガガガガガガ…

「——つまり、この魔法陣を描くときの注意としては…」

（ねえ、何の音…？）

（何かが鳴ってんのか…？）

「そこ、授業を聞きなさい。つまり魔法陣は少しでも間違えては発動せず…」

ガガガッ、ガンガンガンガン！！

「こ、小泉空也！！キサマ、居眠りするな！！

おい、聞いているのか！！居眠りをするなと…」

ガガガガガガガガガガガガガガガガギギギギ！！

「だいたいキサマは何故授業中に居眠りをするのだ！！

キサマの妹はあれだけ優秀だと…ああ、煩いな！！なんなんださっ

きから!？」

ガギガギ…ズダンッ!!!!!!

「うお!？」

一際大きな音が鳴ると、雑音が一切聞こえなくなる。

「収まったようだな…さて…」

教師は自分のバッグをがさごと漁り、拡声器を取りだし、空也に歩み寄った。

大きく息を吸うと…

「起き『緊急事態です!至急教師の皆さんは教員室に集合してください!』!？」

教師の声は放送によって遮られ、空也への攻撃も失敗に終わった。が、当然そんなことを気にしている場合ではなかった。

「おい皆!!!私が戻るまで教室を出るんじゃないぞ!!!」

教師が去ったあとの教室は軽いパニックに陥った。

「さっきの放送、なに？」

「あのうるさい音と関係あんのか？」

「まさか魔神、とかじゃないよな……!？」

「そ、そんなわけ無いじゃない!!」

「おい空也、いい加減起きろよ。」

ハウエルが空也の体を揺するが、空也は全く目を覚まさない。

こんなことは初めてだ。

空也はちよくちよく居眠りするが、呼び掛けると即座に跳ね起き、意味のわからない言い訳を並べる筈だ。揺すっても起きないとは…

「なあルシフェル、眠気覚ましの魔法とか…ルシフェル？」

ハウエルはルシフェルの席に目をやるが、そこにルシフェルはいなかった。

先程まではいた筈。一体どこに？

「…トイレか何かか？ま、いい。仕方ないから黎ちゃんでも呼ぶか…」

ハウエルは渋々、教室を出ていった。

「魔神…！？」

「ああ…どうやら結界を逆手にとられたらしい。敵は変換魔神アリファス。結界のシステムを逆に書き換えられたようだ。」

つまり、外からは入れるが中からは出られない。敵からすれば、攻撃し放題。我々は防御しかできないというわけだ。」

忌々しげに言う、教頭のトゥリアス・イトウス。

「でも、あの結界は解除できた筈です。解除キーは…」

「校長しか知らない。よりによって校長は出張中だ。ヤツはこの時を狙ってたのかもな…」

ドゴン…！

「くっ！？」

校舎が大きく揺れる。魔神の攻撃が始まったようだ。
ドガン、ドガンと爆音が響くたび、校舎が大きく揺れる。

「く…っ、各クラスの担任はクラス生徒たちの安全を確保！
私は校長と連絡をとってみる！！」

「…はい！！」

「起きろ！！空也！！起——き——ろ——！！」

再びトパーズクラス。

ハウエルは実力行使で手っ取り早く空也を起こそうとしている。
頭を叩いたり、騒いだり、髪を引っ張ったり、殴ったり…

ハウエルは先程ダイヤモンドクラスまで黎を呼びにいった。
ここまで起きないのは不自然だと感じたためだ。

黎は力を貸すことを快諾し、一緒に来た筈なのだが…

ハウエルは教室から軽く外を覗く。

「ハア、ハア…は、速いですよハウエルさん…!!」

実際にはハウエルは小走りしかしていない。

なのに黎は、かなり息を切らしている。いや、確かに廊下はそこそこ長いのだが。

「あ、ああゴメン黎ちゃん。」

黎は暫く経つと呼吸を整え、教室に入る。

黎は空也に歩み寄り、額に触れる。

「これは…睡眠魔法ですね…誰にかけられたのか…
兎に角、まずは…」

黎は掌に暖かみのある光を灯す。そして、空也に触れた…

むう…?随分寝ていたような…?
アレ!?ここって学園!?ヤベエ!!ガン寝してた!!

慌てて頭をあげると、何か堅いものに頭をぶつけた。

「がっ！？う……ぐおお…！」

「だ、大丈夫ですか空也さん…？」

何故かトパーズクラスに黎の姿が。

他の生徒は何やらパニックになっており、黎にも気付いていないようだ。

起き上がると、ハウエルが床に突っ伏して呻いている…。

鼻を押さえているようだし、さっき激突したのはこいつの頭か。

まあ、それはどうでもいいとして…

なぜここに黎が？

あいつら何でパニックってんの？

何で教師いねえの？

聞きたいことが山ほどあるが…

「く、空也さん！サーチでなんとかあの結界を解除できませんか！？」

「え…で、できるけど？」

「本当ですか!？」

「ああ…クラス・イフ・タブー・ファルシオン…」

バキバキバキバキ!!

やかましい音で寝惚けていた頭が覚醒する。

結界解除しちまった!？何やってんだ俺っ!？
ていうか、何で黎はそんな指令を!？

混乱していると、視界の端に何か動くものが写った。

「ク……ウ……ヤアアア!!てめえ!!よくも!!」

俺が事態を把握したのは、ハウエルを撃退した後だった。

数時間後、夜。

『許サナイ…逃ガサナイ…』

変換魔神アリファスは教師の総攻撃により体を破壊されていたが、魂を切り離し、何とか逃げ仰せたのだ。

…が、憐れな魔神に生きる道は残されていなかった。

「クク…」

赤黒い魔神の魂ににじり寄るルシフェル。
魂は何とか飛び去ろうとするが…

「無駄ですよ…」

ルシフェルが右手を翳すと魔神の魂はピクリとも動かなくなる。
ルシフェルが左手に持った魔神の書を開くと、魔神の書は不気味に
光り

魔神の魂を吸い寄せる。

魔神の魂は魔神の書に吸い込まれると、空白のページに不気味な紋
章が浮かぶ…。

（憐れな魔神よ。僕を狩れると思ったか？

狩るものと狩られるもの。それは反転しない。…少なくとも、この
場合はな。）

ルシフェルは漆黒の夜の闇へと消えていく。
…片手に、謎の書を抱えながら。

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

Battle・32 VS 結界（後書き）

次回予告

6月。ハウエルが空也と黎の寮に遊びに来たのだが…
空也や黎がインスタント食品ばかり食うのを見かねて、
2人に料理指導をする事に！？

次回 Battle・33 VS 料理

「俺が料理教えてやるよ。」

Battle・33 VS料理

結界騒動は『俺のお陰で』解決した。

それから1週間、季節は5月から6月へと移り変わった。

そして、今俺は…

「お邪魔しまーす」

遊びに来たハウエルの相手をしている。

創立記念日やらなんやらで連休になり、暇なのでハウエルを呼んだのだ。

ハウエルも同じく暇だったようで、遊びに来ることを承諾した。

「おおー…広いんだな…」

「まあな、教員寮だからな。あ、遠慮せずそこら辺に座ってくれ。

…あと、黎の部屋に入ったらコロ「は、入らないから大丈夫だ!」!」
「よろしい。」

さて…普段こういうイベントはないからな…何をすれば良いやら…と、とりあえず黎のもてなしの仕方を真似るとしよう。
たしか、マンドラゴラハーブがまだあった筈…

…
…
…紅茶って、どう淹れるんだ。まあいい、勘でやろつじゃないか。

まず、紅茶葉をカップに入れる。
次に熱湯を注ぐ。…これで良い筈。

「へいへい、お待たせー」

「おお、紅茶か。お前も意外に家庭的なんだな…」

カチャツ、とハウエルの前にカップを置く。

「前言撤回。何だよこれ…?!」

「何だよ。何か不都合でも？」

俺の紅茶は普通だ。…ちよつとボコボコと沸騰してるが。
黎が淹れたときと違い、深紅色ではなく不気味な紫色になってるが。

そんなことで怯む空也さんではないのだよ!!
一口口に含む。

口の中の皮膚がすべて火傷するほどの熱さと、
何とも言えない渋い苦い臭い不味い味わいが口一杯に広がった。

口に含んでから吹き出すまで、僅か0.06秒。

悲劇は続き、吹き出した紅茶は紫の霧となって正面のハウエルに襲いかかった!

「ぐぎゃああああああ!!目が、目がああああ!!」

「口が、口がああああ!!」

———
暫くお待ちください
———

「マンドラゴラハーブはな…茶葉を解呪しなければ飲めない。
ちゃんと確認してから淹れてくれ。」

言いながら涙を拭うハウエル。
いや、悪いことをしてしまった。

「スマンスマン、お詫びになんか料理作るぜ。」

俺が厨房に入ると同時に、黎が帰ってきた。

黎は先程まで花の買い出しに行っていたのだ。
黎の部屋にあった花が枯れてしまったらしい。

「あれ…ハウエルさん！いらっしやいませ。遊びに来たんですか？」

「ああ黎ちゃん、おかえり。お邪魔してるよ。」

「…空也さん？何故厨房に？」

「厨房に入っただけで非難しないで。頼むから。」

アレだから。冷凍食品作るだけだから。

「ハイどうぞ。」

「冷凍…空也、いつもこんなのを？」

「そうですね…基本はインスタント食品ですねえ…もぐもぐ…」

ハウエルめ…人の食事にケチつけるつもりじゃあるまいな。

「俺は料理できるんだけどな。黎が俺の料理を拒むんで…」

「あれは料理じゃありませんよ…もぐもぐ…兵器と言った方が正しいです…」

「食べながら喋るんじゃない。しかも喋ってる内容がおかしい。」

なぜそんなに俺の料理を嫌がるのだろう。

黎だってレシピなしで作らせると激辛料理作るくせに…

「まったく…空也、俺が料理教えてやるよ。」

「いやいや、別にいいよ」

「よくない。インスタント食品は添加物とか入ってて、健康に良くないものもあるんだぞ。お前はともかく、黎ちゃんは成長途中だろう？」

「ぐ」

「と、いうわけで。なんか適当に作ってみてくれ。」

ふむ…じゃあ、オムレツでも作るか。

まず、卵をフライパンに割り入れ…かき混ぜる。

卵が固まってきたら、ソースを50ccほど入れる。

固まった卵に水をフライパン一杯に投入。

薄まってしまったので更に卵を投入。

隠し味に季節の雑草と、鉄分摂取のためにカミソリの刃を入れ…ゼ

ラチンを投入。

固まったらお好みでコシヨウと醤油を入れて出来上がり！！

「んなもん食えるかあつ！！」

「なにゆえ！？」

「空也さんゼラチン入れすぎです…もぐもぐ…それじゃ硬いですよ

…」

「そういう問題じゃない、そういう問題じゃないよ黎ちゃん！？

味がないし雑草ってなんだよ！？あとカミソリの刃って食い物じゃないぞ！！」

「何だよ、でも食えるぞ。」

バリッガリゴリ、ゴキッ…

あり得ない音が聞こえるが…噛み締めれば味はある。多分。

口の中を切らないようにカッターを垂直に噛まないよう注意する。

「は、吐き出せ！！喉切れるぞ！？」

「大丈夫だ…ゴクン。」

喉を通るシャラシャラした感触が実に心地よいです。

「ダメダメ。俺が教えてやるよ。まず基本的な卵焼きから…」

「下手すぎだろ」

「う、うるせー…」

「卵無くなっちゃいますよ…もぐもぐ…」

「ていうか食うの遅いな！」

数十分後。

卵焼きは生焼けか黒焦げしかできない。ベストな火加減がわからないからだ。

「卵何個無駄にする気だよ？あと3個しかないぞ。」

「いや…今の失敗で気付いた…！！見つけたんだ、ベストな火加減を！！！」

「おお、ついにか！！やってみてくれ。」

卵をボウルに割り入れ、箸でかき混ぜフライパンに流し入れる。

そして……

……

……

………今だ！！

卵をフライパンの一部に寄せ、巻いていく。

今度は生焼けでも黒焦げでもない、普通の卵焼きだ！！

「さあ、どうよハウエル先生！？」

「どれどれ……」

ハウエルが一切れ口に含む。暫く咀嚼し……

盛大に嘔き出した。

「なっ！！？」

「グハッ……ヤベエ……何て破壊力だ……普通に作った筈なのに……舌が痺れる……！！」

「失礼なヤツめ!!」

「…そういえば空也さん。さっき食堂でお弁当を買ってきたので、このお弁当を夜ご飯にしましょう。ハウエルさんの分もあるので、よかったです…」

「「……へ？」」

しよ、食堂？何を言ってるんだこの少女は。

「…おい空也。まさか、食堂の存在を知らずにあんな食い物を…？」

「ええっ！？空也さん、まさか食堂の存在を知らなかったんですか！？」

私たまに買ってくるじゃないですか!」

マ…マジで!？」

いや、確かにたまに黎がどこから弁当を仕入れてくることはあったけど、

あまり深くは気にしてなかったから…てっきり教員寮には寮食堂が無いのかと…

因みに、今回の卵の出費＝320円。

いつもの冷凍食品＝250円＋体に悪い可能性あり

寮食堂の弁当＝250円＋誰かの真心。

どちらがお得かは、火を見るより明らかだった。

その後俺は、数日間落ち込んでいた…

> i 3 2 4 6 0
— 1 5 6 3
<

B a t t l e ・ 3 3 V S 料理（後書き）

次回予告

体育祭の季節がやって来た！

球技大会と体育祭を合併したファルシオン学園式体育祭は、
なんと直接相手を傷つける魔法以外どんな魔法でも使用可能！？

今、波乱の体育祭が幕を開ける…！

次回 B a t t l e ・ 3 4 V S 体育祭

「手加減は無用だぜ…！！」

Battle・34 VS 体育祭

「…今日の授業はこれで終わる。」

それと、2週間後の6月16日には体育祭がある。
明日、振り分けがあるからな。」

そう言い残し教師は出ていった。体育祭か…

「振り分けは明日か…どうなるかな…」

「なあハウエル。振り分けて何だ？」

「あ？振り分けつつーのは、体育祭のチームを決めるんだ。
完全ランダムに生徒を12チームに分けて、そのチームで得点を競
いあうんだと。」

「はあー、なるほど…」

と言うことは、ハウエルやルシフェルと別のチームになる可能性も
あるのか…

「12チームで競う競技は沢山ありますね…」

ルシフェルは、何処から仕入れたのか体育祭パンフレットを持って
いる。

「僕は体育祭実行委員だからです。」

なるほど………ていうかスゲー！！何今の！？読心術！？

いや、これは…

カラフティ

中級補助魔法。

特定の相手の心の中を読むことができるが、
自分以下の魔力の持ち主の心しか見ることができない。

現在、魔法省にて禁術化検討中。

ちなみに魔法省とは、人間とエルフにより設立された
『魔法の掟を守るための組織』。主に、

- ・魔法犯罪者の取り締まり
- ・禁術の登録
- ・新魔法の登録

を行っている。

ついでに言うと黎が編み出した魔法『サーチ』は新魔法として登録
されると同時に
禁術化にむけて検討中である。

…ていうか!!

「ルシフェル!! 準禁術なんか使うな!!」

「おや、よくわかりましたね。」

「まあな、俺って博識だから!

…何だよ、2人共。“そりゃねーだろ”的な目で俺を見るな!」

「話を戻しますが…12チームで競う競技はこれだけあります。」

ルシフェルは俺の机にパンフレットを置き、俺とハウエルがそれを覗き込む。

- ・ 200m走
- ・ 150m走
- ・ 200mハードル
- ・ 玉入れ
- ・ 玉転がし
- ・ 棒倒し
- ・ 騎馬戦
- ・ 2人3脚100m走
- ・ 1500m走
- ・ 借り物競争
- ・ 仮装マラソン
- ・ ドッジボール
- ・ サッカー
- ・ バレーボール

- ・バスケットボール
- ・テニス
- ・野球

…え、何？球技大会も兼ねてんの？

「因みに、1人何種目に出ても構わないそうです。
それと…相手を直接傷つけなければどんな魔法を使用しても良い
ですよ。」

「えええええ！？何だそれ！！絶対力オスな事になるぞ…！！」

そんなこんなで体育祭当日。俺の周辺人物はこんな感じにバラけた。

第1チーム

キャロン アルカ

第3チーム

ハウエル

第4チーム

フォルス ルシフェル

第5チーム

リース

第7チーム

俺 黎

第10チーム

ソル

出来れば黎とは戦いたくなかったから丁度良い。

「よう空也、別れたな。」

ハウエルが近づいてくる。

和やかでありながら、静かな闘志を帯びている…

「空也、手加減は無用だぜ…!!」

「当然…!!」

「空也さん。『エンゼルアップー』は使わなくて良いんですか？」

「エンゼルアップー…？」

「ほら、あそこの人の頭についてるアレです。」

黎が指差す方向を見ると、人の頭の上に天使の輪が浮かんでいる…。

エンゼルアップー

中級補助魔法。

対象者の運動神経を活性化させ、運動能力を飛躍的に上昇させる魔法。

但し体ごと強化しているわけではないため対象者に負担がかかる。

「…つまり、ドーピングか」

「うーん…ちょっと聞こえが悪いですけど、そんな感じですね…
自分にかけることもできるんですけど…私はちょっと…」

なるほど…黎は体が弱いからな。

下手にこんなもの使ったら筋肉痛とかがヤバそうだ…

「それで、もしよければ私がかけましょうか？」

「いや。そんなスポーツマンシップに反する行為はやめておく。
俺は俺自身の全力で体育祭を制して見せるっ！！」

まずは200m走。

12チームが1人ずつ走りその順位で得点を決める。

12チーム全員参加の競技で、12チーム全員が走り終わったら終了。

実に単純明快だ。…魔法を禁止していれば。

第1チーム	エンゼルアップー使用
第2チーム	同上
第3チーム	同上
第4チーム	同上
第5チーム	同上 ^{リリース}
第6チーム	同上
第7チーム	無使用（俺）
第8チーム	エンゼルアップー使用
第9チーム	同上
第10チーム	同上

第11チーム 同上
第12チーム 同上

こいつら、スポーツマンシップの欠片もねえ！！

そうこうしている間に競技開始！

同時に、ルシフェルの兄リースは背中から翼を広げる。

ファーウイング

上級補助魔法。

対象者の背に翼を生やす魔法。

「悪いね君達……！」

リースは自分以外の参加者のレーンを所々破壊すると、翼で加速した！

破壊の翔

上級攻撃魔法。

真空刃を自在に操る魔法。禁術検討中。

が、俺は穴と穴の間の僅かな陸地を跳び移って移動する。
こんな芸当ができるのは俺だけの筈。あとはリースと俺の…

ふと後ろを振り返ると、他の参加者がすぐ近くに迫っていた！

「ついてきてらっしゃる！？」

「甘いね…デビルフォール！！」

リースは黒い光を放つ。

すると、参加者のエンゼルアップーが消滅した。

デビルフォール

上級補助魔法。

中級補助魔法『エンゼルアップ』を無効化する魔法。

何て特定の魔法だ。

俺とリース以外は全員失速、1位争いからは脱落。

俺達は折り返し地点に差し掛かった。

「エンゼルアップなしでここまでやるとはね…!!」

「まだまだ…!!」

残り100m程度。

勝つのは俺だ…!!

俺はポケットから独特な装飾のついたナイフを取り出した。

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

B a t t l e ・ 3 4 V S 体育祭（後書き）

次回予告

200m走で激闘を繰り広げる空也とリース。
空也が取り出した秘策とは…！

次回 B a t t l e ・ 3 5 V S 体育祭！

「やっぱ無いと無理かもしれない…」

Battle・35 VS 体育祭！

白金の短剣

鎮痛効果及び止血効果を魔力で付加した短剣。
主に暗殺や召喚術Bに使用する。

俺が取り出したのは白金の短剣。

以前ソルのヤツから盗…もとい、拝借したものだ。

俺は白金の短剣で指先を軽く切る。少し血が出てくるので、これを使う。

blood summons…！！ファウイング…！！

「！？」

blood summonsで加工した翼が俺の背中に出現する。
翼で加速し、リースと並ぶ。

「面白い。…しかし、甘いね…ウォール」

地面が揺れ、俺の前に突然岩壁が出現した。

ウォール

中級攻撃魔法。

地面の下に活性魔力を発生させ、地面を隆起させる魔法。
魔力の扱いが上手ければ上手い程、隆起する地面が鋭くなる。

目の前の壁は相当な鋭さ。リースは相当なのだろう。
俺は翼に使っている血を拳に集め、鉤爪状に変形させ壁を殴り付ける。

リースは壁を鋭くしすぎたようで、壁は容易に砕けた。

が…視界が開いたときにはリースは既にゴールしていた。
残念ながら俺は2位ゴールとなってしまうた。

「やっぱ無いと無理かもしれない…。黎、エンゼルアップにかけて…」

「はい。…それにしても頑張っていましたね空也さん…。」

俺にエンゼルアップがかけられる。まだ動いていないので変わった点はない。

また頭の中に情報が流れてくるが2回目なので割愛する。

「あ…次は私の出番です。行ってきますね。」

200m走、黎の出番が回ってきた。大丈夫だろうか…

パァン！

競技開始と同時に、黎の体が蒼白い光に包まれる。

同時にゴール直前の地点にも蒼白い光が現れ、そこに黎が現れた。

イプシリ阿斯

超上級移動魔法。

対象となった空間そのものを移転する魔法。

使用には天才的な才能と魔力、集中力が必要とされ、

純系エルフの中にも使えないものもいる高難度魔法。

『おお！！』

『すげえ、イプシリアスだと…！？』

『初めて本物見た…！綺麗…！』

『黎ちゃん可愛いよ！』

皆驚嘆の声を漏らしている。一部を除いて。

黎はそのままゴール。いかにエンゼルアップで強化してもこれには敵わない。

次に俺が参加するのは200mハードル。参加は自由だ。

俺としては全種目に出てもよかったのだが…競技ごとに限界人数があるため

若干不本意ではあるが遠慮しておいた。

1人何種目に出ても構わないが、チーム内で合意しないとダメだということだ。
空也さんは人の思い出に残る経験を奪うほど愚かで野蛮ではないのだ。

200mハードルの対戦相手には…知った顔が2人いた。ハウエルとソルだ。

「奇遇だな空也…！」

「ハウエル…さっきの話、忘れてないからな。」

「当然。忘れてたらぶん殴って思い出させるぞ。」

「…俺を無視すんなよな」

「はて、君は誰だったか」

「…許さん！！後悔させてやる…！」

パン！

200mハードルが始まった。

まず俺とハウエルがスタートダッシュで他の参加者と距離を離す。

一方ソルは走ろうとしない。頭にはエンゼルアッパーもない。ソルはニヤリと笑いポケットからナイフを取り出す。

（あれ… 白金の短剣か？）

一体何処からスピアを仕入れたのだろう。

俺は1つめのハードルを飛び越す、つもりが…

「うおおお！！？」

体がやけに軽く、軽く飛んだつもりが空高く舞い上がり2つめ、3つめのハードルも飛び越してしまった。

ハウエルは2つめを跳んだところだ。今の内に引き離す！

一方ソルはナイフで指を傷つけ、血に魔力を付加し契約した魔物を召喚した。

その魔物は実に12体。嫌な予感だ。

「行け…！」

様々な魔物がソル以外のレーンに立ち塞がり、走行を妨害する。ソル自信はというと鳥獣に掴まり飛行しながらゴールを目指す。

が、やはり詰めが甘いソル！

俺は再び白金の短剣を取りだし指を刺す。
血を加工して鉤爪状に腕に纏わせる。そして、立ちほだかる巨人を
始末した。

「グオオオオ…!!」

更に巨人を強く蹴飛ばし、ソルの方向に倒す。

「何!?!うわ!!」

ソルは巨人の下敷きとなり、亡き者に…はならないだろうが、最下
位決定。

他の連中もソルの召喚した魔物に気を取られて進めずにいる。

この勝負…貰った!!

4つめのハードルを跳ぼうとすると、突然横からなにかが飛んでき
た。

ソルの召喚した別の魔物だ。飛んできた方向は…

「残念だったな、先行くぜ!」

やはりハウエルか!片手に魔法剣を持ってハードルを飛び越すハウ

エル。

だが今のところ条件はたいして変わらない。これなら俺の方が早い！

俺は思いきり飛び、4・5・6段のハードルを飛び越す。

「クソツ、速え……！化け物か……！！」

ハウエルの呟きは風に掻き消される。

……もとより、ハウエルよりも運動神経の良い俺に
ハウエルに魔法をかけた術者よりも強力な黎の魔法。

——ハウエルが勝てる筈もなかったのだ……！！

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

B a t t l e ・ 3 5 V S 体育祭！（後書き）

次回予告

体育祭は続く。勝つのはどのチームだ！？

次回 B a t t l e ・ 3 6 V S 体育祭！！

「いや、あれインチキだろ！？」

B a t t l e ・ 3 6 V S 体育祭！！

現在の各チームの得点は

第1チーム	1	6	8
第2チーム	1	7	5
第3チーム	1	5	6
第4チーム	1	6	0
第5チーム	2	4	3
第6チーム	1	8	9
第7チーム	2	0	6
第8チーム	1	6	6
第9チーム	1	8	4
第10チーム	1	9	2
第11チーム	1	5	6
第12チーム	1	7	9

となっている。

第5チームは3年学年主席がいるためか、やはり得点が高い。追うのは俺たち第7チーム。黎が今のところ1種目にしか出ていないのがマイナスだ。

一方リースは全ての種目に出ている。完全に点を取りに来ているな…

次の玉入れは黎が参戦する。リースと黎、2人が対決することになる。

「…へえ、彼女が出ているのか」

リースは、黎が出場すると聞いて微笑を浮かべる。

（彼女の力を見てみたいね…）

玉入れが始まった。

リースはあえて全力は出さずに黎の様子を伺っていた。

一方黎は、深呼吸をして気持ちを落ち着かせると…

無詠唱でイプシリアスを使用した。

蒼白い光が落ちている玉に宿り、瞬間移動させた。

一瞬にして全ての玉が入ってしまい、勝負はついてしまったかに見えた。

（へえ、イプシリアスか…やはり凄いね…だが！）

リースは風属性の魔法を使用し折角入った第7チームの玉を飛ばそうとする。

リースの魔力解放に気づいた黎はとつさに障壁を張る。

リースの魔法は簡単に弾かれ、黎の障壁が勝った。

（ほう、ならば…！！インディグレード！！）

インディグレード

上級攻撃魔法。

雷属性中級攻撃魔法インディの強化版。

インディよりも攻撃力が増しており、

実際の落雷の1/60まで威力を上昇させられる。

しかし、リースが放ったその魔法ですら黎の障壁はピクリともしない。

（…馬鹿な！？かくなる上は…！！）

リースの周りに風が集まり、強力な魔力がひしめき合う。

リースは全力で魔法を放とうとしている。

リースをよく知るルシフェルや生徒会役員はそれが異常なことだとすぐにわかる。

リースが。

1年生相手に。

全力の魔法を。

止めようと生徒会副会長が口を開きかけたが、同時に競技終了の笛が響いた。

「…いかん、つい熱くなってしまったな…」

リースはあたふたしている副会長を一瞥しクスリと笑うと、背を向けて自らのチームに戻っていった。

俺の出番がやって来た。

競技は棒倒し。もつともカオスになりうる競技だ。

やはりここでもリースが出場。黎は残念ながら参加していない。

棒は12本立っており倒されたチームは敗北、行動できなくなる。倒せば倒すほど得点が入り、11本の棒が倒れたら終了となる。

そして試合開始。

開幕直後からリースは魔法を発動させようとしている。

「全てのエレメント合わさりし時、世界は打ち消され無へと帰す。その力、地上にひと度顕現すれば大地を消す。願わくば、その力抑制し顕現せん…！アポカリプス…！」

リースは詠唱を止めると魔力を解放する。

空に虹色の美しい光が現れ…

突如、炸裂した。

アポカリプス

超上級攻撃魔法。

全ての属性の魔法を一ヶ所に発生させる事で、属性の反発力を飛躍的に上昇させる。

その反発力を利用し大爆発を起こす、現最強攻撃魔法。

物凄い爆風が巻き起こる。

「え、ちよつ、あれインチキじゃねえ!？」

そんな生徒の声が聞こえ、消えていく。

これはインチキではない。何故なら、棒倒しは例外的に…

『多少なら危害を加えても良い』のだから。

当然、その規定を上回らない程度に威力を制限しているのだろう。

(はっ、しまった、棒!!)

俺は直ぐ様棒に駆けつける。幸い、まだ爆風は及んでいない!

「ぬおおおお!!」

本来数人で支えるべき棒はやはり重い。

それに爆風が来ているのだから、支えるには相当な力が必要だ。

爆風に体が飛ばされかけるが何とか踏ん張る。

棒が倒れかけるが全力で支える。

（畜生…！！）

腕が重い。体が悲鳴を上げる。

（あー…ヤバイわ、これ…）

助けてくれ神様。いや、俺が神だけどさ。

無意味な神頼みが叶ったのか、爆風が緩まる。

（終わり…か？）

爆風が収まる。気を抜いて、膝をついてしまったのが間違いだった。爆風に巻き上げられた砂が幕となり視界が開かなかったが…

目の前にリースがいたのだ。

「ヤベ…」

「これで終わりのようだね。

しかし、いくらエンゼルアップーを使用しているからって棒を1人で支えるとはね。」

「――予想外だったよ。」

リースが人差し指で柱を小突くと、勢いよく柱が倒れた。

鬼の一撃

中級攻撃魔法。

人差し指にエネルギーを凝縮させ放つ魔法。
しかし凝縮しただけで増加はしないので、実戦には向かない。

「くそっ……!! 強ええ……」

「お疲れさまです、空也さん。

空也さんの次の出番はサッカーですね……

その時は私もいますよ。一緒に頑張りましょう!」

「ああ……でもアイツもいるんだろ? どうすれば……」

「大丈夫ですよ空也さん。……此方には、秘策があります。」

>
i
3
2
4
6
0
—
1
5
6
3
<

B a t t l e ・ 3 6 V S 体育祭！！（後書き）

次回予告

最後の競技でリースへのリベンジを狙う空也。黎の秘策とは…？
そして体育祭の結果は！？

次回 B a t t l e ・ 3 7 V S 体育祭っ！！

「サッカーの基本は魔法じゃないぜ…？」

Battle・37 VS 体育祭っ！！

「黎、秘策って一体…」

「それはですね…リースさんの魔法発動を防ぐことです。」

魔法発動を防ぐ？それって…

「…どういう事だ？」

「リースさんが魔法を発動させる前に私が防ぎます。
空也さんは他の方々を抜いてゴールを決めてください。
なでしこ…何とかみたいな感じに」

いや、なでしこはチームプレイだし。

「それ以前に、黎がイプシリアスでゴールさせればいいんじゃないか？」

確かあれって自分以外にも使えたよな」

「あー…イプシリアスは、その…苦情が出たので…」

ああ…まあ、そりゃそうか。リースの魔法にも出て然るべきだと思うがな。

ともかく、作戦は整った。

サッカー等の球技系種目は全て同時進行でトーナメント方式。
まずは決勝まで勝ち上がるのだ…！

あの完璧金髪ロン毛人間に一泡ふかせてやる…黎は既にあいつに勝ったようだ。

決勝戦、第5チームVS第7チーム。
随分端折ったが別に見所もなかったので良しとする。

リースがボールを蹴り、いざ試合開始。
リースが魔法を発動させようとするが…

「させません…！」

黎は指先に淡い光を灯す。
すると、リースの魔力が解放されたにも関わらず、魔法が発動しない。

「何！？」

ガーディア

下級特殊魔法。

相手よりも強力な魔力で魔法発動を阻止する魔法。
相手以上の魔力を使わなければ単なる魔力の無駄遣いになってしまう。

「くっ……ガーディアで……僕の魔法が防がれるだ……！？」

「今だ……！！」

ボールは一瞬で俺の足元に。やはりエンゼルアッパーの威力は大きい。

第5チームの他のメンバーはリースの存在ですっかり油断していたようで、
簡単なドリブルで抜くことができた。

そしてシュート。キーパーもリースに頼っていたようでまるで無策。
大した技術もないようで、ボールはそのままゴールに突き刺さった。

「馬鹿な！君はいつたい何者だ…？」

「いえいえ…大した者じゃありませんよ。」

「くっ！！」

リースは更に魔力を込めるが、やはり魔法は発動しない。
リースは針を取り出すと自分の腕に突き刺す。

「ふえ！？な、何やってるんですか！？」

「おや、召喚術Bをご存じないのかな？」

リースは自分の血に魔力を籠める。

召喚術Bは『魔力を籠める』事で発動する。

『魔力を解放』したわけではないため、ガーディアは使えない。

そして召喚術が発動した。

召喚されたのはサキュバス、女の夢魔。

人を惑わす魔法を得意とし、特に少女を惑わし陵辱するのを好むという。

リースの狙いはサキュバスの魔法で黎の魔力を削り、

自分の魔法を発動できるようにするのがリースの計画、だったのだ
が…

「サ…キュバ…ス…!!?」

「…?」

黎は明らかに動揺していた。

黎の青みを帯びた黒い瞳がゆらゆらと揺れている…。

「……いやあああ

——っ!!!!」

「え?」

突然の黎の絶叫に流石のリースも動揺する。

「いやっ、やだああ!!来るなあ——!!」

黎は以前サキュバスに襲われたことがあり、トラウマになっていた

らしい。

彼処まで取り乱した黎を、俺は初めて見た。

黎は混乱して魔法を暴発させ、危険と判断され退場になった。

現時点で4―0。だがリースが復帰したからには逆転されかねない。

リースは魔法を発動させる。

障壁

使用者の魔力に比例し硬度を増す壁を出現させる。

付加効果を付けることもできるが、この障壁に付加効果はない。

ゴールを障壁に包まれた！

マズイな、結界ならともかく障壁はキーで解除できない。

物理的な攻撃力で破るほか無い…！

俺はエンゼルアップで加速し、ゴールの前に移動する。

そのまま全力でシュートするが…

パンツ、というガラスを叩いたような音と共にボールが弾かれた。全力で蹴ったせいで跳ね返りも強く、ボールは俺の後方、リースの元に。

（ヤベ…。）

俺がディフェンスに戻りきるより先に、ボールはゴールに突き刺さった。

インフティ

上級補助魔法。

体の一部の力を瞬間的に上昇させる魔法。

瞬間的なので体にかかる負荷も少なく、デメリットが少ない。

く、仕方無い。今は4―1。ディフェンスを完璧にこなせば勝てる。

「そうはいかない…デビルフォール!!」

「うげ!?!」

黒い光に射抜かれ、エンゼルアッパーが消滅した。

クッ…流石にこの状態ではリースの動きには対応できない。
俺は必死にリースの動きについていくが…

（クソ、速え…）

ギリギリで追い付かず、再び得点を許してしまった。

そしてリスタート。俺だって流石にこれは疲れ、動きが鈍る。
先程と同じ様にリースを追うが…

また得点を許した。これで4―3…

どうすればこの状態で勝てる？

どうすればリースからボールを奪える？

辺りを見回してもいるのは戦意喪失状態のチームメンバー…

ん？そういえば、さっきから俺とリースばかり動いて…

そつか…、リースが出るからサッカーは捨てて、他の競技で点をと
ろうと、

運動神経の良い奴を他の種目に回したのか。

そして相手も同様…リースもそれを心得て誰にもパスを回さない。

……なら、勝機はある。

「サッカーの基本は魔法じゃないぜ…？
それを教えてやるよ、リースさんよ。」

リスタート。俺はボールを後方の仲間パスする。

「えっ！？」

パスなど想定していなかったリースは一瞬戸惑うが、
すぐにボールを奪い取り、そして得点を入れた。

「う、ごめんなさい…！！」

先程俺がパスした仲間が謝罪してくる。

「気にするな、筋書き通りだ。」

「はあ…？」

此処からは俺のターンだ…

リスタート。

俺は先程同様後ろにパス。

すると見せかけ、前方の仲間にパスを送った。

「っ！！」

俺が後ろにパスすると踏み先回りしていたリースは戻りきれない。

前方の仲間はどうして良いかわからず、とりあえず俺にボールを戻した。

それで正解だ…！！俺は一気にゴールまで移動。

俺は白金の短剣で腕を刺す。

(blood summons…ボール)

血を加工して赤いボールを作る。

このボールの硬度は金属並みに加工した。

これを全力でシュートする！！

ボールは障壁を叩き割った。

何もなくなったゴールに、本物のボールを……蹴り入れた。

同時に試合終了。サッカーは俺達第7チームの勝利に終わった。

『全競技得点集計の結果……』

優勝は、第5チーム!!』

まあ、1回勝ったからってこれまでの遅れを取り戻せる筈もなかったのだが。

>
i
3
2
4
6
0
—
1
5
6
3
<

Battle・37 VS 体育祭っ！！（後書き）

次回予告

夏休みがやってきた。

空也・黎・ハウエル・ルシフェル・ソル・キャロンの6名は海に来ていた。

この6人の夏はどのような夏になるのだろうか…

次回 Battle・38 VS 夏休み

「夏といえば海！海といえば水着だろ！！」

「野獣め、海の藻屑にしてやる」

Battle・38 VS夏休み

生きとし生ける全ての学生が待ちに待った、夏休みというイベントがやって来た。

教頭は、

『学生の本分は勉強。遊びがすぎて勉学を怠らぬよう』

とかいつていたが、恐らくは誰も聞いていないだろう。

しかし、セトについての詳細な情報も掴めないまま4か月も経ってしまったが…

とりあえずヤツが動くまでは束の間の平穏な学園生活を謳歌しようじゃないか。

8月のある日、俺はハウエル・キャロン・ソル・ルシフェル・黎を誘って

“イーグル・ビーチ”という無名な海水浴場に来ていた。

この周辺はファルシオン学園敷地内にあるものの、あまり開発の進んでいない地域。

故に中途半端なこの海水浴場には人が少ない。

とはいえ、ちらほらと人はいる。賑やかさに欠けて盛り上らないという事はない。

そして砂浜にはゴミなども落ちておらず、海の家も満席ということはない。

まさに、海水浴に相応しい場所といえよう。

「海だ――――――っ!!!!」

ハウエルが煩い。

まあ、7月中は俺とハウエルは補修ばかりだったからな。叫びたくなる気持ちもわからんでもない。

「ところでルシフェル。…眼鏡、どうするんだ？」

ルシフェルはいつも眼鏡をかけている。

今はまだ泳がないが、眼鏡を外せば前が見にくいだろう。

「これは度の入った水中眼鏡です」

「「えええっ!!!？」」

驚きのあまりハウエルと声が被る。

どう見てもいつもと変わり無いようだが…

「それより早く宿に荷物を置こうぜ。

折角俺が超超破格安値宿を予約してやったんだから。

あ、各自2000円は持ってきたらうな？」

「そこまで安いと逆に心配ですわ。

ですからわたくしの家の近くの海を提案したというのに。

…部屋に黴が生えていたり宿主が幽霊だったりしないでしょうね？」

「こ、怖い事言わないでくださいいゝ…」

俺が誘っておきながら言うのもなんだが、なんて濃い面子だ。

「じゃあもう行こうぜ。ソル、宿は何処だ？」

「さっき歩いてきたとこにでかい宿があったろ？」

おお、まさかあのヨーロッパ建築の豪華なホテルか！？

あんなところに2000円で泊まれるなんて感激だ…海からも近いしな。

「——あの裏」

裏かよ…！！

あんな巨大なホテルが近くにできたのだからその宿は相当経営難だらうな。

「——の森を抜けた先にある小高い丘にあるボロい民宿だ。」

「バ力野郎」

海から遠い！！遠すぎるだろ！？

「ようこそいらっしやいま…ゴホ、ゴホ…ガハアツ！！！」

「お祖父さん！！お願い、寝ていて！！宿は…私一人でなんとかするから！！」

「ならんっ…！！わしゃあ…死ぬときはこの宿で死ぬ！！
まだまだ若いもんには負けんわい…！！」

「お祖父さん…！（ホロリ）」

……………なんて宿だ。

客を差し置いて何してるんだ、この2人は。
だいたい宿で死なれたら滅茶苦茶迷惑だろうよ。

「ご案内…ハア、ハア…致します…ゲファッ!!」

案内されるがまま進む。

…空気が重い。何故だ…何故誰も一言も喋らない…!?

静寂の中間こえるのは、よろよと歩く禿げ頭の爺さんの死にそう
な咳と唸り声。

そして今にも踏み抜いてしまいそうなボロボロな床の軋む音。

結局、誰も一言も喋ることなく部屋に到着。

「どうぞ…ゆるりと…おくつろぎ…ゲホッ、オゴハアッ!!?」

「お、お祖父さーん!!」

ピシャッ

…。

…。

…。

「「「「はあああああ~~~~~」」」」

…外でも眺めて気分を変えよう。
俺は窓を開こうとするが、どうも錆び付いているようで動かない。
仕方ない、少々力ずくで…

バキッ

あ…………。

「…………はああああ……………」

いかん。とりあえずカーテンで窓を隠しておこう。

「と、とりあえず海行こうぜ！宿なんて二の次だ！」

グッジョブ、ハウエル！！

「ええ、それは構わないのですけど。

…まさかこの宿、合同部屋じゃないでしょうね？」

「…どうなんだ、ソル？それは流石に無いよな？」

「それは大丈夫だ。なんか男側の部屋に皆案内されたが、
女子の部屋はここを出て左の部屋だよ。」

「よかった…ありがとうございます、ソルさん」

黎、それは感謝すべき所じゃない。当たり前だ。

「あー、やっぱり海って良いよなあー。」

海に到着した。

女子は水着に着替えて、そろそろ来る筈。俺達は森を歩いて蚊に差されまくったが、あの2人はイブシリアスがあるからな。

「しかしお前…もっとムキムキなのかと思ったら…」

ハウエルが俺の体をまじまじと見る。

「…一般とたいして変わらないんだな。それでどうやってあんなバカ力を出してるんだ…？」

「わかってないねえ。このくらいが最も運動や体術に向いているのだよ。多分。」

「そうなのか…？」

あーあ、はやく女子勢来ないかな…。」

「そろそろだと思いますよ。…しかしハウエルさん、やたら楽しみにしていますね」

ルシフェルはいつぞやの読心魔法を使用している。
そろそろその魔法、使えなくなるからな。

「あ、わかるか？

やっぱ夏といえ海！海といえ水着だろ！！」

「「「……………」」」

「野獣^{ロリコン}め、海の藻屑にしてやる」

俺がハウエルを処刑するため歩み寄っていると…

『みなさん、おまたせしましたー！』

黎の声が聞こえた。

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

B a t t l e ・ 3 8 V S 夏休み（後書き）

次回予告

海で思い思いに遊んだ一同は、
近くで偶然開催されていた夏祭りに訪れる。
しかし何処にでも騒動とはあるもので…。

次回 B a t t l e ・ 3 9 V S 夏祭り

「あの槍をどつちが先に見つけるか勝負だ。」

「死んじゃいますよ!?!」

Battle・39 VS夏祭り

『みなさん、おまたせしましたー!』

年齢相応のすこし舌足らずな黎の声。

声のほうを振り替えると、水着姿の黎とキャロンがいた。

キャロンは露出の多めな白のビキニの水着。

黎はキャロンとは対称的に露出の少なめな水玉模様のワンピースタイプの水着。

「おお…キャロン嬢のでかい胸も良いけど…

黎ちゃんのだけない感じも良いなあ…」

イラッ。

こいつ、いずれロリコンになるな…いや、もうなってるか？

確かに黎は一般人をロリコンにする程の魅力を持っているが…

どちらにせよ早急に処置せねば。

「なあ、ハウエル。ちょっとした競争をしないか？」

「競争？」

「ルールは簡単。この槍をどっちが先に見つけるか…勝負だ。」

さつき森を通ってきた時に植物で腕を切ってしまった。

その時の血をblood summonsで加工して槍を作った。

これを全力で海に投げ込む。遙か遠くで水飛沫がたった。

「ああ、やるからには負けないぜ？」

「じゃ、今からスタートだ。」

ハウエルが海に飛び込んだのを確認し、槍を手元に戻す。

blood summonsで加工した物質は自在に操ることができる。

物質が遠くにあってもそれは例外ではなく、遠くのもの操ることだってできる。

我ながらなんて化け物じみた能力だろう。

ともあれ、これでハウエルは存在しない槍を探し続けるだろう。

暫くは帰ってこないな…

「うつうつ…。」

「水を恐れていては泳ぐことなどできませんわ。さあ、海に入っで。」

「

「わ、わかりましたあゝ…。ううゝ…。」

黎は恐る恐る海に入る。

…が。

「ひゃあっ!?!」

水中の石につまづいてしまった。

「ゴ…ゴポツ、ばぶべびゃばん!（助けてキャロンさん!）」

「貴女の身長より低いところで溺れてどうするのよ…」

キャロンは黎を救い上げる。

「あうゝ…。」

「もうなんというか…泳ぐとか以前の問題ね…」

キャロンはどうしたものか、と顎に手をあて暫し考える。

…ああ、そういえばスポーツ万能ビックリ人間が身近にいた。

「空也さんに指導してもらいましょう。」

「えっ、そ、それはちょっと…!?!」

「あら?何か不都合でも?」

黎の頬はすこし紅潮している。

「あの…その…は…恥ずかしくて…。」

キャロンは呆れ顔で黎を見るが、黎は気づいていない。

（…まあ、このくらいの歳の子は親族とかに恋をするものなのかしらね…）

とはいえ、どうしたものか。

この天才的な運動音痴に水泳を指導するのは至難の技。

「うう…。」

いつも学園で見ている黎の姿とは全然違う。

これが一切飾ることの無い黎の姿なのだろうか、とキャロンは吹き出してしまう。

（…本当に、面白い娘ね。）

「あの…降ろして貰えませんか…？」

思えば先程黎を救い上げたとき丁度お姫様抱っこのような形で助けていた。

さつきからずっとこのままだったことを忘れていた。

…持ち上げていることを忘れる程軽いとは…

少し嫉妬心と加虐心が芽生え、キャロンは意地悪を試みる。

「あら、降ろしていいのかしら？降ろしたらまた溺れるんじゃないかな？」

「あ…うう…でも恥ずかしいです…降ろしてください…」

キヤロンは黎を降ろそうとするが…

「あうう、やっぱり降ろさないでくださいっ！」

「どつちよ！？」

陸に降ろしてもらおうという選択肢は浮かばない黎だった。

ハウエルが帰ってこない。

まあ、仕方ないか。大分日も沈んできたし、海は暖かくなるだろう。結局、ソルを埋めたりハウエルを沖まで泳がせたり黎を眺めたりしていたら

もうこんな時間になっていた。正確な時間はわからないが5時位だろう。

そろそろ旅館に帰るとしよう…嗚呼、憂鬱だ。

「おい！！掘り起こしてくれ！もうすぐ満ち潮だ！」

「H A H A H A、満ち潮になれば砂が流れて抜け出せるさ」

「…相変わらずソルさんに対する扱いが凄まじいわね…」

「どうしたんですかソルさん！？死んじやいますよ！？」

キャロンと黎は先程まであつちで水泳指導をしていたが、いつの間にやらこちらに来ていた。

「そろそろ旅館に帰ろう。近くで偶然夏祭りを行ってるらしいぞ。」

「あら、ハウエルさんとルシフェルさんはどこへ？」

「ハウエルは存在しない槍を追って沖まで泳いでいった。ルシフェルは先に旅館に帰ってるぞ。」

「前者は明らかにおかしいでしょう…何やらせたのよ…」

旅館に着いた。

何だかんだでだいぶ疲れたな…耳に海水が入りまくっている。
砂まみれのソルや命からがら帰って来たハウエルよりはマシだが…

「さて、とつとと着替えて祭りに行くぞ。」

ルシフェルは既に浴衣に着替えている。俺も着替えるでしょう…
で…浴衣ってどう着るんだっけ？

「お…俺はパスだ…とても起き上がれそうにない…」

「全く、情けないぞハウエル。」

「仕方ありませんね。ハウエルさんは除いていきましょうか。」

で、夏祭りはどこで開催されているのですか？」

夏祭りの情報は海の家でとうもろこしを買ったときに聞いた。
確か夏祭りはこの旅館の裏辺りで開催されていたような…。

「おー、ここで合ってたか」

旅館の裏には賑やかな喧騒や屋台の明かりが広がっていた。

「お、林檎飴だ！」

ソルが速効で林檎飴屋台に駆けていき、人混みに紛れ見えなくなった。

全くしょうがないやつめ…

ふと後ろを振り返ると、黎とキャロンも消えていて、いるのはルシフェルのみとなっていた。

黎を探そうかとも思ったが、キャロンが一緒なら問題はないだろう。

お、たこ焼き発見♪

—— 同じ頃、夏祭り会場から少し離れた場所 ——

「空也さん、どこに行くんですか…？」

黎は人混みの中キャロンとはぐれてしまっていた。
腕を引かれたので空也かと思い、付いてきていたのだが…

人混みから脱出し改めて見れば、それは空ではなかった。

「あなたは……？」

「——騒がないで、貰えるかな」

鈍く銀色に光る棒状の物体を持つ、怪しげな青年はニヤリと笑った。

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

Battle・39 VS夏祭り（後書き）

次回予告

不審な青年に拐われてしまった黎。

どうやら海にて眼をつけられていたようだ。

黎に危機が迫る…のか！？

そしてその時、空也は…！？

次回 Battle・40 VS不審者

「タコつめえ！」

Battle・40 VS不審者

「タコつめえ！」

ソースの旨味とタコの歯応えがなんとも言えない。

「…キヤロンさんや黎さんと合流しなくて良いのですか？」

「んー、2人は2人で楽しんでんじゃないか？浴衣着てたし。」

浴衣着て来てるって事は楽しむ気満々って事だ。俺と同じように。お、射的がある。景品はどんなものがあるかな…

「えっ…な、何ですか？」

空也は樂觀視していたが…

黎はというと不審者に人気の無い場所に連れて来られていた。しかも、不審者の手にはナイフが握られている。

「怖がらないで…こっちにおいでよ…」

さつき君を海で見たときに…決めたんだ…君を誘おうと…」

「……………」

黎は無詠唱で魔法を発動させる。発動したのは障壁だ。

「警戒すること無いんだよ…さあ、此方においでヨ…」

青年の瞳が不気味に光る。

これは紛れもなく、魔の眷属に見入られた者…死霊の放つ光だった。

「おいでよ…おいでつてば…此方ノ世界ニツ!!」

「!!」

突然飛びかかってきた青年。

その手のナイフは黎の細い首の直前で止まった。障壁に阻まれたのだ。

「……………!？」

「……………つ、スペル・キャンセル」

黎は空中に五芒星を描く。詠唱の一種だ。

黎が発動させた魔法は靈魂救済魔法。

呪われた意思を浄化し、正しい輪廻の輪に送る魔法。

「ぐ…ぎいやああああ!？」

「!？」

靈魂救済魔法はその名の通り、霊を救う魔法。

目の前の霊は何故苦しみ始めたのだろう。

ともあれ、苦しみを与えることを良しとしない黎は魔法を止めた。

それを確認し、死霊の青年はニタリと笑い、ナイフを握り締め…

黎の足元を魔法で流砂状に変化させた。

突然の事に不意を突かれ、黎は転けてしまった。

「きゃあっ!？」

直ぐに起き上がろうとするが、足元が安定しない上、

黎が来ているのは水色の…着なれていない浴衣。

起き上がろうともがくが、全て徒労に終わる。

「アハハハハハ!!」

僕はまだ…消えられない…!!一緒にいこウヨ…!!」

青年はギラリと光るナイフを振り上げる。

「う…間に合わない…!？」

黎の障壁は相当の硬度を持つものの、完全に展開するまでは時間が

かかる。

不意を突かれた黎は障壁を再展開できずにいた。
黎の首に鋭いナイフが迫る…。

「…ああ、こんなところにいたんですの!？」

藍色の浴衣を着たキャロンが駆けてくる。

「お？ちよつと待っててくれ。射的が…」

「射的なんかやってる場合じゃありませんわ…！
黎さんがいなくなってしまったのよ…！」

「何イ!!？いつ!？どこで!？誰に拐われて!？」

「いや、まだ拐われたとは…」

ともかく一刻も早く見つけなければ!!
そして黎を拐いやがった変態は直ぐに『処理』してやる…!!

…いや、殺しは良くないな。

「黎っ！！どこだ、黎ー！！」

「じ…ここです、空也さん…。」

か細い黎の声が聞こえたのは森の茂みから聞こえた。
声の聞こえた方向の茂みに進入する。

「あううゝ…」

「ど、どうした黎…何があった？」

茂みの中にいた黎の浴衣は茂みのあちこちに引つ掛けたりしく、
所々破れていて…袖の辺りにはナイフで切られたような鋭利な跡も
あった。

「さっき死霊の眷属に襲われて…イプシリアスで逃げたんですけど…
適当に飛んだらこんな所に…いたたたあゝ…」

資料の県属？

……………何だそりゃ。

「死霊の眷属…じゃあ、また追ってくるって事ね。」

（資料の県属って何だ？）

これ以上会話に置いていかれるのは御免なので、ルシフェルに質問する。

「死霊の眷属とは、輪廻転生の輪から何らかの原因…または、自ら輪廻転生の輪から外れた元人間の事です。

一度狙った人間にいつまでも執着しあの世に引き込もうとする性質があります。」

それは厄介だな…

しかし黎を脅かすものは誰一人として許さん！！

「出てこいロリコン幽霊——！！俺が引導を渡してやる——！！」

『誰がロリコンだって…？』

突如、辺りに声が響いた。同時に周囲のジメジメとした暑さが急に冷える。

しかし俺達5人以外には誰もいない…

『今すぐに仕掛けたい所だけど…丑三つ時にはまだまだだし…多勢に無勢だ。』

今消えたら彼に何されるかわからないし…今は止めておくよ…』

冷えていた空気が再びジメジメと暑くなる。

…死霊の眷属が去ったのか？

けど、諦めた訳じゃないらしい…。丑三つ時がどうか言っていたし…

しかし、“彼”？

………一体誰の事だ？

………暫く考えたが、思い当たる節はない。思考を中断する。

全く、何故俺達はどこに行っても何かに狙われるのだろう。

何らかの呪いでもかけられているのだろうか。

或いは………

死霊の眷属のせいですっかり興醒めした俺達は旅館に帰ってきていた。

相も変わらず死にそうな爺さんの出迎えを軽くスルーし、部屋に入る。

「…で、どうしようか。黎さんを守るために何か策はないかしら？」

第1回、黎をロリコンから守ろう会議。議長はキャロンだ。

「わ、私なら大丈夫ですよ。また来ても何とかできます。」

「一度やられた人が言う台詞ではありませんわ。

死霊の眷属は丑三つ時に最も強まるのよ？貴女、多分その時寝起きよ。」

「あー、黎は寝惚けてると全然ダメだからな。」

「う…そ、それは確かに…」

黎は少し恥ずかしげに目を伏せる。

しかし、直後サッと顔を上げ、

「で、でも、ずっと起きていれば…!!」

「…黎が深夜まで起きていられた事はなかった気がするな。」

「あうう…」

「まあまあ、無茶なさんな？

…俺が見張っておく。だから安心して寝るんだ。」

黎はわかりました、と俺に魔法をかける。

浄化の陣

中級補助魔法。

生身の肉体で霊に干渉する事ができるようになる魔法。
手の甲に東方の被魔師が使用する紋章を描くことでも同様の効果が
得られる。

オーケー、お被いといこうか!!

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

B a t t l e ・ 4 0 V S 不審者（後書き）

次回予告

丑三つ時に現れた死霊の眷属は空也と対決する。
しかし空也は対人戦ではやはり強く、
追い詰められた死霊の眷属は……！？

次回 B a t t l e ・ 4 1 V S 死霊の眷属

「ロリコン退散……！！」

Battle・41 VS死霊の眷属

現在、この部屋にいるのは俺と黎、キャロンの3人。

壁の古時計を確認する。今は午前0時。

丑三つ時…つまり、奴が来る時間である午前2時にはまだ2時間ある。

「すう…すう…」

静寂の中、黎の小さな寝息と時計が時を刻む音だけが聴こえる。

（…黎さんが寝惚けている時って、どんなのです？）

キャロンが俺に小声で話しかける。

黎を起こしてしまわないための配慮だろう。

（黎が寝起きだと…魔法をうまく使えない。

魔法には精神統一が必要だからな…寝起きだと安定しないんじゃないかな？）

（ふふ、微笑ましいですね。）

（黎って普段不必要に大人っぽいからなあ…

ちよつとした子供っぽさが実に微笑ましく感じるな。）

（……あの……。）

キャランが珍しく控えめに喋る。

何か言いづらいことや聞きづらいことだろうか？

（どした？）

（お2人は…その…何故、兄妹で苗字が違うんですの？
答えにくいことなら…今の質問、無視してくださいまし。）

ん、答えにくい訳ではないんだがな。

何というか、俺達の失敗としかいえないよな…

嗚呼、あの時も少し考えて名前を考えていれば…！！

（まあ、何っ…か…若気の至り、ってヤツ？
色々と複雑、とかそんな感じかな…）

（は、はあ………？）

神だから自分で自分に名前をつけられ、
何も考えずにつけたら血が繋がっているのに苗字が違う事に気付いた。

………とは言えない。

午前2時、丑三つ時。

急に辺りの空気が冷える。

「来ましたわね…！」

「ふえ………？」

「黎は俺達の後ろに隠れとけ…！」

「は、はいっ」

沈黙。

緊張感が部屋を支配する。

『逃がしはしないよ…邪魔するなら…君らも………殺すよ？』

突如、蛍光灯の明かりがつくように死霊がその場に現れた。
その手に握られたナイフは月の光を反射しキラリと光る。

「上等よ。もつとも、無理でしょうけどね!!」

キャロンは死霊に氷の矢を投げつける。

死霊はナイフで矢を弾き落とし、キャロンに接近。

俺はその死霊の顔面に裏拳を喰らわせ、後退させる。

その顔面からは鼻血が一筋流れていた。まあ、鼻殴ったしな。

「面倒だなあ…でも、その娘を連れていかないと…」

僕が彼に消されるんだよね…だから君達…とつと退いてくれ…!!」

「ロリコンを正当化しようってそうはいかんぞ!ロリコン退散
……!!
……………そもそも、さっきから“彼”ってのは誰の事だ!？」

「それを…言うわけには…いかないんだよ……!!」

死霊は俺めがけてナイフを投げつける。

あえて頬を掠るように回避し、頬から血が流れる。

blood summonsで鉤爪を作り出し、装着。

距離を詰め、鉤爪で死霊を引き裂きにかかるが、

死霊はどこからかもう1本のナイフを取り出し、応戦する。

俺の鉤爪とナイフがぶつかる。

…そして、鉤爪を變形させ、ナイフを包み込み、抜けなくする。

もう片方の鉤爪で……死霊の体を真一文字に切り裂いた。

「ゲグアアア!？」

…クソッ、不味い…このままでは…!!仕方がない…!!」

死霊は俺に引き裂かれた所から流れ出る血を指に付着させ、何か不気味な紋章を描きはじめた。

召喚術D

禁術。

自らの血を大量に使用して紋章を描き、召喚を行う術。

あまりに血を使いすぎるため術者に負担がかかることと、

呼び出すものが自分の力で抑制出来ないものでも召喚できるため、危険と判断され禁術と登録された。

「不味いですわ、止めますわよ!」

キャロンは氷の矢を数発死霊に撃ち込むが、障壁に弾かれてしまう。みるみるうちに死霊は紋章を描き終え…

完成した紋章は突然、血の池のように変化した。

「出でよ、冥界の門！！」

死霊の呼び掛けに応じ、血の池から巨大ななにかが姿を現した。

「ひっ…！？」

黎は魔力の探知に長けている。

召喚された物の禍々しさをいち早く察知したのだろう…

召喚された物体はその姿の全貌を晒した。

——それは、門だった。

冥界の門

冥界と現世を繋ぐ門。

冥界からは救いを求める者達の腕が現世の人間に掴みかかる。

しかし冥界から逃げることは叶わないため、

現世の人間を引きずり込んでしまうのがオチである。

その為、何かの原因で現世に顕現してしまった場合、
門が開く前に壊してしまうのが得策とされている。

サーチは魔法だけでなく、魔物や魔法具の情報も見ることができる。
冥界の門、か…いかにもヤバそうだ。

月の光をまるで感じさせない漆黒の門。

至る所に目玉や骸骨などの悪趣味な装飾が施されている。

内部からダン、ダンと門を叩く音が響くたび、

門がギシギシと開きかけるが、どこかが錆び付いているようで完全には開かない。

「冥界の亡者どもよ…今助けが来るぞ…！！

——この生者共がな！！」

その声に狂喜した冥界の住民はより強く門を叩き、破ろうとする。

「フフ…今…その忌まわしき門の…鍵を開こう…！！」

死霊は血を流しながら不敵に笑った。

$$\begin{array}{r}
 > \\
 & i \\
 & 3 \\
 & 2 \\
 & 4 \\
 & 6 \\
 & 0 \\
 \hline
 & 1 \\
 & 5 \\
 & 6 \\
 & 3 \\
 & <
 \end{array}$$

B a t t l e ・ 4 1 V S 死霊の眷属（後書き）

次回予告

冥界の門を開こうとする死霊。

様々な思惑が交錯するなか、冥界の門、開く……！！？

そして事態の終結後、死霊は……！！？

次回 B a t t l e ・ 4 2 V S 冥界の門

「役たたずの屑に用はない……！！」

Battle・42 VS 冥界の門

死霊は不気味に笑うと、ナイフで門の錆を切り落とそうと近づく。

「これで僕は役目を果たした…！」

僕を解放してくれ…！エデ———」

言いかけて、死霊は動きを止める。

その腹部には、氷の矢が深々と刺さっていた。

「うつ…ぐああ…！？」

「勝利を確信するには早すぎたわね…！」

黎さん…！」

黎？

俺は後ろを振り向く。

黎は小さな声で何かを詠唱している。

流石にもう寝惚けてはいないため、黎の魔法が復活したのか。
これで相当な戦力になる！

「…スペル・キャンセル…！」

スぺル・キャンセル

靈魂救済魔法。

死霊の眷属など、呪われた意思を浄化し、輪廻転生の輪に戻す魔法。被魔師の使う魔法のほとんどはこの魔法、或いはこの魔法の応用である。

「ぐ…うああああ…！」

死霊の苦しい悲鳴を聞き、黎は反射的に魔法を弱めてしまう。死霊はニタリと下卑た笑みを浮かべ、ナイフで門を切りつける。バキンッ、という音と共に門の錆が強引に開かれる。

「！？またっ…やっちゃった…っ！！？
スぺル・キャンセル…！」

「これでいい…これで僕は…！！」

死霊は黎の魔法により消えていく。
が…冥界の門は開いてしまった。

「ごめんなさい…私…！」

項垂れる黎の頭に手をのせる。

黎は俺を見上げる。その目にはうつすらと涙が浮かんでいた。

「気にすることない。アレを壊せばいいだけだ…」

門は開かれ、内部から無数の腕が飛び出してきた！

「俺達が腕を掃除する！！黎は門を壊してくれ！！」

俺や黎に群がる腕を振り払い、あるいは切り裂く。

冥界の亡者は大きな罪を犯し輪廻転生の輪から外された者。

同情する必要などない…！！

先程まで静かだった部屋は亡者の苦しげな呻き声で満たされた。
宿主やハウエル達が集まる前に何とかしなければ…！

「光よ、実体を成し現れよ！！」

——クリエイター・ハンド！！——

黎の魔法が発動し、青白く巨大な手が現れた。

クリエイター・ハンド

超上級攻撃魔法。

魔力エネルギーを固めた巨大な手を造り出す。

手は様々な魔力を付加することができ、自らの意思に連動して動く。
その巨大さから、創造主の手と呼ばれる。
クリエイター・ハンド

黎は巨大な手を操り、冥界の門を…

グシャッ

力任せに握りつぶした。

こんな事をしても手が破損しないのは、黎の莫大な魔力ゆえだろう。

腕も粗方掃除し終え、消えている。

これにて、死霊騒動は終結した。

幾つかの謎を残したままで。

空也が死霊と戦っていた頃…ルシフェルは宿の裏口の森に来ていた。左手に魔神の書を抱え、右手から滴る血で紋章を描く。

ルシフェルは苛立っていた。

ルシフェルの携帯が鳴り、苛立ちの対象から電話がかかってきた。

「もしもし。」

『ルシフェル、死霊の件ですが…』

「…何故、あの様な勝手をしたのです。

蒼井黎にはまだ手を出すなど、あのお方からも言われていたでしょう?」

ルシフェルの声は苛立ちが見え隠れしている。

『…ルシフェル。いかにあのお方の力が宿っていても貴方は人間。我らは完全に貴方の力を信頼しているわけではない。』

「ふざけた事を言わないで貰いましょうか…!!」

僕は“力”を手に入れた。僕はもう無力な人間ではない!!」

『そんな事はわかっています。』

私達は貴方が生み出される遙か昔の遙か昔からこの計画を進めてきた。

——もし失敗したら、貴方はどう責任をとるのです？

あのお方には悪いですが…私は貴方のサポートに回らせていただきます。」

ルシフェルの体を黒い霧状の魔力が包む。
そして…

「——貴様…勝手はするなと念を押したはずだ。忘れたか？」

ルシフェルの表情や口調が一変した。
それに気付き、電話の相手に緊張が走る。

『はっ、申し訳ありません…!!しかし…!!』

「この計画を長い間進めてきたのは貴様も知っている筈。
貴様の下らんお遊びでこの機会を棒に降るというなら……」

——いかに貴様でも、捻り潰すぞ。」

『も…申し訳ありませんでした…!!』

「以上だ。あとは朗報を待つが良い。」

ルシフェルは電話を切る。

すると、黒い魔力が霧散し、表情ももとに戻った。

突然、ルシフェルは胸を抑え苦しみ始めた。

【すまん…一時体を借りたぞ】

「…い、えっ…構いま、せん……」

ルシフェルは胸を抑えたまま、よろよろと旅館へ帰っていった。

愚かな少年は気づかない。

“影”の恐ろしさを。

“影”が己に及ぼす副作用を。

——誰しも生まれながらに心に鬼がいる。
ある人は鬼と戦い、他の人は鬼に愛を感じる。

Ｌ・ブロワ

「う……ぐ……」

「……しくじったようだな。」

四方が漆黒に包まれ、何もない空間。

そこに、紫色のコートを着込んだ耳の尖った純系のエルフが1人佇んでいた。

絹の糸が如く美しく靡く金の髪が、エルフの気品を漂わせている。

その手には、携帯電話。先程まで通話をしていたようで、

画面には通話時間と通話相手の名前が映っていたが画面が切り替わり見えなかった。

そして、エルフに歩み寄るのは黎に浄化された筈の死霊。
浄化寸前でエルフに転送されていたのだ。

空也、キャロンの猛攻を受け、死霊は深傷を負っている。

「助け……くれ……エデ………」

「———— 役立たずの屑に用はない……!! 消えるがいい!!」

エルフはコートの袖に仕込まれた短剣で死霊を貫く。

「あ…っ、ぐあああ…！！」

何らかの魔法なのか、短剣は鞭のように撓りながら死霊を微塵に切り裂いた。

死ぬことができない死霊は無限の痛みと苦しみを味わい続けることになる…。

「く…——様の側近に最も相応しいのはあんな若造ではない…っ！！」

私こそがあなた様の側近に相応しいというのに…
何故、あの若造を選ばれた…？——様…。」

エルフとは誇り高き種族。純系であれば尚更だ。
それを従えるのは、如何なる人物なのだろうか？
肝心のその名は、何かに阻まれ誰にも聞こえなかった。

……………死霊の、声に出せない悲鳴と同様に。

Battle・42 VS 冥界の門（後書き）

次回予告

全ての学生が迎える、夏休み最大の闘争が空也、ハウエル、ソルに訪れた！！

黎、ルシフェル、キャロンには訪れなかったその闘争とは一体？

次回 Battle・43 VS 宿題

「計画的に」なぞ片腹痛い！！」

「その結果が…」

「頼む黎、みなまで言っな」

感想・評価などお待ちしております。

B a t t l e ・ 4 3 V S 宿題（前書き）

魔法関連裏設定説明回

Battle・43 VS宿題

学生が夏を楽しめば楽しむ程、反比例してその凶悪さを増すもの。優秀な人間は口を揃えて『計画的にやっておけば…』と言う。それができれば苦労はしていないのだ。

「計画的に」なぞ片腹痛い！！」

「その結果が…」

「頼む黎、皆まで言うな…！」

知っているんだ、そんな事。

計画的にやっておけば楽だった事。

しかし、宿題をやるうという気持ちちが微塵も浮かばないんだ！！

「…とにかく、とっと片付けようぜ。」

今、ハウエルとソルが俺の寮に来ている。

目的はただ1つ。宿題をより早く片付けるためだ。

黎も教える程度の協力はしてくれるらしいが…写させてはくれない。当たり前といえば当たり前だ。

黎はそういった不正には厳しいからな…

「まずは魔法基礎知識から埋めていこう。」

第一問

炎属性の最弱魔法の名は？

んー…黎が以前使っていた気がするが…。

名前は忘れたな…なんか指に小さい炎を点す魔法だ…

「ディレリ、だ。そんなもの覚えとけ。」

く…ソルにそんな台詞を吐かれるとは屈辱的だ…
しかし俺にわからないものはわからない。
そこら辺はソルをうまく利用すればいい…

最終問

現在、最強とされている攻撃魔法は

「アポカリプスだ！…俺は使えないが」

「問題は最後まで読め。」

アポカリプスですが…アポカリプスを構成している魔法は幾つ？

「幾つなんだソル？」

「……知らねえ」

「何！？お前さっきまで偉そうにしておいて!？」

いや、待てよ…以前リースが使っていたのをサーチしたことがあったか。

たしかアポカリプスは属性の反発を利用した大爆発を起こす魔法だった筈。

六属性は炎・氷・雷・風・光・闇。

もう少し分割できるが、大まかな六属性はこれだ。

この中で反発するのは炎・氷と光・闇。

つまりその4つの属性の魔法を使うわけだから…

「答えは4だ!!」

「惜しいです。それだと自分のすぐ近くで大爆発しちゃいます…」

「え?………あつ、デユマか!?!つまり答えは5だ!!」

「正解です。良くできました!」

ほとんどソルが解いたのを写したんだがな…

「…ところで、ハウエル…なんでさっきから黙ってるんだ?」

「……魔法計算式を解いてるんだ。
後で写させるからちよつと黙っててくれ…」

ほほう…てつきりサボってるのかと思ってたが。
まあいい。俺は俺の担当を…

- ・魔法体術
- ・魔法陣基礎知識
- ・魔法印基礎知識
- ・数学

何で最後だけこんな普通の…?

ともあれ、魔法体術は俺の戦闘スタイルだから問題ない。

魔法陣、魔法印はサーチでなんとかなる。

数学は…まあ、大丈夫だ。

では体術から…

第一問

魔法体術に組み込まれている戦闘スタイルは空手、柔道とあと一つ、何？

合気道。

俺は勝手に神域流闘術を組み込んでいるが…

第二問

魔法体術を使う上で気を付けなければならないことは？（解答多数）

手首や脚などを痛めないこと。

第三問

魔法体術において重要な補助魔法、アグルスの効果は？

知らねえよ！

魔法陣基礎知識。

あまり魔法陣や印については知らないんだよな…

頭の中で描いた事を魔力を用いて実体化させるのが魔法。なら、魔法陣は何のためにあるんだ？

…軽く教科書でも眺めるか。

なになに…魔法陣とは、発見された魔法の魔力消費を少なくして発動できる。

強力な魔法は魔力消費も激しい。

中には、魔力を使いすぎるため発動が実現できない魔法もある。

そういった魔法を解析し、魔法陣を割り出すことで、魔法陣を媒体にして発動させられる。

ほうほう…じゃあ魔法印ってのは？

これに至っては何の事かもわからん。

…魔法印とは、魔法ごとに存在する紋章。

魔法発動時に魔法印を頭に描くことで魔力の節約…

及び、魔法の発動を早められる。

また、属性ごとにも魔法印があり、属性威力を高められる。

なるほど…今まで腑に落ちなかったが、そういう事だったか。
ふむふむ…へえ…六属性の紋章はこんななのか…

「オイ！！きちんと進めろ！」

「うるせえな、やってんだろが！？」

ソルの奴は待つということを知らんのか？

そもそもアイツだって宿題やってないからここにいくせに。

「『『終わったあー！！』』」

長きに渡る戦いはあまり描かれることなく終了した。
今は寛いだり、頭を冷やしたり…

「お疲れさまでした皆さん♪お茶でもどうですか？」

俺達の前に冷えた紅茶が差し出される。

しかし、黎はいつの間に宿題をやっていたのだろう。

夏休み中、黎は散歩に行ったり、花の世話をしたり…

宿題をやっている場面はなかった筈だが…？

相変わらず黎の私生活には謎が多い…。

「…しかし、いよいよ夏休みも終わりだな。9月か…」

「9月には文化祭がありますよ。」

文化祭…9月…なんか忘れてる気がする…

ん…？9月…9月…文化祭…誰かが帰ってくるんだった気がするな…

………！！！！！！

「忘れてた…！！久城だ！！」

…停学期間が終わって…久城が帰ってくる…」

「げっ！！？」

「ああ…あの怖い人ですか…あの人、風紀委員でしたよね？
という事は文化祭はあの人仕切るんじゃない？」

「さ、最悪だ——…!!」

そこそこ楽しみにしていた文化祭だが…
……早くも暗雲が立ち込めてきたような…

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

B a t t l e ・ 4 3 V S 宿題（後書き）

次回予告

文化祭の準備に忙しいトパーズクラス。
そして復帰した久城は…？
波乱の文化祭が幕を開けた…！

次回 B a t t l e ・ 4 4 V S 文化祭

「…チツ、トパーズか…。」

感想・評価などお待ちしております。

Battle・44 VS文化祭

「…それでは、意見をまとめます。」

黒板の前にはクラス委員のルシフェルが文化祭についての司会をしている。

黒板にはまず決めるべき文化祭の出し物について様々な意見が出されている。

「…多数決をとり、上位3つの意見をまとめます。
まず、1番の室内で縁日を再現する出し物を望む方はご起立願います。」

何故起立…？国会じゃねえんだから…

「着席願います。」

次に、2番のコスプレ喫茶を望む方はご起立願います。」

立つの面倒くさい…が、一応立っておこう。

こういったお約束的出し物は意外と面白いから…。

「着席願います。」

…次に、3番のお化け屋敷を望む方はご起立願います。

…着席願います。

次に、4番の和風喫茶を望む方はご起立願います。」

…そして全ての意見の決をとり終わり出来上がったのは…

「では、上位3つのコスプレ喫茶、和風喫茶、お化け屋敷を統合します。

そうですね……では、

『クラス全員がハロウィーン風の仮装をした和風喫茶』で決定します。」

「……えええ………！？」

お化け屋敷↓ハロウィーン
コスプレ↓ハロウィーン縛り
和風喫茶↓メニューだけ

………凄い混ぜ方だ。

「…では、ダイヤモンドクラスの出し物はメイド喫茶に決定します…」

ダイヤモンドクラス。

代表の黎が意見をまとめている。

…言っまでもなく、黎はこういった仕事は苦手で緊張している。

（メイド喫茶って何だろう…？）

「…では、次にメイド喫茶の名前やクラス内での配分を決めたいと思います。」

えーと……た、例えばどんな配分がありますか？」

黎はメイド喫茶提案者に話を丸投げする。

「！？えー…例えば接客役と調理スタッフ。」

接客役はメイド服を着ます。他に、宣伝係もメイド服を着ます。」

「へえ…」

（あー、この子わかってないな…）

男子生徒は直感した。

「ステイルさん、一年の全クラス出揃いました。」

ステイル「アダムスとは風紀委員代理をしていた生徒。しかしその役目は9月の始まりと同時に終わった。」

「貴方は…」

「…そこに置いておけ。後で目を通しておく。」

後ろ向きのソファに脚を組んで座っている男の白い髪が風に揺れる。

「は、はいっ！！し、失礼しますっ！！」

書類を提出しに来た男子生徒は逃げるように出ていった。
当然といえば当然だ。

彼の…久城の行なった行為は全校生徒に知れ渡り、恐れられている
のだから。

「…チッ」

久城は立ち上がる。首から提げられた赤い十字架が小さく揺れた。
全ての元凶である呪いの魔法具を久城がつけ続けるのは何故だろうか。

赤い十字架は以前より光を増している…

久城は書類の置かれたガラス製の机に歩み寄る。

机の一部は大きく凹み、割れており血のシミが付着している。

以前久城がデス・レーベル構成員の頭を叩きつけた際のものだ。

久城は書類に目を通す。

ダイヤモンドクラス 基本メイド喫茶

アメジストクラス 魔法体験教室

：

：

：

：

：

トパーズクラス ハロウィーン和風喫茶

「…チツ、トパースか…。」

彼にとって苦い経験が頭を過る。

同時に、彼の体を黒い魔力が包む…が、直ぐに霧散した。

（まだか…。）

久城は書類をまとめると足早に去っていった。

文化祭当日。

「これを着るのか？」

「はい」

俺に支給された衣装はバンパイア風の外部が黒く内部が紅い外套。

それに黒い服、牙を再現するマウスピース。吸血鬼の衣装だな…
なんでも、瞳の色が赤いかららしい。俺は赤みがあった黒だとい
うのに…。

「冗談だろ…誰か、そうだと言ってくれ!!」

嘆いているのはハウエル。

衣装はゴースト。白い、ぶよぶよとした服にとぼけた顔の被り物。

「何で俺だけ着ぐるみなんだよ!？」

「それしか余っていなかったのです。」

それと、お客様の前ではキャラ作りを忘れぬよう注意してください。

空也さんは中世の（偉そうな）貴族のような口調で…
ハウエルさんは『ぽよ』としか言っではいけません。
注文の際などは語尾に『ぽよ』をつけてください。」

「ふざけてんのかぽよ!!??」

…あれ？何か勝手に語尾が!?!?…ぽよ」

「ほほう、なかなかに入り込んでいるではないか…
…待て。俺の口調が勝手に修正されておるぞ!!?」

何だこれは!??

…っと、待てよ…

インフィジル

中級特殊魔法。

対象の口調を指定のものに变化させる魔法。

一定時間経過か、術者が解除する以外には解除方法がないという、
内容が内容なら禁術指定されていたであろう魔法。

「ルシフェル〜！！貴様〜！！」

これでは文化祭を回るときどうせよと申すのだ！？」

「大丈夫ですよ、回るときには解除しますから。」

む…それならまあ仕方ないか…
にしても、やはり何かイヤだ…

「お前なんかまだ良いぽよ〜！！？」
俺なんか…ぽよ〜！！」

「何を言っておる、貴殿は語尾が变化した程度であろう？」

俺は台詞の全てがこのような滑稽な口調になるのだぞ？

ルシフェル、何故貴殿は口調を変えておらぬ！？」

「僕は調理スタッフですから（ニッコリ）

お二人とも、張り切って接客してくださいね。」

あのメガネ野郎~~~~~！！

おそらく、ハウエルと心の声が被ったであろう瞬間だった。

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

Battle・44 VS文化祭（後書き）

次回予告

慣れない接客に苦戦する空也。

しかも、よりによって黎とキャロンが現れて…！？

次回 Battle・45 VS接客

「よくぞ参られた…空席にでも座して待つが良い…」

「空也さん…？」

「はうつ！？」

「…ぽよ」

Battle・45 VS接客

文化祭当日。

教室の飾り付け、料理の下拵え……そして店員のキャラ作りも終わり、
一年トパーズクラス、『和風ハロウィーン喫茶・“楔”』が開店した。

…どんな名前だよ。（命名：ルシフェル）
口調も元に戻らない。最悪だ…

そんな最悪な状況の中、2人の女性客がやって来た。
とりあえず、『いらっしやいませ、座席にご案内致します』…だな。
呼吸を整え…

「よくぞ参られた。今空席へと誘ってやろう…」

…。
…。
…。

最悪だ

—！！—
ていうか、こういう店なんだから客も少しは乗ってくれよ!？

くそお、滅茶苦茶恥ずかしい……！！

スタスタと足早に案内する。

また何か喋るとヤバいので、黙って椅子を引き座らせた。

（顔は良いのにね……残念イケメンって奴？）

（しっ、聞こえるよ……！！）

ち、畜生……！！恥ずかしい……！！

「……ご案内致します……ぽよ」

「ぷっ」

「……………！！」

ハウエルはハウエルで、おかしな口調のため笑われている。
ハウエルのドスの利いた低い声で『ぽよ』などと言われている笑う

のも頷ける。

それに、不良じみたハウエルの姿も着ぐるみのお陰でわからない。

…それで笑うなという方が無茶だろう。

「ご案内するでござる…」

「……っ」

因みに、仮装したトパーズクラス全員がルシフェルの魔法にかかけられている。

その為教室はクスクス笑いや、時に爆笑が響く。

そんな愉快的パフォーマンスに加え、和風料理の味は本物。

『和風ハロウィーン喫茶・“楔”』の客足はどんどん伸びていった。

……そして、それに比例して空也達の恥辱はますます増していった！

死ぬ…このままだと…恥ずかしすぎて死んでしまう…！

よりによってなんでこんな変な口調なんだよ…！！これじゃ変態じゃねえか…！？

こんな姿、（経緯を知らない）知り合いには絶対見せられねえ…！！

ガララッ

教室の扉が開いた。

他の連中は全員他の客に当たっているため、俺が出るしかない。

ピピッ

ん…何の音だ？まあいい。

「よくぞ参られた。貴殿の好む座席にて暫し待たれよ…」

「……ぷっ、あっはっはっは…！」

ピピッ

この声はソルか…！！

そしてその手には携帯電話。

ソルは俺に携帯の画面を向けると、何かを再生した。

『よくぞ参られた。貴殿の好む座席にて暫し待たれよ…。』

俺のコスプレ&恥ずかしい台詞のムービーファイル。

こ、この野郎…!!

「ふふ、あとはこれを俺の365人のメル友に一齐送『パキッ』…
……はい?」

哀れな携帯。君に恨みはないが、主を誤^{オナ}つたな。

残ったのは真つ二つになった哀れな携帯と思考停止中のソル。
が、暫くすると意識を取り戻し…

「ぎゅぎゅああー……!!??」

きつ…、貴様!!!!俺のケータイを!!俺のLIFEを!!

俺の365人のメル友のアドレスが消えちまったじゃねえか!!!?
?」

こんなもので大騒ぎするとは情けない。

黎なんか携帯自体をそもそも持っていないというのに。

…まあ、それは触れた機械を壊してしまうという黎の能力のせいなの
のだが。

「…一つだけ言うておこう。」

ソルよ！！貴様はそんなものに依存しておるからリア友ができぬのだ！！」

「ぐはっ！！！！！」

ぴしゃりと言い放たれた俺の言葉はソルの心を貫いた。
そしてソルはがくりと崩れ落ちた。

「…理解したならば早々に席につけ。そして我らの売り上げに貢献するがよい。」

「……………」

ソルは頂垂れたまま席に着く。
どうやら本当に友達がいなかったようだ…彼処まで傷つくとは。
ソルは力蕎麦大盛りを頼むと去っていった。

それから20分程度経った。

1時間ずつ…つまりあと10分でメンバーを交代するので、この恥辱から1時間解放され、様々な店を回れる訳だ。

ガララッ

「よくぞ参られた…空席にでも座して待つが良い…」

「空也さん…？」

「はうつ！！？」

よりもよって…黎とキャロンが来るとは…！？
まずい…非常にまずいぞ…

「面白い格好ですね」

「あら、ここもコスプレ喫茶なのかしら？」

…とりあえず手招きで席に着かせ、メニューを置いて立ち去る。
黎はそんな俺の様子を見て首を傾げていたが、メニューに集中した。

男子控え室兼男子更衣室に逃げ込むと、ハウエルがニヤニヤしながら近づいてきた。

「…ぽよ、あの2人を放っておいて良いぽよ？
何か喋ってきたほうが良いんじゃないかぽよ？」

「戯れをほざくな愚か者！！

こ…このような口調であの2人の前に立てるものか！！」

「ふふ…秘策を教えてやるぽよ。」

まず筆談でインフィジカルをかけられた旨を伝えるぽよ。

俺でさえ知ってる魔法、2人はダイヤモンドクラスだからわかる筈ぽよ。」

「成る程…名案であるな。

が、接客はしたのだから、わざわざ醜態を晒す必要はなからう？
貴殿の知り合いの前にその着ぐるみ姿で出ることができるか？」

「……………っ、ははは！！」

「笑うでない！！俺だって喋りたくてこの口調を喋っているわけではないのだ！！」

「ちよっ、ははは…！！

こ、これ以上喋るなぽよ！！わ、笑い死ぬぽよ！！」

腹立たしい奴め…!!

偶然近くに転がっていたソフトバットでハウエルを殴ろうとすると…

『時間になりました。生徒は役割を交代してください。』

時間がやってきた。

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

Battle・45 VS接客（後書き）

次回予告

文化祭で様々な場所を巡る空也達。

しかし、まず目指したのは黎達ダイヤモンドクラス！

次回 Battle・46 VS喫茶“dreamt garden”

「丈短くないか…？」

Battle・46 VS喫茶“dream†garden”

まずはダイヤモンドクラスに行こう。

インフィジカルも解除されたので、これで普通に黎とも話せる筈だ。

「…あ、あー。ハウエル、俺は普通に話せてるか？」

「大丈夫だ。…俺の語尾は大丈夫か？」

返事代わりに親指を立てる。

そして目指すはダイヤモンドクラスだ。

メイド喫茶“dream†garden”。ダイヤモンドクラスの店だ。

…やはり黎もメイド服着てるんだろうか。

黎のメイド服姿だと…提案者は誰だけしからん奴だ嗚呼鼻血が出た。

…コホン、取り乱してしまったな。鼻血を拭って教室に入る。

「お、お帰りなさいませー…、っ、空也さん！！？」

出迎えてくれたのはよりによって黎だった。黎が着ているのはやはりメイド服。

黎の小柄な体に合わせて作られているメイド服だが、スカートの丈短くないか…？

あと胸の部分が全然余っていないので、その部分も大分小さく…やめておこう。

「そつか、空也さん交代だから今回ってるんですね…
あ、今案内します。」

黎の案内にしたがって店内へ。

…先程の俺の案内とは全然違うまともな案内だ…。
次の交代に備えて参考にさせて貰おう…

「う、ご注文があつたらお呼びくださいっ」

黎はメニューを置き、一礼すると去っていった。
しかし、やたら緊張してるっぽいが…？
黎ってこういう系に弱いよなあ…

「ふう……」

黎は今のところ仕事がなく、控え室で一息ついていた。

「すいませーん、注文」

空也の声だ。

「は、はい只今ー!!」

黎は少し躓きながら空也のテーブルに駆け寄る。

空也で練習し自信をつけ、この後の営業を潤滑に行おうとしているのだ。

「えー、ハウエルがカツ丼と小魚の唐揚げとコーラ、デザートにチョコソフト。

俺はビーフグリルローストと小魚のマリネ、ロイヤルミルクティー。あと、ロイヤルパンケーキ」

「は、はい。えーと、ごちゅっ…コホン。ご注文を『覆します』。」

（覆す！？）

「ハウエルさんがコーヒー、紅茶、牛蒡…空也さんが蒸かし芋でいいですね？」

「（本当に覆された…）黎、落ち着け…注文は覆すんじゃない。あと、牛蒡と蒸かし芋はメニューに無いぞ。」

黎はあうう、と情けない声を漏らす。

その様子を見た空也は微笑みながら優しいげに、

「はい、もう1回？」

黎は小さく頷き、息を吸い込み…

「ご注文…を…ご注文を…コホン。ご注文を『繰り返します』！」

黎の苦悩は続く…

しかし、あんなに失敗続きなのに何故接客をやらせるのか…
アレか。ドジッ娘メイド萌えという奴か？

などと考えている傍から向こうで黎がまた注文を『覆して』いる。
まあ本気で怒る奴はいないだろうが…改善すべきだよな…

「いやあゝいい所だな」

「お前はそんなに女好きなのか？」

「そうだぜ？普通、男だったらこんなシャングリラに来たら喜ぶだ
ろ…」

そんなもんなのかね…俺にはいまいち理解できない世界だ。

「…モテる男はこんなじゃ興奮しないってか？」

いつの間にかハウエルは身を乗り出して俺に顔を近づけていた。

「モテたいならまず髪と制服の乱れを正すことだ。」

あと、初対面の人に挨拶がわりにガンくれるのもやめたほうがいい。」

「…髪はアレだ、これ…魔法で染めたから治らないんだよね…
ガンは、まあ、不良時代の癖というか…」

魔法で髪を…？そんな事できるのか？
などと雑談していると、向こうから黎がプレートを持ってやってきた。

「お…お待つ…お待たせしましたあ…！
こ、こちらご注文のり、料理です！」

と、黎の脚が縛れ…

「わっ、とっ、とっ…きゃー！…」

バランスを崩して黎が転けそうになる。
俺は咄嗟に黎の体を支え、メニューの料理を受ける。

「い、ごめんなさい…」

「いや、気にすることない。」

「あううゝ…私ってなんでこんなにそそっかしいんでしょう…」

今に始まった話じゃないから大丈夫だ…と言おうとしたが、
何だか余計に傷付けてしまいそうなのでやめておいた。

「まあ、少なくとも今は大丈夫だ。」

…それを期待して接客させてるんだろうから。」

「……………???な、何の事ですか???」

「……………。。。」

「あ、あの…久城さ、久城さん…」

久城は風紀委員室のソファに脚を組んでふんぞり返っていたが、
2年ダイアモンドクラスの男子生徒に名を呼ばれると、ギロリと睨

み付けた。

「……………何だ」

「ヒツ…い、いえ、あの…」

「…言いたいことがあるならはっきり言えッ!!」

「す、すいません!!あ、あの、2年ダイヤモンドクラスの…」

び、備品がなくなってしまったのでは、補充をお願いしたいと思いまして…」

「…備品?そこから勝手に持っていけ。」

「は、はいっ!!し、失礼しますっ!!」

生徒は怯えながら逃げるように去っていく。

———この様な反応を見るのは何回目だろうか、と久城は思った。あれ以来、誰も彼も久城を恐れて近づかない。

(静かだな…)

学園が文化祭で賑やかな中、風紀委員室は不気味なまでの静けさに包まれていた。

風紀委員室の傍を通る者も皆静かだ…

(…それはそれで良いんだがな…)

しかし、風紀委員室に来る全員があのだ調子では煩わしくてやりきれない。

(…屑共と群れるよりマシか…)

久城の頭を過るのは停学処分になっていた際に送られてきた手紙。

『此度の貴様の起こした下らん騒ぎのお陰で我が社は損害を受けた。世間に対し責任を取るためにも、我が久城家と貴様は今より何の関連も持たぬ。』

久城家代表 久城 東吾と久城 透矢は絶縁する。
今後一切、久城家の名を使うことを禁ずる。』

「……………クソッ!!!」

久城は怒りに任せて机に拳を叩きつけた。
同時に、赤い十字架が妖しく光ったように見えた。

$$\begin{array}{r}
 > i \\
 & 3 \\
 & 2 \\
 & 4 \\
 & 6 \\
 & 0 \\
 \hline
 & 1 \\
 & 5 \\
 & 6 \\
 & 3 \\
 <
 \end{array}$$

B a t t l e ・ 4 6 V S 喫茶“dream + garden”（後書き）

次回予告

文化祭が終わり、利益が出たのだが…

突如、トパーズクラスの金がなくなってしまった！？

犯人はこの中にいる！！…かもしれないし、外にいるかもしれない！！

次回 B a t t l e ・ 4 7 V S 盗難

「俺の灰色の脳細胞がなんとかかんとか…」

Battle・47 VS盗難

6回の交代を行うと、殆どの店は品切れになる。

なので6回の交代で終了となる。当然といえば当然だ。

そして今、6回の交代が行われ、文化祭は終わりを告げた。

「皆さん、お疲れさまでした。」

俺は肉体的疲労より、主に精神的疲労が大きかった。

俺が接客をする度にインフィジカルをかけられ、

その度にあの変態的な台詞を喋らなければいけない。

なので、その度に恥辱による精神的苦痛を強いられていたのだ。

「…なあ、それ何だ？」

ハウエルは俺が抱えているものに興味を示している。

「壺だよ」

何を当然の事を。

「見りゃわかるよ！！だから、何で小脇に壺を抱えて突っ立ってるんだ！？」

「さっき輪投げの店で景品として貰ったんだよ。なんでも、ちょっとした魔法具らしいんだが…」

俺はサーチの眼で壺を見る。が…

—印の—

—術相当—魔法が—け—た壺。
中に—物を封—して—く事—き、
中—印され—は—と出—とが—い。
中には—依魔—ラが宿—る。
破—る事—中—物—解—と—きる。

「相当昔の魔法具らしくてな…掠れてわかんねえ。」

「ん？何の話だ？」

ハウエルはサーチの存在を知らなかったため、会話が微妙に噛み合わない。

まあ、説明は面倒なのでしなかった。

「クラスの売り上げは設備向上などに利用して良いそうです。
売上額の合計は……………ん？」

がちゃがちゃとレジ（らしきもの）を弄っていたルシフェルが突如
フリーズした。

「……………売上金が…、消えました。」

ポーカーフェイスでさらりと告げられたルシフェルの言葉。
その瞬間、クラス全体がルシフェルと同じくフリーズしたのを俺は
確かに感じた。

「……はぁ……………っ！？」

「どういう事だ！！売上金はお前が管理してたんだろ！？」

「俺らの屈辱と恥辱の結晶を！！どうする気だ！？」

「黙ってください」

ピシヤリ。

言い放たれた言葉は教室に響き渡る。

…一瞬は静かになったのだが…

「いやいやいや、これが黙ってられるか!!?」

「そつだそつだ、お前が無くしたんだからな!」

「責任取れよ!!」

騒がしい教室だな…。

「ルシフェル。最後に売り上げを確認したのは何時だ?」

「今が18時ですから…文化祭が終わったのが17時ですね。その1時間前…16時には確認しました。」

つまり、その2時間の間に売り上げが盗まれたわけだ…。

しかし手がかりが少なすぎるな…もう少し手がかりがほしい。

「その時のレジ担当は誰だ?」

「え?16時〜17時…最後のレジ担当はウエンガー…だよな。」

容疑者その1はウエンガー。(16)。

肌の黒い外国人の生徒。しかしファルシオン学園では珍しいことじゃない。

「ちよつ、待てよ！それだけで俺を疑う気か！？」
それに、俺は終了の時にはちゃんとレジの中を確認した！シェリルが証人だ！！」

ウエンガーはシェリルに話を振る。

シェリルは栗色の髪をポニーテールにしている眼鏡をかけた数少ない女子だ。

いつも無表情で何を考えているか全くわからない…

「ええ。確かに私はウエンガーと一緒にレジを確認したわ。
レジの中身はその時あったわ。盗まれたとしたらそれ以降よ。」

「待つてください？

シェリルさん、貴女はレジ担当でも何でもないでしょう。
何故貴女がウエンガーさんと確認したのです？」

む、確かに。流石ルシフェル、鋭いツツコミだ。

「…そんな事知らないわ。ウエンガーに聞いて」

「俺は…ただ単に、なんとなくだよ。」

近くにいたから、こんなにあるぞー、って…」

この2人、怪しいな…共犯の可能性もあるか…？
容疑者その2、シェリル♀（17）。

「それと…先程レジを弄っていた生徒がいましたね。
…それは貴方だ。フライヤさん。」

ルシフェルは男子生徒を指差す。

その先にはフライヤという生徒がいる。

髪を染めており、どうも軽い印象を受ける…

「お、俺え！？ま、待ってくれよ、俺はただ、見てみたかったから…
そ、そう言う代表こそどうなんだよ！？じ、実は代表が盗ったんじ
やねえか！？」

「失敬な。僕は終了時には文化祭を見学していました。
最初に盗難を見つけたのも僕です。

僕が盗ったというなら犯人探しなど僕が仕組んだ茶番になってしま
う。

僕は其ほど悪趣味ではないし、
貴殿方もそんな茶番に踊らされるほど愚かではないでしょう
？」

生徒を挑発して心を掴む辺り、ホントルシフェルって底知れないわ
…
それとフライヤはやたら動揺していたな…怪しい。

容疑者その3はフライヤ。

…一応、容疑者その4としてルシフェル。

さてさて、どうなるか…

ウエンガーはシェリルが証人になっているが共犯の恐れあり。

シェリルはウエンガーの犯行に協力している可能性あり。

フライヤは無断でレジを弄り、指摘されしどろもどろ。

ルシフェルは…文化祭を見学していた証拠なし。

俺の灰色の脳細胞がなんとかか…して犯人を導き出せる…のか…？

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

Battle・47 VS盗難（後書き）

次回予告

4人の容疑者の中から犯人を見つけ出す。
犯人は誰なのか！？そして売上金の行方は！？

次回 Battle・48 VS解決

「犯人は…お前だ！！」

Battle・48 VS 解決

仮説なら幾らでも立てられる…

証拠、なんとか証拠を見つけなくては…。

犯人は2時間の間に売上金全てを盗み、どこかに隠している。自分のロッカーに隠すなんて隠しかたはしないはず。なら何処に隠した…？

「誰か目撃者はいないのか？」

クラス全員が首を横に振る。

「ま、待てよ。空也、お、お前も怪しいぞ！」

フライヤが唐突に俺に文句をつけた。

このチャラ男め…

「何をバカな…俺はレジになど一切触れていないぞ。」

「い、いや、そ、そのあからさまに怪しい壺は何なんだ…？」

「中を見てみるか？何も入ってないぞ？」

俺は『親切にも』壺の中身を見せてやる。

フライヤ…と、容疑者3名は壺を覗きこむ。

「…暗すぎて何も見えないぜ」

「中に売上金が入っていてもわからないわね」

「や、やっぱその中、な、何か入ってんじゃないのか…？」

「これ…魔法具ですよ…何故こんなものを…？」

こ、こいつら…俺を疑うだと…！？100年早いわ…！
とにかく、早く真犯人を見つけなくては俺が危ない。
何か証拠…何か証拠…！

……………。

駄目だ…思い浮かばない…少し頭を冷やす必要があるか…。

「…ちょっと廊下で考えてくる」

ガラガラガラ…

廊下に出ると、ひんやりした空気に包まれていた。
もう9月だからな…秋らしい気温が漂っている…。

バシャバシャと水道水で顔を洗う。

正面の鏡には、俺の顔と背後の廊下が写っている。

ふと、水道近くのゴミ箱を見るとサーチで魔法を見た時に似た感覚

を感じた。

妙な感覚の発信源はゴミ箱の中のくしゃくしゃに丸められた紙だ。
広げてみると、しわくちゃの紙に『いちおくえん』と書かれている。

紙の端には焦げたような黒い跡が残っている。燃やそうとしたのか
もしれない。

だが誰が何のためにこんなものを燃やそうとしたんだ？

待てよ…何かが引っ掛かる…この紙は…

あ！思い出したぞ…だがなんでこれがこんなところに？

俺は外の夕陽にくしゃくしゃの紙を翳してみた。

「！！！！」

…ほお…なるほど…」

俺のサーチが発動したって事は…これは…魔法陣か…
焦げた紙にこの魔法陣。

謎は…解けた！

「謎が解けた!？」

「そう。まず犯人は魔法を使って売上金を盗み出したんだ。それには【空間移動魔法】が必要…。」

「空間移動魔法、って…」

「——イプシリアスか。」

「正解———と言いたいところだが、犯人が使ったのはそれじゃない。」

教室がざわつき出す。

フライヤ達が狼狽えるなか、シェリル、ルシフェルは無表情を崩さない。

「犯人が使ったのは【空間交換魔法】。習っている生徒もいるはずだ。」

「あ、イプサイアスだ!」

女子生徒がクイズ番組で正解を答えた時の様に楽しげに発言した。そこは俺に言わせて欲しかったんだがな…まあいい。

「そう。犯人がイプサイアスを使った証拠もある。

…それがこれだ。」

俺はポケットから先程の紙を取り出す。

『いちおくえん』と書かれた端の焦げた紙…これが何よりの証拠だ。

「…魔法陣は書かれていないようだけど。
何故それが証拠になるのかしら？」

シェリルが腕を組んだまま俺に鋭い目線を向けている。声は非常に無感情だ。

「いや。魔法陣は確かにここに書かれている。」

「……………？」

「誰か、ブラックライト持ってないか。」

とはいっても普通誰も持ってない。

しかし…俺の推理が正しければ、シェリルが持っている。

「シェリル、持ってないか？」

「……………、持ってるわ。」

シェリルはペンケースからペンを取り出してきた。

ペンのノック部先端にライトとスイッチが付いている。

スイッチを押すとブラックライトが点灯した。

ブラックライトで紙を照らす。

———すると、紙に魔法陣が浮かび上がった。

イプサイアス

上級空間交換魔法。

魔法陣（転送元）の上の物体をもう1つの魔法陣（転送先）の上に転送する魔法。

新たに魔法陣（転送先）を書くとは以前書いた魔法陣は消される等、使い勝手が悪いのでイプシリアスの方を使う者が多い。

「えっ！！？」

「な、何だ！？」

「…やっぱ、秘密ペンか。」

ライトで浮かび上がるインクを使ったペンだ。これで魔法陣を書いたわけだな…。」

「…それだけで盗んだというのは早計よ。」

犯人がそれを書いたとしても、売上金を転送したという証拠がないわ。」

その通り。

犯行を証明するにはもう1つ証拠が必要だった。

その証拠は…

「この紙だ。」

この紙は…俺がレジに入れたものだ。

…客の子供が俺にくれたんでな。記念に入れておいたんだ。

それが外に出ているということはレジの金ごと持ち出されたということ。

さらに魔法陣が書かれ、端には燃やそうとした跡まである。

…間違いなく、犯人はこの紙を使った。その後、証拠隠滅に失敗している！」

「…しかし、それでは犯人は特定できないのでは？」

確かにルシフェルの言う通り、それだけでは犯人は特定できない。だが…犯人は証拠隠滅しようとして自爆したのだ。

「鍵は端の焦げ痕だ。

これは魔法で燃やそうとしたもの……『ではない。』」

魔法で燃やしたならば完全に燃え尽きる筈。魔法を使えるならその方が確実だ。

焦げただけで燃え尽きてはいなかったため、これはライターか何かで燃やそうとして失敗したのだろう。

「つまり犯人は炎魔法を使えない、且つ空間交換魔法を使える…この条件に当てはまるのが即ち犯人ということだ。」

「それって…」

「犯人は…お前だ、シェリル。」

シェリルはちょうど炎魔法を習っておらず、空間交換魔法を習っている。

しかも都合な事に…調べたところこのクラスで条件に当てはまるのはシェリル1人。

他のクラスの生徒が犯人という可能性も無きにしも非ずだが…

「見事な推理ね。……………その通りよ。」

告白したので良しとする。

……正直、告白しなかったらヤバかったのだが…

「…あの時、風紀委員が通らなければ完璧だったのにね。

折角燃やそうとしたのに、慌てて消してゴミ箱に入れてしまっ…

念のための秘密ペンが役に立つと思ったのだけど…甘かったわね。」

シェリルは目を伏せた。

クラス全員が責めるような眼差しを向けていた。

「……………。」

シェリルは下を向いたまま何も喋らなかった。

シェリルは風紀委員室に連行された。
何らかの罰が下されたであろう。

しかし、これからもシェリルの学園生活は続く。
俺のこの行動がシェリルの学園生活を壊すことになってしまつかもしれない。

しかしシェリルの罪は罪だ。それは間違いない。
しかし、なんとというか、この………罪悪感が残っていた。

もやもやとした感情を抱えて歩いていると向こうから見覚えのある男が歩いてきた。

白髪、灰色の制服…風紀委員長の久城 透矢だった。

すれ違い様に久城は俺に話しかけた。

「トパーズクラスのシェリル・チェンバース…学園を去ったそうだ。」

「な…!？」

「クク…罪と罰って怖えよなあ…」

久城はそのまま俺の横を通り過ぎていった。
久城の首から提げられた赤い十字架が揺れているのが僅かに見えた。

$$\begin{array}{r}
 > \\
 & i \\
 & 3 \\
 & 2 \\
 & 4 \\
 & 6 \\
 & 0 \\
 \hline
 & 1 \\
 & 5 \\
 & 6 \\
 & 3 \\
 & <
 \end{array}$$

Battle・48 VS 解決（後書き）

次回予告

空也は試験室に訪れていた。

第5試験の内容は捻れ魔獣フレシヌスの討伐。

魔物よりも強力な魔獣相手に空也達はどう戦うのか…？

次回 Battle・49 Battle・VSフレシヌス（前編）

「こんな気持ち悪い魔物始めて見たぜ…」

Battle・49 VSフレッシュス（前編）

シェリルは唐突に学園を去った。

しかし、その理由はアジャーにいるシェリルの親が病気に倒れたためで、

シェリルの友人が催してくれた送迎会も賑やかに執り行われたそう
だ。

久城のヤツ適当な事ほざきやがって…。

マジで自責の念に押し潰される所だった。

で、今日は久しぶりに試験室に来ていた。

第5試験の内容は魔獣フレッシュスの討伐らしい。

試験経験者（黒髪の美少女Rの事）が近くにいると実に便利だ。

「では、第5試験を始めます。

第5試験は魔獣フレッシュスの討伐…準備はよろしいですか？」

「はい」

「ちょっと待って下さい、靴紐が…」

「では、試験開始！！」

「おい！？」

くそ、靴紐がほどけてるのに！酷い連中だ…！
靴紐を結んでいる最中に試験室に魔物が放たれた。

「うゝわゝ…こんな気持ち悪い魔物初めて見たぜ」

「捻れ魔獣…フレッシュ…ですね。」

靴紐を結ぶ為屈んでいて魔獣の姿は見えない。
結び終わり、そちらを見ると…

なんとも形容しがたい、沈んだ緑色と肌色の醜い魔獣。

緑色の右腕は2mはあろうかという程異常に肥大化し、爪は獣のよう
に鋭い。

肌色の左腕は人間の腕と同じ形状をしているが腕の表面には青アザ
が大量にある。

さらに左腕は通常の半分程度の長さしかなく、奇妙に捻れている。

左腕以外緑色の筋骨隆々の上半身と下半身を繋ぐのは細い綱状の脊
椎のみ。

下半身は人間の足を大量に繋げた肌色の蛸のような形状をしている。

フレッシュスの顔面は焼け爛れており、左目が異常に巨大化し顔の半
分を占めている。

右目があるべき場所には大量の口があり、歯並びの悪い歯をちらつ
かせている。

鼻はどうやら無いようで、鼻のあるべき場所にはやはり大量の口が
ある。

本来口があるべき場所には触手のようなものがうねっている。

大量の口からは異臭が漂うピンク色の肉片のような粘液を垂れ流していて、
全身がその粘液で包まれており全身隈無く異臭を放っている。

「ウガガ…」

フレッシュ

捻れ魔獣と呼ばれる異形の魔獣。
魔獣の中では中くらいの強さ。
しかしその見た目、粘液の異臭などから戦意喪失するものも少なくない。

右腕の驚異的な怪力や伸縮自在の左腕などで戦う。

ほう…あんな見た目だが強いのか…
フレッシュは以前戦ったアルナスより知恵がないようで、
此方の様子を伺うこと無くいきなり襲いかかって来た。

「ウガア！！」

フレッシュスはハウエルを巨大な右腕で叩き潰そうとした…が、ハウエルは難なく回避し逆に右腕を斬りつけた。

しかし、フレッシュスは全く堪えていない。

避けたハウエルを1つしかない目で睨み付けると、口から粘液を飛ばした。

「うおっ、危ねえ！汚ねえ！！」

粘液に当たっても皮膚が溶けたりはしないようだが…とにかく臭い。当たったら戦意喪失は当然だろう。

「blood summons…クロー」

ナイフで指を切り、鉤爪を造り出す。

誤ってフレッシュスに触れてしまわぬよう、爪部分を長めにする。

「炎よ…我が刀身に宿りて敵を討て！！」

ハウエルは魔法剣に炎を灯す。

この粘液は炎で焼けるかもしれないな。

フレシヌスは巨大な右腕で俺達を薙ぎ払おうとしたが俺達は飛び上がって回避し、ハウエルは剣を、俺は鉤爪をフレシヌスに突き刺した。

これには流石に堪えたようで、グオオオ、と雄叫びをあげ身を震わせる、

ハウエルを振り落とし、俺を伸縮する左腕で捕らえた。

「空也さん！」

「んのやろ……」

フレシヌスは捕らえた俺を自らの顔の近くに引寄せると、大量の口を一斉に開く。

俺はナイフで更に血を足し、鉤爪の血も合わせて……

「——キモいんだよ！ blood summons、スピア！」

槍を造り出し、フレシヌスに突き刺した。

フレシヌスは悲鳴を上げながら俺を解放し、右腕で槍を引き抜いた。

その隙を突いてハウエルの剣がフレシヌスの上半身と下半身を繋ぐ脊椎を両断した。

「ウガ——」

フレッシュは大きく目を見開き絶命した——かに見えた。
ベシヤリ、と粘液にまみれた上半身が地に落ちた。

だが上半身は両腕で体を支え起き上がり、再び俺達に敵意の眼差しを向けた。

「ま、まだ生きてんのかよ!？」

人間の足を蛸状に連結させた下半身は動く気配もない…此方は死んでいるのだろう。

上半身——生き残ったフレッシュ——は下半身を掴み上げた。

そして左腕で下半身をぐるぐる巻きにして左腕に固定すると、ぶるんぶるんとしなる左腕を振り回した。

武器として使えると確信したフレッシュは威嚇の叫び声を上げると左腕を振り上げ、

俺達目掛けて降り下ろした。

回避には成功したものの、威力は相当…当たれば危険だ…。
ここは慎重に行くとするか…

$$\begin{array}{r}
 > \\
 & i \\
 & 3 \\
 & 2 \\
 & 4 \\
 & 6 \\
 & 0 \\
 \hline
 & 1 \\
 & 5 \\
 & 6 \\
 & 3 \\
 <
 \end{array}$$

B a t t l e ・ 4 9 V S フレシヌス（前編）（後書き）

次回予告

フレシヌスとの戦いが続く空也。

一方、空也と黎の住む寮では新たな脅威が胎動していた……！！

次回 B a t t l e ・ 5 0 V S フレシヌス（後編）

「我が成すべき事…それは…」

Battle・50 VSフレッシュス（後編）

フレッシュスは左腕に括りつけた下半身を明確に武器として使用している。

強力な力を持つ右腕に加え新たな脅威だ。

「左腕を切り落とす！空也、ルシフェル、サポート頼む！」

「わーった」

「わかりました。攻撃魔法は使えませんが…」

ん…？

ルシフェルはアメジスト生徒との戦いの時、攻撃魔法を使ってなかったか…？

相手の周囲に大量の炎を展開し囲む魔法。

あれを使えば大分有利だと思ったんだが…。

「我が言霊に応え…煌めけ、光よ。」

ルシフェルが魔法を発動させ、思考が遮られる。強烈な光が視界を塞いだ。

シャイナル

中級補助魔法。

光属性の魔法。 強烈な光を発生させ視界を塞ぐ魔法。

特定の相手の視界は確保する事もできる。

で、何で俺の視界は確保されていない!?

「すみません、空也さんの視界を確保するだけの技能はないのです。

」

仕方がない… blood summonsで血を使ってサングラス
を造り出し装着。

ギリギリハウエル、フレッシュスの影は見える。

フレッシュスは混乱から左腕を凄い勢いで振り回している。

これでは迂闊に近づけない…。

ハウエルも俺と同様に動けずにいる。 左腕を振り回す速度は相当…
おそらく、ハウエルでは対応できない。 なら俺が止めるしかないか
…!

「グオオオ、ガアアアア！」

左腕を止めるのは簡単。フレシヌス全体の動きを止めればいい。
blood summons…アロー！

投げた矢が空を切ってフレシヌスの体に向かう。

矢はフレシヌスの体に突き刺さったが、左腕の激しい動きは止まらない。

この程度では大して堪えていないようだ…ならこっちも本気でやっ
てやろう！

白金の短剣で掌を強く斬りつける。血が大量に流れた。

鎮痛効果を付加したナイフとはいえ、これだけ深く斬れば相当痛い。
この大量の血を使って…

「blood summons…サイクロン！
blood summons…サウザンドアロー！」

以前俺の分身が使っていた技だ。

大量の血を渦状に高速回転させ、その遠心力を使って大量の矢を放
つ大技…。

相当強力なのだが…血を大量に使う為、少し危険でもある。

大量の矢がフレシヌスに突き刺さった。

ガアアア、と雄叫びをあげ刺さった矢を右腕で引き抜いている。
相変わらず光は止まず、フレシヌスはハウエルの接近に気づかず…

左腕を切り落とされた。

「ガアアアアア！」

「とどめだ…！」

ハウエルの剣を炎が包む。

ハウエルは剣を右手から左手に持ち替え、右手から炎をフレシヌスの目に投げつけた。

目を焼き潰され、それでも戦おうとフレシヌスは右腕を振り回す。

ハウエルはフレシヌスの巨大な右腕を踏み台にしてフレシヌスの頭上まで飛び上がり…

——真一文字に一閃した。

「…そこまで！試験終了です。」

「お疲れさまでした皆さん♪」

黎は紅茶を出した。

「なんで俺の寮に集合すんだよ？」

試験が終了した後、何故かハウエル、ルシフェルが俺の寮に来た。

「暇だったからな」

「ハウエルさんに誘われたので…」

で、何の用なんだよ…。

ハウエルは紅茶を啜っていたが、思い出したように立ち上がった。そのまま居間の中をウロウロと歩き回り物色している。

特に面白いものがなかったのか、居間から離れていった。

放っておけば何をされるかわかったものではないため、取りあえず追う。

扉を開き、中に入っていくハウエル。俺の部屋だ。

「ほう…なるほど…」

「いや、お前何しに来たんだよ…」

ハウエルは俺の机の引き出しを勝手に開ける。
中に入っているのは綺麗に整えられた教科書類。使わないから綺麗だ。

2段目の引き出しを開く。何も入っていない。

3段目は鍵つきの引き出し。ハウエルはガタガタと開こうとしていたがやめた。

「鍵をくれ」

「君はバカなのか？」

ハウエルは不満そうに部屋を出ていった。
そして隣の部屋に入ろうとしたが…

「そこは黎の部屋だ！入んじゃねえ！」

ゴキリ

「ぐがあー!!」

ハウエルの首を捻って阻止した。

『どうしたんですか空也さん？』

「いや、何でもない！」

「おーいてえ」

ハウエルは首を擦りながら廊下を歩く。
暫く歩くと窓の近くに壺が飾ってある。学園祭で貰ったものだ。

「この壺凄いな」

「お前は何をしに来たんだよ！」

ハウエルは壺にベタベタと触っていたかと思うと

「じゃ帰るわ」

「お邪魔しました」

「お前らホントに何しに来たんだよ!？」

あいつら…かつて無いほど意味不明な行動だ…どんだけ暇なんだよ…?

いや、寮の自室の鍵を落として入れないことを伝え忘れちゃった。
これじゃ俺の行動は完全に変人じゃないか。
魔法でコピーして作るとか教師が言っただけ、どのくらいかるんだ？

やはり【憑依魔神ゼラ】はあの壺の中でしたね。
また日を改めて封印を破るとしましょう…。

全ては邪神の御言葉の通りに…。

忌まわしき壺に納められて幾年経ったか。
だが…我が成すべき事は明確に覚えておる。
我が成すべき事…それは…

…。
…。
…。

あ、あれ、思い出せない！？
くっ、忌まわしき封印の期間があまりに永すぎたのか！？
我が成すべき事…我が成すべき事…。
そうだ、ヤツを殺すこと！ヤツを殺すことこそが我が使命！

クックック…待っておれよ…我はいずれこの忌まわしき封印を破り、
貴様を殺す！
というわけで…誰か、この忌まわしき壺を壊してくれ！

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

Battle・50 VSフレッシュス（後編）（後書き）

次回予告

新章突入！

空也のミスにより放たれた古の魔神^{いにしえ}。

それは少しずつ、しかし着実に学園を蝕んでゆく…。

学園の危機に、空也達はどう戦うのか。

そして魔神達の使命の中に、空也と黎が追いつける男の影が！？

次回 Battle・51 VS窓

「俺が戦ってきた中で間違いなく最強クラスだ…」

Battle・51 VS窓

一月が流れ、10月になった。

俺の誕生日があったような気もするが、誰も気付いていなかったの
で割愛する。

……いかん、泣きそうだ。

「ふう……くう……んうう……んぐぐぐぐう……！」
ううう……ふぬぬ……んう……！」

朝。

淡いピンク色のパジャマを着た黎が窓を開けようと苦戦している。
かなり力を入れている。近くに壺が飾られているので実に危なっか
しい……。

「俺がやるよ。」

「あつ……ありがとうございます……。」

風通しが悪いので……開けようとしたんですけど……すっごく硬い

んです。

黎の匙加減は正直宛てにならない。

こんなもの、簡単に……

「ふっ……ぐ……ぬおお!? 何だこれ……めっちゃ硬え……!」

「そうでしょう？ 私も頑張ったんですけど……手が痛いです……」

黎の小さな手を見ると窓枠の痕がついてしまっていた。

しかし……この窓の硬さは異常だぞ……！

俺はこれまで数々の強敵と戦ってきたが……

この窓は俺が戦ってきた中で間違いなく最強クラスだ……！

こうなれば……この身が砕け散るうとも、この窓を開く！
俺に力を貸してくれエエエー！！！！！！！！

ガラツ

激戦の末、無事窓は開いた。

しかし、その瞬間俺は見た。勢いよく開いた窓に巻き込まれる俺の指の姿を。

そして、その脇で地に吸い込まれていく豪華な壺の姿を……。

ガチャン！
ピシャン！

「きゃっ！？」

「ぐぎゃあーーーー！？指がああーーーー！」

「だ、大丈夫ですか空也さん！？」

いつてえーーーー！指取れた指！
いててて……しかも壺が割れちまった……。勿体ない……。

ま、まあいい。嫌な事があつたらその分良い事がある、が俺の信条だ。
き、きつと今日は良い事があるだろう……。……そうであつてくれ。

しかしそんな空也の願いは虚しく消える事になった。
時は少し遡り、昨日の学園長室。
そこにいたのは灰色のローブに身を包み長い白髭を蓄えた学園長に、

緑色の長髪をした若い男エルフの教師、
それと紅色の短髪に眼鏡が特徴的な女エルフ、アルペジオン・フェ
ンリツヒだ。

「な、何い……！？それはまことか？」

学園長は驚愕と怒りの表情で報告に来た若いエルフを見据える。
エルフがはい、と小さく頷くと、学園長は烈火のごとく怒りだした。

「ばああつかもおおおん！！何をやつとるかあああ！！
よいか！あの壺はただの壺ではないのだぞ！！

儂が遙か昔に封じた……『憑依魔神ゼラ』があの中に封じられてお
るのだ！

それを学園祭の景品にだと！？何を考えておる！！
もし壺を持った生徒がそれを割りでもしたら……！！」

「学園長、お体に障るかと。」

口を挟んだのはアルペジオン・フェンリツヒ。特殊能力授業の教師
だ。

フェンリツヒは学園長と長い付き合いを持つ秘書。

この場にはブレーキ役として相応しいだろう。……が……

「お前は黙っておれ！この馬鹿者の肩を持って何の得もなかつ
！」

フェンリツヒはやれやれ、と溜め息をつくと言園長室から出ていった。

若いエルフからすれば助けがいなくなり最悪の状況だろう。

そもそも事の発端はこのエルフが学園祭の景品として、無断で壺を持ち出したことが原因なのだが……。

「もし壺を持った生徒がそれを割りでもしたらどうなるか……それが解らぬほど愚かではあるまい……！」

「学園長」

いつの間にか戻ってきていたフェンリツヒ。手には何故か皿が載せられていた。

皿の上にはこれまた何故かプリンが載っている……。

「3時のおやつ時間です。」

「……む……。」

学園長の机にプリンの皿が置かれた。

学園長の表情は晴れなかったが、ムスツとした表情のまま凄いで食べ始めた。

呆然とした表情のエルフにフェンリツヒが耳打ちする。

（今のうちに謝ってしまいなさい。）

「（わ、わかりました）が、学園長。この度は誠に申し訳ございませんでした！」

学園長はプリンを貪りながら目だけエルフに向ける。

「…壺を持った生徒を探しに行け。そして壺を儂の元に持ってこい。それで今回の件はなかったことにしてやろう。」

先程までの勢いは何処にいったのか。

エルフは再び呆然としていたが、フェンリツヒに連れられ学園長室を後にした。

「あの人の扱いなんてチョロいものよ。」

「助かりました。……フェンリツヒさんって、学園長とどういう関係なんですか？」

「秘密。いい女に秘密は付き物よ。」

それより壺の件、くれぐれもよろしくね。……また封印なんて面倒は嫌だわ……。」「

その翌日、空也によって壺は割られてしまったのだった。

ふ…っ、此度の持ち主は余程の愚か者らしいな。あっさりと我を解放するとは…

だが感謝しよう。これでようやくヤツを殺せる…。

ふふ、覚悟するがいい。我が同胞を傷つけ、次々に封印した大悪人め。

…はて……奴の名前は何だったか？

セ……ん？ル……セ、ル……？まずい、忘れた！

くっ……仕方がないな。解らないなら全ての生命を皆殺しにするまで。

そうすればセル……？とやらも死ぬのみだ！

覚悟せよ、無数の生命どもよ……古の魔神、憑依魔神セラが今ここに蘇ったぞ！！

ハッハッハ、ハーッハッハッハッハ……グ、ゴホッ……噎せた。

>	
i	
3	
2	
4	
6	
0	
1	
5	
6	
3	
<	

B a t t l e ・ 5 1 V S 窓（後書き）

次回予告

ある日、空也と黎は学園長室に呼ばれた。
同時に、いまいち緊張感に欠ける魔神ゼラによる攻撃が始まった。
そして『セル』とは一体…？

次回 B a t t l e ・ 5 2 V S 黒猫

「ねこさん…？」

「猫ではない！」

Battle・52 VS黒猫

壺を割った翌日。

俺は黎とともに学園長室に呼ばれた。

「な、何かご用でしょうか……？」

「ああ、警戒せずともよい……今日君らと呼んだのは壺の件で……」

さすがは学園長……威厳が半端じゃない。

その長い髭とかがそう感じさせるのだろうか。

しかし、壺？ 割っちゃったんだが。

「空也君。君が学園祭で獲得した景品の壺、すまないがあれを返してもらいたい。」

「あー……とても返せる状態じゃないんですけど……それでよければ。」

「何……？」

ま、まさか………！」

「ハイ、割っちゃいました、サーセン」

沈黙。そして、

「ばぁあつかもおおおん！！何て事をしてくれたのだぁ！！」

「ひえ！？」

「騒がしいですよ学園長！今度はなんですか！？」

学園長が突然大声で怒鳴ったかと思うと、奥の扉から誰か出てきた。出てきたのは見慣れた教師、アルペジオン・フェンリツヒ。特殊能力解放は終了したのだが、サボるために未だに授業をとっている。

「あら、あなた達。まさか壺の持ち主って……」

「空也さんです。」

「ほう……で、割ったのね。」

「あ、ああ……。」

俺が改めて壺を割った旨を伝えると、学園長がまた怒号を飛ばした。何故俺がキレられるんだ……。

「そもそも悪いのは壺を景品にした学園側でしょう！俺が何度も怒鳴られる覚えはない！」

「壺を割ったのは確かだろう！」

「一度俺の手元に來た壺を俺がどう扱おうが自由でしょう！」

暫く沈黙、睨み合いが続く。

この爺、威厳があるかと思ってたがただのヒステリックジジイだ……！

「2人とも、私達は外に出ていいかしら？」

さつきからどつちかが怒鳴る度に黎ちゃんがビクビクしてるのよね。

「

あ。やっちゃった……。

黎は暴露されたことでちょっと恥ずかしがっているが否定はしなかった。

「すまん黎、出ていてくれ。」

「おい若造、それは儂が決める事だ。」

「では失礼します。学園長、ごゆっくり。」

「フェンリッヒ！勝手なことを……！」

ボタン

この2人、仲良いな。昔馴染みのだろうか……。

「……まあよい。どちらが悪いかなど今はどうでもよいことだ……。今は事態の收拾が最優先。お主も協力せい。」

「協力は構わないんですが……壺が割れたら何がまずいんですか？」

さつきから大騒ぎしてるようだが、まるで意味がわからない。学園長お気に入り壺を割ったからキレているのかと思ったが、違うようだ。

「ふむ、そういえば話していなかったな。よく聞け……。」

「あの壺は一体何なんでしょうか……？」

「あの壺はね……封印の壺という魔法具なのよ。
中に魔力を封印できる壺で……あの中には48年前から『憑依魔神
ゼラ』がいた。」

黎は頷きながら聴いている。
フエンリツヒはそのまま続けた。

「ゼラは大変強力な魔力、そして危険な破壊衝動の持ち主。
48年前……ファルシオン学園にゼラが現れ、旧校舎を破壊したの。
」

「もしかして、旧校舎がボロボロなのって……。」
「そう。48年前、ゼラが破壊したの。」

衝撃的な事実だった。
黎が以前から気になっていた旧校舎中破の真実としては実に納得が
いく。

「そこで学園長と私を含めた教師陣がゼラと戦い……なんとか壺に
封じたのよ。」

「魔力を、ですか……。でも、それが解放されてもゼラはいない筈
ですよね。
魔力を封じたのだから、ゼラもその時倒したのでは……？」

「いいえ、封じたのはゼラそのものよ。」

「え……それってどういう事ですか？」

フェンリツヒは缶コーヒーを取り出して一口啜り、続けた。

「ゼラは物体に憑依して操る能力を持っているの。
そしてゼラは実体がない。だから何かに憑依していないと力が使えないの。」

その実体のないゼラを封じていたのが封印の壺。

それが割れたから、ゼラが解放されてしまったわね。」

「……………ヤドカリみたいですね。」

突然の黎の発言にフェンリツヒは飲んでいた缶コーヒーを吹き出しそうになった。

「……………そこ！？」

「あと、フェンリツヒ先生って意外と歳……………」

「何か言ったかしら？」

「フェンリツヒ先生って」

「何か言ったかしら？」

「……いえ、何も言っていないです……。」

「そんな事言つてられるのも今のうちだけよ。貴女もいずれアラ還になるのよ。」

……ちなみに、黎は現在15598721歳。アラ還どころの騒ぎではない。

空也は36988178歳。神の年齢は人間やエルフとは6つほど桁が違う。

黎は人間やエルフに換算すると10歳〜11歳。空也は17歳ほどである。

「……そこで、諸君らに協力してもらいたい。」

「何を……。」

「ゼラはあらゆる物体に憑依できる。」

……聞いた話によると、お主はサーチという魔法が使えるらしいな。その魔法を活かし、ゼラを発見してほしい。そこからは我ら教師が

対応する。」

「わかりました。……もう帰ってもいいですか？」

「構わん。」

「失礼します。爺さん」

「とつとと帰れ若僧が。」

その日の事。

保健委員の仕事が長くなり、黎は1人で帰っていた。

そんな黎の視界に何か動くものが写った。

「ねこさん………?」

黎が小走りで追うとそれは黒猫だった。

黒猫は黎に気付くと、一目散に逃げていった。

「あ、待つて……！」

「にゃー（何故追ってくる！？）」

黒猫——に宿ったゼラ——は逃げ、黎が追う。
おかしな追跡劇はゼラが森で立ち止まり、終了した。

「はあ、はあ……ねこさん、魔力が変……あなた、何者……？」

「にゃーにゃーにゃー（ふ……知りたくば教えてやる。」

我は48年の時を超え蘇った……憑依魔神ゼラ！恐れ戦くが良い、人間め！）」

しかし、猫に憑依したゼラの言葉は黎に通じない。

「あ……もしかして、ケット・シー？」

猫の魔物なら魔力がちょっと変でもおかしくないか……。

……追ってきて損しちゃった。」

「にゃーにゃー（違う！我は猫ではない！）」

「ん……どうしたの？何かあったの……？」

黎は黒猫に歩み寄り、抱き上げた。

ゼラは激しく抵抗する。

「にゃにゃー！（おい貴様！離せ！離すんだ！離さないと引つ掻くぞ！ー）」

バリッ

「痛っ！」

引つ掻かれた黎の手から血が滲んだ。
しかし黎は怒るでもなく……

「あ……ご、ごめんね。嫌だったかな……」

「にゃにゃー（あ、い、いや、そういうわけでは……すまん。つて、そうではない！我は憑依魔神ゼラ！さあ、戦け人間め！）」

ゼラは毛を逆立て、莫大な魔力を解放する。

流石に黎もおかしいと気付いたようで、臨戦態勢に入った。

「にゃー（ほう……貴様、なかなかやるようだな……。）」

一流の魔術師は相手の魔力で強敵か否かを判断できるという。
今ここに、一流の魔術師同士の戦いが幕を開けた……。

> i
3
2
4
6
0
—
1
5
6
3
<

B a t t l e ・ 5 2 V S 黒猫（後書き）

次回予告

始まった黎とゼラの戦い。

拮抗する強力な魔力、勝つのはどちらか…。

次回 B a t t l e ・ 5 3 V S ゼラ

「……ど……？」

Battle・53 VSゼラ（前書き）

最近、黎の萌えキャラ化が半端無いけどまあいつか

Battle・53 VSゼラ

「にゃー！（くらえ！インディグレード！）」

黎の頭上に魔法の雷が落ちる。

が、雷は黎に当たる直前で弾かれた。

（ほう、障壁か。やるな、この小娘が……）

「あなたは誰ですか？ねこさんの中に宿っているんですか……？」

黎は無詠唱で翻訳魔法を発動させた。

黎の魔力ならば生徒手帳の翻訳魔法を上回る魔法が使える。

つまり、猫の言葉も翻訳できるのだ。

「見抜いたか……我は憑依魔神ゼラ！恐れ戦くが良い、人間め！」

「ゼラ……！？壺の中から解放された、ゼラ……？」

「ようやく言葉が通じたな。もっと早く翻訳魔法を使っておけっ！」

「あ、はい、ごめんなさい……。」

「わかればよろしい。……って、違う！くらえ、フェリルグレード……」

ゼラは身体中から強烈な吹雪を飛ばす。
吹雪の中には尖った雹も含まれていて極めて危険だ。
が、黎の障壁は雹を軽々と跳ね返した。

「ふ……甘い小娘め。」

「……！？さ、寒……っ」

「障壁は全てを遮断するわけではない。それでは息ができなくなるからな。」

「気温を極限まで下げれば当然貴様は……死ぬ。」

ゼラの魔法により辺りは銀世界となっている。

普通の制服しか着ていない黎にとっては耐えがたい寒さだ。

「でも、炎を使えば……！」

黎は自分の周囲に炎を出現させた。

吹雪の寒さはこれで緩和できる……が……。

「——掛かったな。」

「え………？」

「凍てつけ。フェリルバースト！」

ゼラは黎の展開した炎めがけて氷の結晶を投げつけた。

ゼラの狙いは反属性の反発による大爆発で黎を手っ取り早く殺すこと。

氷が炎に迫る……………。

しかし、そんな狙いに気付かない黎ではなかった。

「イプサイアス！」

「何！？」

黎は魔法を駆使して一瞬で2箇所魔法陣を書き上げ、その位置を入れ換えた。

入れ替えたのは……黎の立ち位置とゼラの立ち位置。

入れ替わったゼラの周りには炎。その炎と、ゼラ自信が飛ばした氷が――

――接触・反発し、灰色の大爆発を起こした。

「う……。」「

十分に離れた黎のところにも爆風が来るほどだ。
中心にいたゼラへのダメージは計り知れない。

しかし、爆風の中から黒い翼を生やした黒猫が飛び出した。

ゼラは大分傷を負っている。

空中で大量の魔力を解放し……………

「消え失せる小娘！禁術……メテオ！」

ぽてっ、と落下した。

見たところ、猫の体から出ていったようだ。

しかし、魔法は発動した。

空から大量の隕石が黎めがけて降り注ぐ。

しかし黎はあくまで冷静だ。

「アポカリプス！」

黎は禁術を除く魔法の中で最強の魔法、アポカリプスを発動させた。
灰色の大爆発が空を覆い、ゼラの放った禁術メテオを全て消し飛ばした。

「ふう……。あ、ねこさん、大丈夫！？」

黎はゼラに宿られていた猫に駆け寄った。
大分弱ってはいるが、幸いまだ息はあるようだ。

「ごめんね、今治してあげるから……。」

黎は治癒魔法で猫を治療する。

猫は暫く大人しく治療を受けていたが……

「にゃー！」

怪我が治ると、すぐに走り去ってしまった。

黎はスカートの裾を直して立ち上がり、気付いた。

「……どう……？」

ゼラを追ってきたはいいものの、ここがどこだかわからない。

先程のゼラとの戦いで魔力を消耗してしまい、イプシリアスも使えない。

辺りは鬱蒼と木の繁る森。西も東もわからない。

……わかったところで意味はないのだが。

こうなれば仕方がない。魔力が回復するまでここで休むしかない。

とはいえ、

「冷たい……。」

先程ゼラが辺りに雪を降らせたせいで地面はとても冷たい。

「うう……。肝心なときに魔力切れなんてえ……。」

冷たい雪が徐々に、しかし確実に黎の体力を奪っていた。

「つくちゅっ」

「ほい、お粥できたぞ。」

「いいです……。食欲ないです……。つくちゅっ」

黎が帰ってこないの心配して草の根を分けて学園敷地内を探した

ところ、

森の中に突如出現した雪原で遭難していた。
急いで家に連れ帰ったところ、40度近い高熱が出ていた。

「ちゃんと食べなきゃ駄目だぞ。」

「やだ……いらないよう……」

珍しい。黎が駄々っ子みたいだ。めっちゃ可愛い。
とはいえ、お粥が冷めてしまうので一口分すくって黎の口に近づける。

黎は口を固く閉じ、顔を背ける。

仕方がない、実力行使で食べせよう。無理矢理口に入れてやる。

「やだ、やめてよう」

「ダメ。食べ。」

「……………ん……………」

ようやく一口食べてくれた。

こっという食欲の無いときは一口食べればたくさん食べてくれる。

「にしても、何であんな所にいたんだ？」

「……ゼラを追ってたんです」

口調がもとに戻ってしまった。せっかくめっちゃ可愛かったのに。しかし、ゼラだと？ まさかあのジジイ、黎まで巻き込むつもりじゃないだろうな。

ゼラとの戦鬪の経緯を聞いた。

ゼラは今は猫から出ていきどこにいるかわからないという。にしても……ゼラめ。黎を傷つけるとは許せん。

……あんな所で休んでいた黎も大概だが……奴は許さない。必ずしや見つけ出してこの壺に納めてやる……！

壺はセロテープで修復したから大丈夫……だよな？

【ほう、ゼラが解放されたか】

「ええ……しかし、ゼラは学園に狙いを定めたようです。これでは

……」

【ふむ……面倒だな。

しかし、紅き力が動いているようだ。今回は奴に任せ……魂だけ回収しろ。】

「わかりました。全ては邪神の御言葉のままに……。」

【……ふっ。ぬかるなよ。】

ルシフェルは暫く謎の声と話していた。

一体どこから、誰が、どのような事をルシフェルに話しているのか……。

明らかとなるのは、まだまだ先の事だ。

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

B a t t l e ・ 5 3 V S ゼラ（後書き）

次回予告

ゼラは次なる行動を起こす。

ゼラは学園の生徒に憑依し、何やら企んでいる様子……。そんなある日、学園に謎の魔物が次々に現れ……。！？

次回 B a t t l e ・ 5 4 V S 魔傀儡兵（前編）

「全ての生命は朽ちる……！」

Battle・54 VS魔傀儡兵（前編）

く……体が鈍っているのか……？ この我があも簡単に退けられるとはな……。

あの猫も稀有な魔力を有していたのだが……一度警戒されては憑依は不可能。

幸い、この学園の結界内部に入れたのだ。

あの小娘や学園の教師陣は絶対に殺す！このまま引き下がってなるものか……！

………？ 誰だ？

「なあ、金貸してくれ。」

「またかよ……？こないだ貸した金は……？」

「使っちゃったよ。後で返すから金貸してくれ。」

「……………」

「あー、嫌ならいいぜ？ 『あの事』、バラしてやるからよ……くくつ。」

1年サファイアクラスの教室。

もう既に授業は終わっており、教室には2人の少年を除いて誰もいない。

「や、やめろ！ わかった、金は払う。だから……！」

「お、そうか？ 悪いなあ、いつもいつも。」

片方の少年が金を受け取り教室を出ていく。その去り際に、

「流石は俺の元相方だぜ。仕事やめてもきっちり俺の金づるだからなあ……。」

残された少年は悔しげに歯軋りした。近くにあった机を思い切り蹴飛ばした。

その少年……エチル・グリッドに近づくものがいた。

急に教室の明かりが消える。夕陽が雲に隠れ、教室は真っ暗になった。

不自然なまでに暗い教室で、暗い声が響きエチルに語りかけた。

『憎悪渦巻く汝の心を闇に巢食いし魔が食らう。
恨み憎み怒り報復しろ……かの者に罰を下せ。』

「だ……っ、誰だ!？」

『そう恐れるな……貴様が我を呼んだのだぞ？ その強い憎悪でな……。
貴様、我と共に来い。この世界に蠢く全ての生命を我と共に踏み
じろっぞ!』

エチルは突然すぎて何が何やら理解できなかった。

とはいえ、謎の声……ゼラが言っていることは実に不吉。

エチルは恐ろしくなり、逃げることを選んだ。

エチルは教室から脱兎のごとく逃げ出した、が……

(なんだよ、これ……!？廊下が……!)

エチルがいくら走ろうと景色はまるで動かない。

否、動いているのだが、廊下の向こう側にいつまでも辿り着かない
のだ。

『逃げてても無駄だ。これは貴様の定まった運命なのだ。
貴様の体をよこせ……!』

「い、嫌だあつ！な、何で俺がこんな目に……！」

『この世界の全ての生命は朽ちる……！我はそれから貴様を守ってやるのだぞ？

それだけではない。貴様が憎んでいるあの男……奴を消してやろう。

』

「え……………」

エチルの中で一瞬、ゼラへの拒絶がなくなった。

その僅か一瞬の隙を縫って……ゼラがエチルの精神に食い込んだ。

エチルの体は廊下に崩れ落ちた。

その直後に起き上がり、確かめるように自らの手を開いたり閉じたりしている。

エチル——の中に入ったゼラ——はニヤリと笑い、あてもなく歩きだした。

黎をファルシオン学園敷地内の病院に連れていった。
医者も魔法の心得があったようで、簡単な回復魔法をかけてくれたようだ。

2日もすれば完治するそうだ。よかった。マジでよかった。

「けほ……空也さん、学園に行かないと……。」

「気にするな。俺は458度の熱が出たことになってる。」

「……それでよく受理されましたね……。
それより、私の事なら気にしないでいいんですよ。もう食事くらいは……、っ」

「危ない！」

黎は無理に起き上がろうとしてその場に倒れ込んだ。
当然受け止めたが、体が暑い。やはりまだ高熱があるようだ。

「はう……………」

「無理すんな。寝とけ。こういう時くらい俺に甘えて良いんだぜ？
(きゅぴーん)」

「はい……………そうします……………」

きゅぴーんを無視された。まあいい。さて、朝食は何かいいかな……

「黎、何だったら食べられそうだ？」

「……………お粥……………なら……………食べられそうです……………」
ただし、昨日のお粥はやめてください……………」

昨日のお粥？

特におかしなものは入っていないはず。調理は俺じゃないし。
昨日のお粥の袋を見直してみるか……………」

『春菊たっぷり！だし卵がゆ
取れたて春菊たっぷりで体にいい！』

「あゝ……………黎って春菊嫌いだったっけ」

「はい……………」

そうかそうか、申し訳ないことをした。
だから昨日駄々っ子みたいに嫌がってたのか？
なら何か新しい粥を買ってくるとしよう。梅味とか……………よし決定。

「え、今日空也と黎ちゃん休みなのか？」

「そう。黎さまは40度近い熱、空也は458度の熱が出たんだよ。」

「「サボりだな」」

ハウエルとソルの声が被る。

誰もが見抜けるような嘘を何故学園が受理したかは謎だ。
そんな朝、危機は静かに迫っていた。

ザッザッザッ

向こう側から派手な甲冑を着た男（あるいは女）が大勢歩いてくる。
踏み出す足はきれいに揃っており、不気味さを演出している。

「何だよあいつら……廊下広がんなよな……。」

ハウエルとソルが廊下の端に避けようと歩きだすと、先頭の甲冑が急停止した。

同時に全ての甲冑が停止。ハウエルとソルはその様子を気味悪そうに見つめていた。

突然、先頭の甲冑が腰に差してあった剣を抜いたかと思うと、

目の前のハウエルに斬りかかった！

「うお！ …… つぶねえ …… 決闘フィールドも張らずにてめえ一体何考えてんだ！」

ハウエルが正面の甲冑に啖呵を切る。

しかし甲冑は再びピクリとも動かなくなった。

甲冑は動き出すと四方に散り散りになる。

そして、それぞれの甲冑が生徒に襲いかかりはじめた！

「はぁ …… ！？」

まだ脳内処理が追いついていないハウエルに、再び甲冑が斬りかかった。

今度はハウエルも応じ、魔法剣で受け止めた。

「何モンだ …… てめえら …… ！？」

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

B a t t l e ・ 5 4 V S 魔 傀 儡 兵（前編）（後書き）

次回予告

突如現れた謎の甲冑軍団！

その正体は？そして目的は？

同時に、エチルは復讐を始めた……！

次回 B a t t l e ・ 5 5 V S 魔 傀 儡 兵（中編）

「禁術……インプレスカード」

B a t t l e ・ 5 5 V S 魔 傀 儡 兵（中編）

ハウエルと甲冑のつば競り合いが続く。

（くそっ、何だよこいつ！？）

甲冑の力は弱まることを知らない。しかし、強くもならない。全く同じ力を加え続けるなどとても人間業とは思えない。得体の知れない敵の不気味さにハウエルも身構える。

ハウエルは甲冑の腹を蹴飛ばした。甲冑はよろけながら体制を立て直し、

すぐさま両手で剣を構えてハウエルと距離を取り、隙を伺う。

ハウエルも同様であった。しかし互いに隙は見せず、緊張が漂う。

そんな甲冑の脇腹に何かが強く激突。甲冑は吹き飛ばされガララと金属音が響いた。

ぶつかったのは鷹の魔物、フリークホーク。

鋭い嘴に巨大な翼、そして胸に青い宝玉が光っている。

暫く羽ばたいて滞空していたが、ソルの腕に留まった。

どうやらソルが召喚した魔物のようだ。

「一応援護するぜ。」

「それはありがたいけどよ……後ろ、見てみる。」

「……………ウソだろ……………」

ソルが振り返ると、もう1体の甲冑がいた。

甲冑は腰に括りつけていたモーニングスターを手に取り、振り上げた。

降り下ろす直前、ソルは手にした短剣をモーニングスターの持ち手に叩きつけた。

甲冑の持っていたモーニングスターは弧を描いて背後に落下した。

ソルはこのまま畳み掛けようとフリークホークに指示を出そうとした。その瞬間……………

「は？」

ソルの体が回転し、視界が反転した。

甲冑に腕を捻りあげられ投げ倒されたようだ。背中を強か打ち付け、思わず呻き声が漏れる。

「ソル！」

「ぐ……………っ、後ろ……………！」

ハウエルの背後に先程の甲冑が迫り、剣を構える。

ハウエルも剣に炎を纏わせ、隙を見せないよう構える。

（空也か黎ちゃん、ルシフェルがいればな……。）

（俺に対して失礼な心の声が聞こえたなあ……。）

「なんだこれ……。」

サファイアクラスの少年、リチャード。彼は気づくとおかしな場所に立っていた。

1年、サファイアクラスの教室であることに変わりはないのだが、教室内には誰1人おらず、教室から見える空は不気味な紫色だ。

「何でこんなとこいんだよ……？」

リチャードが教室から出ようとしたその時、目の前にエチルが立ちはだかった。

エチルの目に眼光はなく、不気味な無表情だ。

「エ、エチル？ 何だよ、邪魔だよ。そこどけ……」

エチルは突然リチャードの首を締め上げる。

リチャードが苦しげに呻くが、そんな事、エチルはまるで気にしない。

リチャードの体が宙に浮いた。

「あ……かは………！」

リチャードは口から泡を吐き出した。

リチャードの苦悶の表情や声を楽しんだ後、エチルはリチャードを投げ捨てた。

「ぐ……ぐおえ………っ！ゴホッ、か、はっ！」

息ができずに苦しむリチャードをエチルは無表情で見下ろす。

リチャードは必死にエチルを睨み、威嚇する。

エチルはまるで気にせず語り始めた。

「俺とお前が初めて会ったのは2年前だった。

俺達は同じ孤児院の仲間で、1年前までは様々な犯罪にも手を染めた。

しかし1年前、俺達は魔力を持っている事に気付き、ここに入学した。」

エチルの声には感情というものが一切感じられない。
リチャードは混乱から話をあまり聞いていなかったが、エチルは気にせず続けた。

「俺は親に捨てられたことから自暴自棄になっていた。
自分はこの世界に必要ない、と考えて自棄になりお前と共に犯罪を犯していた。」

「……………お前はただ自分の快樂のためだったようだが。」

「……………なん、だよ……………うえほっ、それが、どうした!？」

「俺は学園に入学し、初めて自分が世界に必要とされた気がした。
一気に目の前の世界がモノクロからカラーになった。
同時にこれまでの行動を悔い改め、罪を償うためにも真剣に授業に取り組んだ。」

しかしお前はそうではなかった。お前は相変わらず様々な犯罪を犯していた。

魔法を手に入れた事ですます勢いづいたお前は再び俺に声をかけた。

俺はそれを断った。

そこでお前は『過去の行動を様々な場所にばらす』と脅しをかけ、俺から金を奪い続けた。それらの貴様の罪を断罪する。」

「……………ざけんなよ、断罪されんのはお前だ！」

自分が過去に犯した罪を無かったことにしようなんて甘いんだよ！

お前は絶対に過去から逃れられない！俺が断罪されるならお前も断罪される！」

リチャードは雷の魔法をエチルに投げつけた。

しかし、エチルの体の直前で雷が消滅した。

目を白黒させているリチャードの腹にエチルの全力の蹴りが突き刺さった。

胃液が込み上げ、リチャードは嘔吐えずいた。

腹を押さえ、うずくまるリチャードの体を白い霧が包んでいく。

リチャードが気付いたときにはもう包囲され、体が痺れて動かない。

「おい……やめろ、やめろよ……やめてくれ！」

「彼の者を永遠の牢獄に……禁術、アニマカード！」

エチルが腕で霧を真一文字に払うと、リチャードの姿が消えていた。エチルの手には一枚のカード。カードにはリチャードの顔が映し出されていた。

『何だよこれっ！？おい、出せよ！こんな事してただで済むと思ってるのか！？』

エチルは何も言わず、カードに火をともした。カードは端からジリジリと燃えはじめる……。

『熱っ……おい、やめろ、やめろって！嫌だ、死にたくない！』

火はさらに広がる。

『なあ、頼むよ！もうお前に一切関わらない！だから……熱い、嫌だ、助けてくれ！』

火はさらに広がる。

『熱い熱い嫌だああ！助けてくださいお願いします助けてください！！』

熱い熱い熱いごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
いあああっ！！！！』

カードは燃え尽きた。同時にリチャードの声は消え、燃え尽きたようだ。

エチルは笑みを浮かべると、体から紫色の魔力を溢れさせた。

エチルの精神は消え、エチルの体は完全にゼラの支配下に置かれた。

エチル、否、ゼラが指を鳴らすと教室の風景が崩れ落ちた。

ゼラの造り出した魔物、不気味な甲冑『魔傀儡兵』が生徒達に襲い
かかるなか、

ゼラは悠々と廊下を歩いてどこかへと消えた。

> i 3 2 4 6 0
— 1 5 6 3
<

B a t t l e ・ 5 5 V S 魔傀儡兵（中編）（後書き）

次回予告

魔傀儡兵が次々に生徒を襲うなか、ようやく空也が現れる。
サーチによって明らかになった魔傀儡兵の意外な弱点とは？

次回 B a t t l e ・ 5 6 V S 魔傀儡兵（後編）

「お粥 アタック!!」

Battle・56 VS魔傀儡兵（後編）

俺は『がつりお粥シリーズvol.4 思わず「うめえ！」
挽き肉梅お粥』を購入。

さて帰ろうと教員寮へと歩いていると、学園の校舎が見えた。

校庭を見ると、まるで戦争のような状況だった。

色とりどりの制服を着た学園の生徒と、派手な紫色の甲冑軍団が戦っているのだ。

誰も決闘フィールドを張っておらず、武器も本物、魔法も使用している。

どうやら本気の殺し合いのようだ。

助けに行くべきか？ 黎にお粥を作りに行くべきか？

俺は黎のところに行くべきだと思うが……間違いなく黎になじられるだろう。

仕方がない……すまん、黎。お粥は後になりそうだ。

「はあ、はあ……！くそ、野郎……っ！」

「何だってんだよ……畜生！」

1年トパーズクラスの教室前。

一向に消耗の気配すら見せない魔傀儡兵に対して、ソルとハウエルは消耗している。

ハウエルは額の汗を拭い、剣を構え直す。

対する魔傀儡兵も剣を構え、ハウエルの出方を見ている。

ソルは複数の魔物を召喚しているが、それぞれの魔物に対応する甲冑がいる。

その為、ソル自身はナイフのみで1体の魔傀儡兵と戦っている状態だ。

「うおおおお！」

「……………」

魔傀儡兵はかかってきたソルを淡泊な動きで往なす。ソルは後ろで派手に転けた。

倒れるソルに、モーニングスターを持った魔傀儡兵が歩み寄る。

（やっべえ……………どうすれば……………）

絶体絶命のソルの後ろに、誰かが歩いてきた。
空也だった。

「ふっふっふ、情けないぞソル！　こんな奴、一撃で沈めてくれよう！」

必殺！がつりお粥シリーズvol.4　思わず『うめえ！』　挽き肉梅お粥　アタック！」

突如現れた空也がとんでもなくセンスのない必殺技を叫んだかと思えば、

お粥のパックを魔傀儡兵の兜に突き刺した。

何かの冗談かと思ったソルだが、次の瞬間、魔傀儡兵の鎧がバラバラに崩れ落ちた。

「なっ！？」

「く、空也！」

「……色々突っ込みたい。」

「我慢しろソル。」

ハウエルとソルに対応していた魔傀儡兵が俺に集中した。

魔傀儡兵

力を持つ魔術師なら簡単に量産できる魔物。人が造る為、魔物が否かは議論が別れる。

鎧は非常に硬く大半の攻撃は弾かれてしまうが、前を見るための兜の十字の切れ込みの中に全ての鎧パーツを繋ぎ止めておく、

いわば核があるためそこを攻撃されると鎧がバラバラになり再起不能になる。

この魔物には相当致命的な弱点がある。目を潰せばいいだけだからな。

魔傀儡兵が次々に俺に襲いかかってくる……が、全てお粥 アタックで沈める。

剣やモーニングスターを避けて十字の中にお粥パックを挿入。

気付けば辺りの魔傀儡兵を全て片付け、辺りが鎧のパーツだらけになった。

流石に全部の魔傀儡兵を俺が倒すことはできない。

ならば手っ取り早く、皆にこいつらの弱点を教えてやろうではない

か。

魔法など使わずに学園中に己の声を届けることができる文明の利器でな。

——簡単に言うと、放送室だ。

『ブツッ、あれ、これか？ 何何？ え、緊急ボタンとか押しちゃったけどいいの？』

『おいおい……もう流れてんだからマイクで喋んなよな……』

『バカ……2人共入ってる……！』

空也達の放送は屋上を除く全ての場所に届いた。

1 F、2 F、3 F、4 F、校庭……そして、地下室。

普段は生徒はおるか教師ですら一部を除いて立ち入りを禁じられている場所。

だが今日は、地下室に続く扉が開け放たれていた。

扉の前には魔傀儡兵——の上位種——が来る者全てを殺す為待ち構えている。

地下室には人々（ここでは人間とエルフの総称とする）の邪気を吸収し、

世界全体の邪気の量を一定に保つための装置がある。

世界の邪気が多いと魔物が活性化し、それによる死者が増えてしまうためだ。

ここ最近、人々の邪気は増える一方。この装置でも世界の邪気量を一定に保てない。

その原因は不明……人口が増えすぎたせいとも、何者かの企みともいわれている。

その地下室に、ゼラはいた。

「くく……素晴らしい……魔力が溢れるようだ……！」

（ふ……今の台詞はなかなかキマっていたな……86点だ……。）「

邪気収集装置から発せられる邪気。

並みの魔力ではその邪気の中てられてしまう為、立ち入りを禁じている。

しかし相手が魔神であれば話は別だ。ゼラにとってこれ程行動しやすい場所はない。

空也達の放送は絶好調なゼラの耳にも届いていた。

『派手でダサイ甲冑と戦っている皆さんにお知らせします。その甲冑は魔傀儡兵という魔物ですんで、遠慮なく殺っちゃって構いません。』

甲冑の兜の十字の部分の中を攻撃すればイチコロだから、皆頑張つてね。』

『おい……！ちゃんとやれよ！』

『いーじゃん別に今ので。で、どうやって放送切んの？』

『だからなあ、俺らの会話全校に流れてるからな！？』

『お、これか？ ブッッ』

放送が切れた。

「派手でダサイ甲冑とは言ってくれるじゃないか……！！」

とはいえ、魔傀儡兵の弱点が発覚したのは誤算だった。

ゼラは大量生産した魔傀儡兵で学園を攻め滅ぼす気でいたからだ。

「さて、どうしたものかな……くくく……」

居場所を特定されればゼラは危機に陥る。

だというのに、ゼラはまるでゲームを楽しむように笑みを浮かべて

いた。

> i
3
2
4
6
0
—
1
5
6
3
<

B a t t l e ・ 5 6 V S 魔 傀 儡 兵（後編）（後書き）

次回予告

魔傀儡兵を殲滅した生徒らは教師に説明を求める。

アレはなんだ。殺す気か。

学園の結界はどうなってるんだ。

教師は何をしていたんだ。

隠す必要のない学園長は臨時集会を開き、語りはじめた。

次回 B a t t l e ・ 5 7 V S 憑 依 魔 神 ゼ ラ 《 1 》

「君らはこれ以上関わるな。」

Battle・57 VS憑依魔神ゼラへ1」

魔傀儡兵、全滅。俺のお陰で。

しかし、『はい全滅しました、チャンチャン♪』といく筈もない。あちらは本気で俺達を殺す気だったのだ。全員が全員、俺のように無傷な筈がない。

怪我をしたものや恐怖で心に傷を負ったものもいただろう。学園に対する苦情が殺到した。中には退学を希望する者もいたようだ。

翌日には臨時集会が開かれた。学園側の弁明の為のようだ。

「この臨時集会を開いた訳は諸君らも勘づいているだろう。

先日、学園に魔傀儡兵という魔物が侵入した。

ある生徒の助言放送のお陰で事なきを得たが、学園の代表として……学園長として、侵入者に気づけず諸君らを危険な目に会わせたことは……

全面的に謝罪したい。本当に、すまなかった。」

学園長は頭を下げた。

責任逃れせず謝罪したことは流石学園長だ。

「今、学園は攻撃を受けている。敵は憑依魔神ゼラ……古の魔神だ。我々は奴の居場所を特定した。これより、攻撃をはじめ……。危険な戦闘になるやもしれん。故に、本日は全ての授業を中止する。諸君らは速やかに寮に帰るのだ。」

これで学園長の話は終了。

同時に今日の授業も終了……しかし、攻撃と言っていたが壺は必要なのか？

一応確認しに行ってみるか……。

「壺はもう必要ない……我々でスピアを作ったのでな。」

そう言つて学園長は壺を取り出した。

サーチが発動しない。どういう事だ？何か特殊な仕掛けなのだろうか。

「……にしても、ゼラは今回何に憑依してるんです？」

「そんな事を気にする必要はない。早く寮に帰るんだ。」

……壺の件で負い目を感じているのかもしれないが、君らはこれ以上関わるな。」

「そうですか……まあ、せいぜい寿命を縮めないで下さいね。」

「ふ……………。わかっておるわ。」

俺は学園長室を退出した。

さて…………今日は合法的に黎に付きつきりで看病できるぞ！

「学園長。」

「フェンリツヒ…………居るなら一声かけぬか。」

フェンリツヒが奥の扉から姿を現した。

煙草に火を着け、紫煙を燻らせている。

…………そして、嫌味っぽく学園長の顔に煙を吹き付けた。

「やめんか、無礼な。」

「学園長…………さっきの忠告、聞いた方がいいんじゃないですか？」

「何の話だ…………。」

「わかっているでしょう。」

「……本当に我々だけでゼラを倒せると思っているのですか？」

学園長は何も言わない。

「ゼラ討伐に参加するのは私と学園長、それに数名の教師……。ゼラが今居るのは地下室でしょう。昔なら兎も角、今の私達では……。」「

「なら、どうするのだ。教師で討伐に参加できる者は全員参加している。」

ファルシオンホーリー・ナイト聖騎士団も例の、ほれ……。あの事件。何と言ったか？」

「『墮天使事件』……。ですか。」

墮天使事件とは、ファルシオン学園の始業式直前に起きた事件。あまりに狂ったその事件の内容に世界が震撼した。

危険な魔神を封じているため入ってはいけないとされるハリスの祠。その守り人の目を盗んで一人の少年が入りこんだ。

守り人は投降を勧めたが少年は拒否。守り人の攻撃を受け血塗れになりながらも、

祠の地下深く……。最深部まで少年は辿り着いた。

少年は自分の血で謎の魔法陣を書き上げた。……。その後何があったかは不明だが、

細かくバラバラにされ壁の一部と化した守り人二人が現場から見つかっている。

また、ハリスの祠に封じられていた暗黒魔神アンノウンは姿を消している。

逃げ出したという説と守り人と同じ運命を辿ったという説がある。

なお、その少年は現場から姿を消しており、未だに見つかっていない。

「あの事件の対応にファルシオン聖騎士団の実力者は全員回している。

ゼラ討伐には誰も使えん。」

「まったく……肝心な時に機能しないなんて、何の為の魔法省直属部隊ですか。」

フェンリツヒが嫌味たつぷりに溜め息を吐く。
暫くして、フェンリツヒが閃いた。

「彼に手伝って貰いましょうか。」

「何……？」

「このような重要な任務に参加させて頂き、誠に光栄です。」

そう言ってリースは頭を下げた。長い金髪の髪がたなびく。
学園長はフェンリツヒに耳打ちした。

（何故生徒を誘っておるのだ……！阿呆か貴様！）

（まあまあ、彼だって乗り気なんですし。何事も経験ですよ。）

「学園長。ゼラ討伐には参加人数が少なすぎるのではないでしようか。」

最低でもあと二人は必要かと……。」

「むう……確かにそうなのだが、人手がなくてな。」

リースはこれ幸いとばかりに話を切り出した。

「では失礼ながら……私があと二人を指名してもよろしいでしょうか？」

ご心配なく。間違いのない実力者です。万が一の場合は私がフォロ

「します。」

「む……別に、構わんが……。君がそこまで推すとは、その二人は何者だ？」

「——小泉 空也と蒼井 黎……。この二名です。」

空也と黎は、意外な形で今回の戦いに巻き込まれることになったのだが……。

——教員寮——

「はい、口開けて」

「い、いいですよ……もう一人で食べられますから……。」

「はっはっは、遠慮するんじゃない。」

「いや、遠慮とかじゃなくて……。」

この二人は、知る由もなかった。

$$\begin{array}{r}
 > i \\
 & 3 \\
 & 2 \\
 & 4 \\
 & 6 \\
 & 0 \\
 \hline
 & 1 \\
 & 5 \\
 & 6 \\
 & 3 \\
 <
 \end{array}$$

B a t t l e ・ 5 7 V S 憑依魔神ゼラへ1 (後書き)

次回予告

討伐に参加するメンバーが決定し、いよいよ一同は地下室へ向かう。
待ち受けるゼラ。遂に、激戦の幕が上がる……！

次回 B a t t l e ・ 5 8 V S 憑依魔神ゼラへ2

「リリース、誰も行きたくないみたい」

Battle・58 VS憑依魔神ゼラへ2

俺は現在、再登校して学園の生徒会室にいる。

俺を案内していた水色の髪をツインテールにまとめている少女が扉を開いた。

「リース、つれてきた」

「ご苦労様シルヴィア。空也君、そこら辺に座ってくれるかい。」

「つか……何で俺を呼んだんだ？」

生徒会室の中は見た目片付いているものの、部屋の隅は酷く散らかっている。

バサバサと投げられた書類だけでなく、何故か卵の殻のようなものまである……。

どう見ても人を迎える部屋ではない。

「報告。小泉空也はこのとおり参加、蒼井黎は病欠した。」

「有難うシルヴィア。」

黎君は病欠か……。誰か替わりを見つけなくてはな……。

リースは生徒会のメンバーに目をやる。

短い茶髪の生徒会副会長は慌てて目を逸らし、

他のメンバーも本を読むなどして目を逸らしている。

「リース、誰も行きたくないみたい。」

「はぁ……そうみたいだね。シルヴィア。君はどうだい？」

「……行ってもいい。けど、攻撃はできない。」

さつきから俺を置いて話を進めているようだが。

俺は話も聞かされずにいきなり連れてこられたので、何が何やらわからない。

「なら決まりだね……では学園長室に行こうか。」

「待て待て待て、俺は何も聞いてないぞ。」

俺は何のために呼ばれたんだ？ どこに行くんだ？」

リースはシルヴィアを一瞥し、溜め息を吐いた。

「シルヴィア……事情を話してから連れてこないと駄目じゃないか。」

「……妹さんの黎には話した。」

まだ風邪が治ってなくて……魔力が安定しないんです。

私が今行つては皆さんの足手まといになりかねないので今回は……すみません。

空也さんは病気とは無縁ですし、戦力にもなります。是非連れていってください。

……と言っていた。」

何故俺には話さなかったのか、意味がわからない。

しかもいきなり腕を掴んでここまで引張ってこられたし……。

シルヴィアという少女、黎より3、4歳年上みたいだが、大分抜けているようだ。

「じゃあ、改めて説明するよ。

僕らはこれから憑依魔神ゼラの討伐に向かう。

教師陣だけでは人手が足りなすぎるんだ。だから、僕らの力を借りたいと。

どうだろう。危険かもしれないが、君も参加してくれないか？」

ふん……学園長、臨時集会で見栄張ってたわけか。

仕方がない。哀れな老人に力を貸してやらねば。

「わかった、断る理由はないしな。ジジイをからかえるし……。」

「ありがとう。では行こうか。」

「き、気を付けてくださいね会長！」

「わかってるよ、ウィリアム。」

「ウィーちゃん、お留守番よろしく。」

副会長はリースの次に偉い筈なのだがシルヴィアは勝手に変な名前をつけている。
所謂イジられキャラという奴か？

「学園長見栄張ってたんですね。老い先短いんだから無理しない方がいいですよ？」

「儂はお前の哀れな死に様を見るまでは死なん。」

「残念、俺の死に様が見たいなら化けて出てください。塩撒きますけどね！」

「塩ごとときで退散する儂ではない。たとえ死後でもお前の夢枕に立つてやるつ。」

俺と学園長の間に火花が散ったのが確かに見えた。

ああ言えばこう言う。なんて口の減らないジジイなんだ。
もう1ラウンドくらい余裕な雰囲気だったが、

フェンリツヒ先生とリースの咳払いで2人共我に返った。

学園長室には学園長とフェンリツヒ先生、それに見慣れない教師が
2人いた。

1人は眼鏡をかけた白髪混じりの初老のエルフ、
もう1人は黒髪に筋肉質の若い人間だ。

教師がこれだけいるのならゼラも楽勝なのでは、と思ってしまう。

「では、これよりゼラ討伐に向かう。奴は地下室にいる。油断は禁
物だ。

一人一人がお互いを支え合って戦わねば、全滅しかねないぞ。」

しかし、こつも周りが緊張していると俺までつられて緊張してしま
うな……。

「……ふっ、上等だ。」

学園長室に小さな虫を潜ませ、その虫と感覚を共有していたゼラはほくそ笑んだ。

「一人一人がお互いを支え合う？ その程度で我を封印しようとは微笑ましい。」

小さな虫は学園長室から飛び立ち、空也達を追って飛んでいた。

——誰もこの虫に気付かないではないか。ゼラは可笑しくてたまらなかった。

この程度では我を再び封印する事など叶う筈がない！

その時、ゼラの笑みが凍りついた。

虫が殺されたのだ。たった一瞬の間に。

誰が、どうやってこの一瞬に虫を殺したのか、ゼラにもわからなかった。

「……なかなか面白い者がいるようだな……！
よかるう、我も本気で殺つてやるう！」

ゼラのいる地下室の扉を固めている魔傀儡兵の上位種、邪鬼兵がピクリと動いた。

「近い……そろそろ来るか。」

せめて邪鬼兵くらいは倒して、私の元に辿り着いて貰わねば困る……。」

パン！

「何だ！？何事だ！」

学園長が大袈裟に警戒する。
釣られて俺以外の全員が警戒体制に入ったが……。

「俺がハエを潰しただけです……けど……。」

全員が盛大に溜め息を吐いた。
今ので少しは……少なくとも俺は緊張が解れたから、結果オーライ、だよな？

>
 i
 3
 2
 4
 6
 0
 —
 1
 5
 6
 3
 <

B a t t l e ・ 5 8 V S 憑依魔神ゼラへ2《（後書き）

次回予告

地下室に辿り着いた一同の前に『邪鬼兵』が立ち塞がる。
無駄のない攻撃と完璧な防御の前に追い詰められるリース。
そんな中、学園長の実力が垣間見える……！

次回 B a t t l e ・ 5 9 V S 憑依魔神ゼラへ3《

「最初っからそれ使えば……！」

Battle・59 VS憑依魔神ゼラへ3

地下室に続く階段を降りていると、何かの気配を感じた。
これは……魔傀儡兵か？ いや、微妙に違う……。

階段をすべて降りると殺風景な一直線の廊下が広がっていた。
一部の電気が切れかかっているようで、暗い光が瞬いている。
廊下の空気はひんやりとして、妙な静けさに包まれている。

俺達が一步步く度に聞こえるコツ、コツという音だけが響いていた。
暫く歩くと地下室の扉が見えてきた。

扉の前には両手に剣を持ち、仁王立ちしている鎧がある。

「かつこいい」

「……そうじゃないだろ、シルヴィア……。」

リースは頭を抱え溜め息を吐いた。

「敵だよ。」

リースは剣を構えると、一瞬で鎧の前に移動し剣を降り下ろした。
流石というべきか、移動の瞬間が目で捉えきれなかった。
しかし相手も相当な魔物のようで、簡単に対応している。

邪鬼兵

魔傀儡兵の上位種の魔物。

攻撃力、防御力が非常に高く、敏捷性も兼ね備えている。さらに魔法も使用するなど、極めて強力な戦闘力を持つ。

魔傀儡兵の致命的な弱点であった核を破壊されると無力化する事もなくなっており

鎧そのものが生命を持っているため核がなく、物理的に破壊するしかない。

但し、余程力のある魔術師でも量産は不可能。

邪鬼兵は力でリースを押し返し2本目の剣でリースを斬りつけようとしたが、

咄嗟に身を翻して回避。逆にリースが斬りつけた。

しかし邪鬼兵は体を回転させながら跳躍し回避と同時に距離を離す。

敵との距離が離れたところで味方も加勢に加わる。

リースと同じく魔法剣を使う黒髪で筋肉質の人間教師、アズマ。

それにタバコをくわえたフェンリツヒ先生が加わった。

学園長は後方で何かを詠唱している……何か強力な魔法を使う気なのだろう。

俺も参加しようかと思ったが、単純な破壊力では剣のほうが上。俺の出る幕はないだろう。

「邪鬼兵はただ破壊するしかないから面倒な相手ね。じゃ……行きましようか。イクスフェンネル・アマリス！」

フェンリツヒ先生がタバコを邪鬼兵に投げつける。

タバコは邪鬼兵の直前で虹色の光を放ち炸裂。

虹の光は鎖状に変化し邪鬼兵を縛り、そのまま連鎖して爆発を起こした。

イクスフェンネル・アマリス

光属性の中でも強力な魔法。

虹の光の鎖で相手を縛り、それを爆発させる。

相手の体に鎖を密着させて爆発させるため、攻撃力が高い。

土煙を切り裂いて邪鬼兵が現れた。

あれだけ間近で爆発を受けたというのに、鎧には傷一つない。どうやら鎧の表面に魔法に対する対策を施しているようだ。

「対策済みって訳？ 嫌らしいわね。」

「先生、下がってください！ 私が……！」

アズマ先生が剣に闇属性魔法を纏わせる。

同時にリースも剣に光属性魔法を纏わせる。

アズマ先生が斬りかかる。邪鬼兵は軽くそれを弾き、剣の柄で腹を突いた。

「うぐ……っ！」

リースも別方向から斬りかったが、2本の剣で受け止められた。

邪鬼兵はあろうことかリースの剣と密着した剣に闇属性魔法を纏わせた。

反属性が接触・反発し、灰色の大爆発を起こした。当然、リースを巻き込んで。

「ちょ……っ、これはマズイわね……！ 学園長！」

「わかっておる！」

地下室の扉の前……つまり、俺達がいる広間は灰色の光に包まれた。

俺は咄嗟に逃げ、爆風を免れたが他の面々は爆風の中。

くそ、一人くらいは助けられたかもしれないのに……！

焦げ臭い煙が晴れた。

爆風の中には暖かみのある橙色の透明なドームが作られていた。中にはゼラ討伐隊が全員入っており、中心にはドームを造った学園長が立っている。

「助かりました、学園長。」

「アズマ、奴にあまり接近せぬ方がいい。」

「じゃあどうするんです？ アイツ、鎧に細工してますよ。」

「僕の詠唱が終わるまで暫し時間を稼いでくれ、フェンリッヒ。」

学園長はドームを消し、再び詠唱を始めた。

フェンリッヒ先生はやれやれ、と首を振ると魔力を解放した。

「イクスフェンネル……アルベット！」

虹色の光を放つ体の長い龍が二匹現れ、邪鬼兵に襲いかかった。

イクスフェンネル・アルベット

召喚魔法に見えるがれっきとした光属性の攻撃魔法。
魔力を解放し束状に編み、龍の姿を投影する。
光の束は龍の意思を持ち、その力で敵を粉碎する。

邪鬼兵は突っ込んできた一匹目の竜を必要最小限の動きで回避し、
二匹目の竜に飛びかかり、頭を二本の剣で切り裂いた。
龍の放っていた光が消え、体が崩れる。……その中から、アズマが
現れた！

「奥義、ちようすいげつか弔水月花！」

魔力を伴わない魔法剣の全力の一撃が邪鬼兵の脚を襲った。
流石の邪鬼兵もバランスを崩し、体がよろめいた。
だめ押しとばかりに、残ったもう一匹の龍が邪鬼兵の胸に激突した。

邪鬼兵が仰向けに倒れ込んだ。直ぐ様起き上がろうとしたその時……

「はあああ！」

リースが風の魔力を纏った剣で邪鬼兵の胸を突き刺した。
邪鬼兵の胸には剣が刺さっているが、邪鬼兵は気にする様子もなく

立ち上がった。

「何……！？」

剣を持たないリースに邪鬼兵が歩み寄り、リースに蹴りを入れた。

「がう……っ！」

リースは吹き飛ばされた。吹き飛ばされた先にはシルヴィアがいる。リースを受け止めるのかと思ったが、普通に避け、リースは地面に激突し気絶した。

シルヴィアはあくまで冷静にリースを見下ろしている。顔をぺちぺちと叩いたり、目を無理矢理開かせ、気絶していることを確認し……

リースを引きずりながら来た道を引き返していった。
か、帰りやがった……！

「皆の者！ 邪鬼兵から離れろ！ 発動……マイティコントロール
！」

学園長は魔法を発動させたがサーチが反応しない。
つまり、魔法が発動していないか余程特殊な魔法かのどちらかだ。

学園長が腕を振ると、それに呼応するように地面が揺れた。

廊下の床が壊れて浮き上がる。その床が独りでに削れ、矢のように鋭くなる。

大量に出現した矢が一斉に邪鬼兵に向かっていく。

最初のほうの矢こそ打ち落としていたが、一本が刺さり、二本が刺さり……

やがて、邪鬼兵は蜂の巣になり倒れた。鎧が破損しすぎたのだろう。ていうか……

「最初からそれを使えば……！」

「詠唱に時間がかかるのだ。僕は元々魔法は得意ではない。」

「つか、あの二人帰っちゃいましたよ！？ どうするんですかアレ！？」

「負傷者が一旦退いただけだ。気にするでない。」

ぎゃーぎゃー騒いでいると、突然手を打つ音が聞こえた。

それが称賛を意味する拍手であることは何となくわかった。

暫くすると拍手が止み、テノールボイスがどこからか響いた。

「いやはや……ファルシオン卿、鮮やかな魔術は衰え知らずのようだな。」

48年ぶりに面白いものを見せて貰ったよ……。」

ギィィ……と音をたて、地下室の扉が開いた。
その中は暗い闇に覆われて見えない。

「入るがいい。我は力を持つものは歓迎しよう。
その力なら、我を存分に楽しませてくれるだろう……。」

俺達は招かれるまま地下室に入っていく。
ほどよい緊張が辺りを包み、誰も言葉を発さなかった。

この中に……ゼラがいる。

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

B a t t l e ・ 5 9 V S 憑依魔神ゼラへ3《（後書き）

次回予告

遂に始まる魔神ゼラとの直接対決。

圧倒的力を持つゼラの前に次々と倒れていく教師陣。

そして、空也は……。

次回 B a t t l e ・ 6 0 V S 憑依魔神ゼラへ4《

「欲しい……！貴様の体が……！」

B a t t l e ・ 6 0 V S 憑依魔神ゼラへ4〈（前書き）

ゼラⅡ 無双の信長

Battle・60 VS 憑依魔神ゼラへ4

地下室……つまり、邪気制御室。

中はじめじめとした嫌な湿気が支配しており、酷く暗い。

何だか進めば進むほど暗さが増しているようで、数歩歩いたら最早何も見えない。

おまけに何の音も聞こえない。匂いもしない。腕を振っても何も触れない。

まるで五感全てを失ったかのようだ……。

だが自分の体は触れる。俺は間違いなくここにいる。

……何を言っているのやら。

などと考えていると、突然視界が開けた。

相変わらずじめじめして薄暗いが、部屋の中は見渡せる。

辺りは土壁で所々ボロボロになっている。床も整備されておらず土のまま。

目の前には青い制服を着た紫色のショートヘアの男が立っていた。

! D A N G E R !

憑依魔神ゼラ

実体を持たず、物体に憑依する魔神。

ゼラに対して警戒心や拒絶心を持たないあらゆる物質に憑依できる。依り代を破壊してもゼラ本体は死なない為、半永久的に生き続けられる。

圧倒的な魔力を持ち、禁術も使いこなす。
更には体術にも秀でており、魔神の中でも危険度は最大クラス。

！ D A N G E R ！

成る程……こいつは学園の生徒に宿ったゼラか。
上等だ、黎の仇を討たせてもらおう……。

「久し振りだな、ゼラ……。」

「ああ、本当に久し振りだなファルシオン卿。48年の封印は長かったぞ？」

その復讐をさせてもらおうか……！ ビッグバン・フレア！」

ゼラが片腕を掲げると部屋を覆い尽くさんばかりに巨大な炎が出現した。

！ D A N G E R ！

ビッグバン・フレア

禁術。

古代、エルフが怒りに任せて出現させたといわれる極めて強力な魔法。

炎属性魔法だが、光属性も混ぜられている。

— D A N G E R ! —

「むう……！」

学園長が手を動かすと地面の土が呼応して動き、鋭い矢になった。その矢は巨大な炎に向かったが、炎に辿り着く前にあまりの高熱の前に蒸発した。

「まずは貴様だ！ 前世紀の遺物は失せるがいい！」

巨大な炎の塊から幾つかの炎の矢が放たれた。

学園長は急いで障壁を張ろうとするが間に合わず、炎の矢が直撃した。

「ぐおお……！」

「学園長！ くっ！ イクスフェンネル・アルベット！」

虹の龍が二匹、ゼラに向かっていく。だがゼラはまるで気にせず、動かない。

「アーカナテッド・アルベット！」

ゼラは魔力を解放し、闇属性の黒い龍を二匹作り出した。黒い龍は一匹で虹の龍二匹を屠る。もう一匹はフェンリツヒ先生に

直撃した。

「がはっ!？」

「やれやれ……貴様らがこうも老けておるとはな。

邪気が満ち溢れているとはいえ、弱すぎる。もっと我を楽しませてくれ!」

ちっ、そろそろ俺も参加しなきゃ不味いな。ポケットからナイフを取りだし……

「blood summons……クロー!」

俺は鉤爪でゼラに攻撃したが、避けられた。

ゼラはそのまま右手に闇属性魔法を造ろうとしたが、右手を捻り上げて阻止した。

「この場において最も不明瞭な存在が貴様だ。

魔力もない学園の生徒……だというのにこの場におり、邪気にも中てられていない。

余程強靱な精神を持っているのだろうな。欲しい……! 貴様の体が……!

その強靱な精神の鎧を破壊し、我が支配下に置きたい……!」

ゼラは体を翻して俺を振り払い、腰を落とし正拳突きを繰り出した。両腕をクロスして防御するが衝撃が強く、3メートル程後ろに飛ばされた。

ゼラはさらに俺めがけて飛び蹴りで追撃しようとしたが回避。

俺の後ろの土壁が大きく凹み、ボロボロと崩れた。

「エチル君、目を覚ませ！ 君は利用されているだけだ！」

初老のエルフ教師、ニルギスが叫ぶ。

ゼラは首だけ動かしてニルギスを睨むと、手を翳す。

すると間もなく彼の頭上に雷が落ち、彼は声もなく倒れた。

インディバースト

超上攻撃魔法。

雷属性の魔法で、インディ、インディグレードの強化魔法。

実際の落雷の30分の1の威力があるため、人に対して使ってはいけない。

「馬鹿め……最早この依り代の男の意識など消え失せておるわ。」

「う……ぐ……空也、君……頼む……。」

エチル君は、実に、勤勉な生徒だ……彼の体を、殺さないで、ほしい……。」

「甘い老人だ……貴様の世迷い事を聞く必要はない。死ねっ！」

ゼラはまた手を翳す。

このままではニルギス先生は死にかねない。

雷が落ちる直前でニルギス先生を持ち上げ、ゼラから離れる。

「……わかりましたよ先生。エチルは殺さない。ゼラは封印する。約束します。」

その言葉を聞いてニルギス先生は気を失った。

「アズマ先生！ ニルギス先生を頼みます！」

「わ、わかった。だが君一人では……。」

「アズマ先生の剣では依り代の生徒を殺してしまいかねない。アズマ先生は他の先生方の処置も頼みます！」

俺はゼラを向き直る。

ゼラは楽しそうに笑みを浮かべ、威嚇するように魔力を解放する。

「是非もなし……せいぜい我を楽しませてくれよ？ フハハハハ！」

俺は手につけていた鉤爪を外す。

そして暫く、俺とゼラの睨み合いが続いた。

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

B a t t l e ・ 6 0 V S 憑依魔神ゼラへ4《（後書き）

次回予告

ゼラとの激闘！

魔力では負けているが、体術では勝っている。

この勝負にファルシオン学園の命運がかかっている。

空也は学園を救えるか？

次回 B a t t l e ・ 6 1 V S 憑依魔神ゼラへ5《

「アレを見るがいい……我の力の源だっ！」

Battle・61 VS 憑依魔神ゼラへ5

先に動いたのはゼラだった。

ゼラは俺の間合いまで踏み込み、左ストレートを繰り出すが首を動かして回避。

俺はその左腕を引っ張ってゼラの体制を崩し、顔面に一撃喰らわせた。

だがゼラは大して堪えた様子もなく、頭突きをしてきた。

「ぐっ」

「ぬうつん！」

ゼラは俺の腕を掴んで後方に投げ飛ばした。

壁に激突しかけたが、体を回転させ壁を足場にして勢いを殺す。

そのまま壁を蹴り、追撃を狙っていたゼラの腹に蹴りを入れた。

相当な勢いだったため、流石のゼラも小さく呻き声を上げ吹き飛ばされた。

しかしゼラは直ぐに受け身を取り体制を建て直す。

ゼラは掌の中に闇の球体を作り出し、俺に投げつけた。

球体の質量はテニスボールくらいで、容易に避けられた。

が、いくら避けても球体はしつこく俺を追いかけてくる。

アーカナテッド・ナイツ

上級攻撃魔法。

対象になったものに命中するか球体が大破するまで対象を追尾し続け、

対象に当たると闇属性の爆発を起こす。

なんとか矢で打ち落とせばいいが…… blood summons……アロー！

「なんだと……！？ 魔力を解放せずに魔法を行使するなどありえない……！」

「これは魔法じゃないんでな……！」

矢は真っ直ぐ球体に向かっていく。

矢と球体がぶつかったその瞬間、紫色の光が放たれ爆発が起きた。それはそうか。対象が俺だから、俺の血でも爆発する道理だ。

爆風が晴れない中、ゼラは俺に対し手を翳した。

直ぐに横に跳んで逃げる。さっきまで俺が立っていた所に巨大な雷が落ちた。

ゼラは俺を追うように手を動かし、次々に雷を落とす。

俺はゼラに向かって走り、膝蹴りを放った。

ゼラは腕を交差させてそれを防ぐ。そのまま腕を押し出し、俺の体ごと弾き返した。

俺は空中で数回回転し着地した。

「くく……面白い……面白いぞ……！」

「まったく……何なんだよ、その馬鹿力は……？」

「貴様が言うな。」

人間は元々莫大な力を秘めている。その力を効率的に全て使用しているだけだ。

—— ああ、それだけではないぞ。アレを見るがいい……我の力の源だつ——！」

ゼラは部屋の天井を指差す。

天井には紫色の電気を帯びたミラーボールのような球体が回転している。

—— D A N G E R ! ——

邪気制御装置

高名な錬金術師が協力し造り上げたものを人間の科学技術で改良したもの。

世界中の人々が放っている邪気を吸収し、世界全体の邪気量を一定に保つ装置。

最近では人々の邪気は増える一方で、装置でも一定に保てていない。装置が破壊されては危険すぎるため、常に学園の地下に保存されている。

装置の周辺には吸収しきれっていない邪気が溢れており、強力な魔力を持つ者や強力な精神力を持つ者以外は莫大な邪気に中

てられてしまう。

装置の表面には結晶化した邪気が雷状になって帯電している。

この雷は大量の邪気を含んでいるため触れると体と精神に莫大なダメージを受ける。

— ! D A N G E R ! —

「アレが集めている世界の邪気。それは我ら魔神も含めた魔物を活性化させる。

その邪気がこの部屋にはこんなにも溢れている。実に素晴らしい…

…！

しかし貴様らは実に愚かだな。打つ手がないとはいえ、攻め込んでくるとは。

鯨を狩るために海に入り込むようなものだぞ？ クツクツ……。」

「だからどうした……？

ここがどこでも、お前が誰でも……

—— 黎を傷つけたものは生かしておかん！！」

「そうか……それが貴様の望み、邪気か……。

いいぞ、もっと憎め！ それが我の力となるのだ！」

ゼラは笑いながら飛び蹴りを放つ。

俺はそれを避け、ゼラの顔面に鉄拳を叩き込む。

だがゼラは俺の拳を受け止めた。しかし衝撃が強かったのか、上体が後ろに反る。

空中でバランスを崩したにも関わらず、ゼラは宙返りで膝をつきな
がらも着地。

その状態から飛び上がって俺にサマーソルトを喰らわせてきた。
言い訳がましいが……不意打ちされた俺はもろに蹴りを喰らった。

「ぐっ……！」

腹から胸にかけて切り裂かれ、制服が破れ血が噴出した。
中に着ていた白いＴシャツがみるみる赤く染まってい
さてさて……どうしたものかな。まずは止血だ。

blood summonsで胸の辺りの血溜まりを固形化して止
血する。

足元にも血溜まりができています。痛みはあるが、これは好都合だ……。

覚悟してもらおうか……！

俺は自在に動く帯を作り出し、ゼラの首に巻き付けた。

そのまま帯を一気に縮小させた。首は勢いよく締め上げられ、
帯を持っている俺の体は勢いよく引っ張られる。

その勢いを利用して、ゼラの顔面に全力の蹴りを喰らわせた。

「ぐぶあっ！」

両端からの力に耐えきれず帯が千切れた。同時にゼラの体も飛ばさ
れた。

かなりのダメージを与えた筈だったが、ゼラはゆっくりと起き上
がった。

その口は不気味な笑みを浮かべている。

「ふふ……ふふふ……良いぞ良いぞ……！」

それでこそだ！ 我よりも強い相手……嗚呼、血沸き肉踊るとはこの事か……！

もっと、もっとだ！ もっと激しく命を散らそうではないか……！」

ゼラは何かを詠唱し始めた……。

> i 3 2 4 6 0 — 1 5 6 3 <

B a t t l e ・ 6 1 V S 憑依魔神ゼラへ5 (後書き)

次回予告

それは本能か、仕組まれたものなのか。

ゼラは力を暴走させて空也に戦いを挑んだ……！

そして古の魔神編、クライマックス！ 二人の勇者は協力し、魔神を討つ！？

次回 B a t t l e ・ 6 2 V S 憑依魔神ゼラへ6

「俺は命は散らさない。散らすのは……」

B a t t l e ・ 6 2 V S 憑依魔神ゼラへ6 (前書き)

短く感じますか？

でもいつもと同じ文字数なんですよ、これが

Battle・62 VS 憑依魔神ゼラへ6

「ブツブツブツブツ……」

空と海と大地と生命を造りし全知全能なる神の力を行使する……！
タブーハンド クリエイターハンド
執行！ 魔神の手、創造主の手！」

ゼラは魔法で巨大な二つの手を出現させた。

一つは以前黎が使っていたので見覚えがある、青白い光を帯びた右手。

もう一つは……赤黒い光を帯びた不気味な左手。

！DANGER！

魔神の手

禁術。

創造主の手と対となる魔法で、同時に出現させると使用者への負担が極めて大きい。

莫大なエネルギーを秘めており、様々な能力が備わっているが、その全てを知られる事なく禁術に指定された為、謎の多い魔法である。

！DANGER！

「その魔法……！ 負担が大きい筈だろ？」

「ああ、心配するな。私の負担は全てこの依り代が肩代わりしてくれるからな！」

「ちつ、身代わりってか……気に入らないやり方だ。」

創造主の手は予想外に素早い動きで俺を潰そうとする。

蠅になった気分で手の動きを掻い潜って避けていく。

ゼラの至近距離まで近づくと、横から赤い光の矢が数発飛んできた。避けながら確認する。矢の発射元は魔神の手だ。

視線をゼラに戻すといつの間にやら創造主の手がそこにあり、ゼラを覆っている。

再び魔神の手に視線を戻す。魔神の手は握り拳をつくり、床を殴り付けた。

威嚇のつもりなのだろうか、と思ったがどうやら違う。

魔神の手が殴り付けた時にできた床の亀裂が俺の方に伸びてきた。

亀裂はやがて消えたが、足場が悪くなり動き辛くなった。

「クツクツク……もはや貴様は我に触れることもできない？」

創造主の手と魔神の手が合わさった時、隙はなくなる！」

巨大な赤と青の手は手を擦り合わせる。その二つの間に紫色の火花が散る。

そして火花は形を成していき、球体となった。

魔神の手がそれを掴み、俺めがけて投げつけた。急いで逃げようとしたが……

（脚が……！？）

脚が動かない。見ると、巨大な青い手……創造主の手が俺の両足を掴んでいた。全力なら振り払えたが、それほどの余裕はない。球体がすぐそこに迫っていた。

「——はっ」

黎は突然目覚めた。

体調は万全、風邪が治ったのだと直感した。

念のために側にあった体温計で熱を測ったところ、36・5度。平熱だった。

黎はもそもそとベッドから起き上がる。

居間まで歩いていくと、寝惚けた目でキョロキョロと兄を探し始めた。

やがてゼラの討伐に向かったのだと思い出し、探すのをやめた。

黎は廊下に封印の壺を見つけた。

「これ……忘れてる……？」

ゼラ討伐隊は壺のレプリカを持っている。

黎はそんな事は知らず、セロテープまみれの壺を持って部屋を出ていった。

「——かはっ」

口の中に血が混じった。球体の威力はかなり強力だったようだ。二つの手が迫り、俺に止めを刺そうとする。

——ふざけるな。こんなもので俺は死なない。

俺は大量の血で二つの巨大な手を作った。

それぞれに魔神の手、創造主の手を止めさせ、ゼラへの道が開いた。

ゼラは魔力の刃を大量に向かわせてきた。

その飛ばされた刃を足場にして飛び移り、ゼラに踵落としを喰らわせる。

ゼラは両腕をクロスさせて踵落としを防御。

その腕を足場にゼラの背後に跳び、背中に正拳突きを喰らわす。

ゼラは対応できずに吹き飛ばされた。が、吹き飛ばされながらこちらに向き直った。

「ぬあああ！」

ゼラは風の刃を大量に飛ばす。

これは足場にできない。なら全てを回避するのみだ！

「有り得ない！ 風の刃を避けるなど……！」

「喰らえ……！」

ゼラの顔面に全力の一撃が突き刺さった。

ゼラは倒れる学園長の近くに吹き飛ばされた。

同時に二つの血の手は魔神の手、創造主の手を握り潰した。

手は潰され、魔力も残り少ない。これでゼラにはまともな戦力がなくなつた。

「く……う……く……！」

ゼラは学園長に魔法の刃を突きつけた。

「動けばこの老人の命はないぞ……！」

「——落ちたのう、ゼラ」

気絶していたはずの学園長が口を開いた。

同時に魔力を解放し、ゼラに金色の魔力をぶつけた。

ゴースト・アビリティ

超上級補助魔法。

憑依タイプの魔物を排除する魔法。

しかし魔物そのものが弱っていないと排除は成功しない。

「最初の攻撃で気づかなかったのが不味かったな。
僕はあの程度の攻撃、障壁で防ぐことができる。」

僕はそもそも気絶もしていなければまともな攻撃もしておらん。
それを貴様は自分の力だと勘違いしたようだがな……。」

「なっ、き、貴様あ……！ 我を欺いたのか……！」

「……だが空也君がいなければ成功しなかった。有難う。」

「どういたしまして。……ってか、そういうのは事前に言って欲しいんですが。」

「ゼラが遣わせた虫に見張られていたからな……。」

ゼラは驚愕の表情を浮かべ、よろよろと学園長から離れる。
ゼラの体が金色に光り始めた。同時にゼラは苦しみ始める。

「うぐっ……く、ぐ、ぬうう……うああああああ！」

絶叫と共に、ゼラは依り代の生徒から出ていった。

「今だ！ 封印の壺よ、ゼラを封印せよ……！」

『やめろ……！ おのれええ……！』

ゼラの本体は見えない。が、サーチで確認することはできる。

それによると……ゼラは、壺に吸い込まれて――

――吸い込まれて、いなかった。

> i 3 2 4 6 0
―― 1 5 6 3
<

B a t t l e ・ 6 2 V S 憑依魔神ゼラへ6 (後書き)

次回予告

不完全な封印の壺によりゼラを逃がしてしまう学園長。

「逃がすかよ……!!」

空也とゼラの逃走劇が始まった!

次回 B a t t l e ・ 6 3 V S 憑依魔神ゼラへ7

「これだ……これは素晴らしい……!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9449u/>

ファルシオン学園の闘争記

2011年12月18日08時04分発行